

The Molecular Biology Society of Japan

# MBSJ NEWS

日本分子生物学会

2023.2

No.135

# 会報

## 目次

■ 第23期理事長挨拶	1
■ 第23期役員・幹事・各委員会名簿	3
■ 第46回日本分子生物学会年会 (MBSJ2023) 開催のお知らせ (その2)	4
【年会長の挨拶 その2】	4
【プログラム概要】	5
【フォーラム企画の公募について (応募締切: 2023年4月27日(木))】	8
【日程表 (予定)】	9
■ 第45回日本分子生物学会年会 (MBSJ2022) 開催報告	10
■ キャリアパス委員会 年会企画報告	13
■ キャリアパス委員会 年会における発表者の属性統計調査報告	21
■ 研究倫理委員会 年会企画報告	23
■ 第12回 (2024年) 日本分子生物学会 国際会議支援 募集のお知らせ	24
■ 『自己変革～石浜明先生を偲んで～』	26
■ 第23期新理事会準備会議記録	30
■ 第22期・第23期 合同理事会記録	31
■ 令和5年度 (第45回) 通常総会記録	37
■ 令和4年度 (2022年度) 決算報告	40
■ 監査報告書	46
■ 令和5年度 (2023年度) 活動予算書	47
■ 学術賞、研究助成の本学会推薦について	49
■ 学術賞、研究助成一覧	50
■ 賛助会員芳名	55



特定非営利活動法人  
日本分子生物学会

<https://www.mbsj.jp/>

第46回

# 日本分子生物学会年会 2023

年会長：林 茂生(理化学研究所生命機能科学研究センター)

オンライン  
先行開催 11/27(月)～12/1(金)

オンサイト  
開催 12/6(水)～8(金)  
神戸ポートアイランド

演題投稿期間：7/3(月)～7/31(月)  
事前参加登録期間：7/3(月)～10/10(火)



## 第 23 期理事長挨拶



### 会員の皆様へ

このたび第 23 期理事長に選任され、学会運営を担当することになりました。これからの 2 年間、微力ながら精一杯頑張りますので皆様どうぞご指導のほどよろしくお願いいたします。以下、本学会がどのような存在であったかに関して、ふたつ私観を述べさせていただきます。

#### 日本分子生物学会は「ワクワク感」を提供する

本学会は会員数が約 12,000 名で、臨床を除く生命科学系の学会としては国内最大規模となります。なぜこの学会がこれだけ多くの人を惹きつけたのでしょうか。私の答えは、この学会に来れば常に最先端の「エッジの効いた」研究に触れられる、わくわくできる、今必要な新しい情報が得られる、という期待感だと思います。さらに（大規模であるが故に）この学会で発表すれば多くの人に知ってもらえる、多くの人と出会えるチャンスがある、という期待感もあることでしょう。そして、このような期待感を支えてきたのは、この学会の「自由で」「ボーダーレスな」雰囲気だと思います。老いも若きも立場を超えて、サイエンスという共通言語で自由に議論する（時には激論する）。そして分野もボーダーレスで、学際どころか新しい分野を作る動きを常に取り込む活力が溢れています。例えば生物情報系の新理事の一人は、「この学会で自分は門外漢だと思って参加していたのに気がついたら取り込まれてしまっていた」と仰っていました。既存の枠組みを超えて常に未来志向であるのがこの学会の大きな魅力であると思います。このエッジ感、ワクワク感、を大事にしていくことを大会組織委員会と共に目指したいと思います。

#### 日本分子生物学会は生命科学コミュニティにおける「社会的責任」を果たす

本学会は、生命科学研究分野における課題をきちんと取り上げて活動をおこなってきたことも大きな特徴です。単に議論するだけでなく、国の制度にも繋げてきた例として学振特別研究員・RPD（出産育児のための研究中断後復帰を支援する制度）の立ち上げならびにその期間延長を推し進めてきたという実績が挙げられます。男女共同参画委員会は 10 年前にキャリアパス委員会へと発展し、毎年様々な課題を大会において議論し啓発活動を行なっています。タブー視され手をつけにくいとされてきた研究倫理問題にも真正面から取り組んできました。様々なご意見があったことは私も承知しておりますが、そこから生じた若手教育活動（正しい統計やデータの扱い方の周知）はこの分野として未来志向の重要な意義があったと思います。高校生への生物教育活動も本学会ならではの取り組みで、会員の皆様のボランティア精神に支えられてこれまでに 100 件以上の高校への出前講義が行われています。学会大会への高校生の参加も増えてきています。こんな草の根活動をしている学会は他にはないのではないのでしょうか。地震の際に復興支援掲示板を

運営したり、COVID-19に関連した海外渡航情報掲示板を作ったりと危機対応も随時行っています。その他にも学会誌 Genes to Cells の運営や海外学会との連携・国際化など、非常に幅広く多くの活動を行っています。これまで本学会に携わって、熱い思いで貢献してこられた方々に頭が下がります。

### 第23期では何を指すか

現在新執行部の方々と、これらの本学会の良さをどう継承・発展させていくかについて議論を行っており、第23期の計画案を立てつつあります。問題意識をいくつかシェアさせていただきます。

#### ・生命科学研究分野の環境改善について

日本の生命科学分野の世界におけるプレゼンスが、直近10-15年間で急速に減退したことは広く認識されています。この減退は日本の生命科学分野における国の政策転換と密接に関わっています。大学法人化で運営交付金が減少し研究室配分がゼロになるケースが多いのにも関わらず、年200万円以上の誰もが応募できるオープンでフェアな基盤研究費を激減させてしまったこと。大型の研究費はほとんどが国の戦略目標に沿った狭い分野にしか出されていないこと。つまり自由な発想に基づく研究へのサポートが脆弱になってしまったことが日本発の創造的な研究力を削いでいます。加えてプロジェクトごとに支給される研究費では長期の雇用ができず、さらに10年無期転換の縛りによっても長期雇用が難しくなっています。研究者の多くがこの深刻な状況に大きな危機感を持っているにも関わらず、その声が行政に届いているとは言えません。新執行部としては、日本の生命科学分野を活性化させるために、そして何より次の世代の研究者のために、声を上げるべく草の根運動を始めようとしています。何が有効な手段となりうるか等、皆様からご意見・アドバイスをいただけましたら大変有り難いです。

#### ・多様性について

日本はジェンダー equity 後進国です (gender gap index 2022 は世界 146 カ国中 116 位)。私も自分の大学でその対策の末端に加わっておりますが、簡単に改善しないことを実感しております。だからこそ継続的に努力しなければいけませんし、本学会でも多くの方が意識高く取り組んでくださってきた良い流れをさらに推し進めなければいけません。多様性としてはジェンダー・LGBTQ+に加え、国籍、地域も大きな問題です。特に地域格差は(国の進めてきた「選択と集中」等の結果として)いまや非常に大きな課題となっています。学会として何が出来るのか、これから皆様と共に考えていきたいと思えます。

「ワクワクする」サイエンスを軸にしつつ、皆様のご指導を賜りながら様々な課題に取り組めれば幸いです。是非会員の皆様からのご意見をいただきたく、何卒よろしく願いいたします (事務局宛: info@mbsj.jp)。

2023年1月

特定非営利活動法人日本分子生物学会 第23期理事長  
(東京大学大学院薬学系研究科)

後藤 由季子

## 第23期役員・幹事・各委員会名簿

### 理事長

後藤由季子（東大・薬）

（任期：2023年1月1日～2024年12月31日）

### 副理事長

見學美根子（京大・iCeMS）、塩見 春彦（慶應大・医）

### 理事

阿形 清和（基生研）

大谷 直子（大阪公大・医）

岡田 由紀（東大・定量研）

鐘巻 将人（遺伝研）

加納 純子（東大・総合文化）

木村 宏（東工大・科学技術創成研究院）

胡桃坂仁志（東大・定量研）

小林 武彦（東大・定量研）

小安 重夫（理研・IMS）

斉藤 典子（がん研）

白髭 克彦（東大・定量研）

杉本亜砂子（東北大・生命）

高橋 淑子（京大・理）

中川 真一（北大・薬）

中島 欽一（九大・医）

中西 真（東大・医科研）

中山 敬一（九大・生医研）

二階堂 愛（医科歯科大・難治研 / 理研・BDR）

仁科 博史（医科歯科大・難治研）

濡木 理（東大・理）

深川 竜郎（阪大・生命）

三浦 恭子（熊本大・生命）

三浦 正幸（東大・薬）

水島 昇（東大・医）

柳田 素子（京大・医）

吉田 稔（理研・和光）

吉村 昭彦（慶應大・医）

（五十音順）

### 監事

佐々木裕之（九大・生医研）、塩見美喜子（東大・理）

### 幹事

庶務幹事 岡田 由紀（東大・定量研）、中川 真一（北大・薬）

会計幹事 東山 哲也（東大・理）

編集幹事 上村 匡（京大・生命）

広報幹事 木村 宏（東工大・科学技術創成研究院）

国際化担当幹事 深川 竜郎（阪大・生命）

### 第23期執行部

後藤理事長、見學副理事長、塩見副理事長、岡田庶務幹事、中川庶務幹事、木村広報幹事

### Genes to Cells 編集長

西田栄介（理研・BDR）

### 賞推薦委員会

斉藤典子（委員長）、加納純子、中島欽一、水島 昇、吉田 稔

### 研究助成選考委員会

杉本亜砂子（委員長）、阿形清和、白髭克彦、濡木 理、柳田素子

### 国際会議支援・選考委員会

小林武彦（委員長）、高橋淑子、中西 真、中山敬一、仁科博史

### キャリアパス委員会

胡桃坂仁志（委員長）、井関祥子、岩崎由香、大川恭行、甲斐歳恵、鐘巻将人、  
來生（道下）江利子、佐田亜衣子、武部貴則、西山朋子、平谷伊智朗、三浦恭子

### 研究倫理委員会

小安重夫（委員長）、大谷直子、二階堂愛、三浦正幸、吉村昭彦

### 生命科学教育

篠原 彰

## 第46回日本分子生物学会年会 開催のお知らせ(その2)

会 期：

(オンライン開催) 2023年11月27日(月)~12月1日(金) ※5日間

(現地開催) 2023年12月6日(水)~8日(金) ※3日間

会 場：神戸ポートアイランド

年 会 長：林 茂生 (理化学研究所・生命機能科学研究センター)

演 題 登 録 期 間：2023年7月3日(月)~7月31日(月) ※予定

事前参加登録期間：2023年7月3日(月)~10月10日(火) ※予定

年会事務局連絡先：第46回日本分子生物学会年会事務局(株エー・イー企画内)

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-4-4 一ツ橋別館4階

Tel: 03-3230-2744 Fax: 03-3230-2479 E-mail: mbsj2023@aeplan.co.jp

年会ホームページ：<https://www2.aeplan.co.jp/mbsj2023/>

Twitter アカウント：[https://twitter.com/mbsj\\_2023/](https://twitter.com/mbsj_2023/)

### 【年会長の挨拶 その2】

皆さん、昨年末の第45回年会はいかがでしたでしょうか？ 私自身は幕張メッセの広大な会場を活用したさまざまな企画を見て、参加して大いに楽しませてもらいました。深川年会長をはじめとする運営委員の皆様のアイデアと多大なご尽力に深く感謝致します。会員の方からの意見も集めていますが大いに評価される声が多く、成功したアイデアは改善を加えて次回にも生かしたいと考えています。さて学会の年会機能の中核は研究成果を発表し、自由闊達に相互批判を行う事です。また生命科学系最大規模の分子生物学会では、自らの研究分野から踏み出して日常では触れることのない分野の話題を学ぶことで研究の展開を図り、未来の共同研究者を発見する機会となるはずです。年会本部として企画をお願いした指定シンポジウムではオーソドックスな分子生物学から踏み出した研究の話題が含まれています。またコアな話題においては新たな化学反応を期待してちょっとかけ離れた領域からオーガナイザーをお招きしたものもあります。会員が工夫を重ねて提案していただく公募シンポジウムとフォーラムとを合わせて楽しめる年会を企画していきます。

幕張年会においての次期年会長としてのお仕事として、企業ブースを回っての挨拶があります。出展者とお話しをして年会の感想と希望を伺ってから翌年の出展をお願いします。二日間をかけてほぼ全てのブースを回ることはなかなかの荒行でしたが、各企業の推しの製品説明を伺うことで技術開発の動向を把握する事ができ、過去に取引があった会社の担当者からご挨拶を頂いて顧客を大事にされている姿勢を感じました。また過去に研究者として活躍されていた方が企業のスタッフとして年会に参加されているケースも数多く見る事ができました。年会予算の大きな部分は企業協賛金でまかなわれています。私たちの研究は企業が提供する試薬と機器を用いて遂行され、研究室の卒業生の多くは関連企業に職を求めます。年会的場において研究者と協賛企業がより深く知り合うことで分子生物学の研究は更に活性化し、分野は広がり、深まるはずだと考えて、両者の交流が深まる工夫を用意したいと考えています。

会員の皆様には昨年の年会で得た刺激とアイデアを生かした研究を進め、今年の神戸年会で発表していただくことを楽しみにしています。

第46回日本分子生物学会年会

年会長 林 茂生

(理化学研究所・生命機能科学研究センター)

How was the 45th Annual Meeting last December? I personally enjoyed it very much thanks to the various new formats taking advantage of the vast venue of Makuhari Messe. I would like to express my deep appreciation to President Fukagawa and all the steering committee members for their ideas and great efforts. We have been collecting opinions from MBSJ members, and many of them were very positive. We would like to inherit some successful ones for the next meeting. The core function of the annual meeting is to present research results and to engage in a free and critical exchange of ideas. In addition, as the largest scientific society in the life sciences in Japan, MBSJ provides opportunities for participants to step outside their own research field to discover fresh ideas and future collaborators. We commissioned expert scientists to organize symposia, including topics beyond orthodox molecular biology. For some core topics, we have invited organizers from remote fields in anticipation of fresh interaction. We are also inviting proposals for symposia and forums from MBSJ members.

One of my jobs at the Makuhari Annual Meeting was to make the rounds of the corporate booths. I talked with exhibitors about their impressions of the Annual Meeting and asked them to exhibit the following year. Honestly, it was quite a rough job to visit all the booths over a two-day period. But it was quite enjoyable to grasp the trends in technological development in commercial products, and I felt their enthusiasm for supporting customers. I also saw many people who had been active scientists in the past, now participating in the annual meeting as staff members of companies. Corporate sponsorships cover a large part of the annual meeting budget. Our research is conducted using reagents and equipment provided by companies, and many of our graduates seek jobs in related companies. We believe that the research in molecular biology will be further stimulated and the field will be broadened and deepened if researchers and sponsors get to know each other more. We would like to provide the opportunity to deepen the interaction between the two.

We look forward to seeing you at the Annual Meeting in Kobe.

President of MBSJ2023

Shigeo Hayashi

(RIKEN Center for Biosystems Dynamics Research)

## 【プログラム概要】

### ◆オンライン開催（11月27日(月)～12月1日(金)）

指定シンポジウム 10 企画、公募シンポジウム 30 企画程度（予定）、高校生発表

開催形式：Zoom ライブ配信 + オンデマンド配信

### ◆現地開催（12月6日(水)～8日(金)）

公募シンポジウム 80 企画程度（予定）、フォーラム、サイエンスピッチ（ショートトーク）、ポスター発表、高校生発表

開催形式：登壇者、聴講者ともに現地参加のみ

（オンライン配信やオンライン発表の対応はいたしません）

### ◆指定シンポジウム（全 10 テーマ）※オンライン開催

以下の 10 テーマで指定シンポジウム企画のオンライン開催を予定しております。

#### 1. 動植物を通じて考えるリプログラミング原理と多様性

Principles and diversity of nuclear reprogramming across kingdoms

オーガナイザー：宮本 圭（近畿大学）、池内 桃子（奈良先端科学技術大学院大学）

リプログラミングは、分化した細胞が未分化状態へと遷移するために必須であり、動植物いずれにおいても観察される現象である。しかし、リプログラミング研究において、動物科学者と植物科学者の間でその普遍原理や多様性を協力して探る試みは未だ少なく、リプログラミングの包括的な理解は達成されていない。そこで本シンポジウムでは、コケ、種子植物、両生類から哺乳類に至るまで、幅広い生物学的システムを使用してリプログラミングを研究している科学者を集め議論する場を設ける。多様な生命システムをリプログラミングという共通の枠組みの中で議論することにより、リプログラミングの基本原則と多様な特徴を探求し、新たな研究の方向性を切り拓くことを目指す。

## 2. 進化する共生の理解

### Evolving Symbiosis

オーガナイザー：深津 武馬（産業技術総合研究所）

ERATO 共生進化機構プロジェクトでは、昆虫-大腸菌人工共生系を用いた大規模進化実験、および培養困難な共生細菌の遺伝子操作や全ゲノムクローニングを可能にする新規技術開発を突破口として、さらに無菌マウス腸内での相互進化系に展開し、無脊椎動物から脊椎動物にわたる共生機構の共通性と多様性の理解に取り組んでいます。本シンポジウムでは、共生進化の機構および起源への実験進化による実証的アプローチについて、最先端の研究分野の現状を共有することをめざします。

## 3. 表現型可塑性とエピゲノム制御による生物の適応戦略

### Adaptive tactics via phenotypic plasticity and epigenomic regulations

オーガナイザー：三浦 徹（東京大学）、角谷 徹仁（東京大学）

地球上の多様な生物は、進化の過程で様々な適応戦略を獲得してきた。モデル生物と非モデル生物の両者における分子生物学やゲノミクスの進展から、どのような機構を獲得することで生物が表現型進化を成し遂げてきたかについての研究成果が蓄積しつつある。本シンポジウムでは、表現型可塑性とエピゲノム制御を用いた適応戦略に着目し、この分野で研究を展開している研究者による最近の発見から、動物と植物の枠を超えた新たな生物進化の原理を考察する。

## 4. 遺伝子制御ダイナミクスの解明：イメージングからシングルセルオミックスへ、そしてその先へ

### Resolving gene regulatory dynamics: from imaging to single-cell omics and beyond

オーガナイザー：大川 恭行（九州大学）、Timothy Stasevich（Colorado State University）

遺伝子は、細胞核のクロマチン構造レベルで転写され、その後、細胞質で必要に応じて翻訳され、タンパク質を合成する。このように、遺伝子発現は、外来および内在性のシグナルによって、複数の階層レベルで制御されるダイナミックで複雑なプロセスである。本シンポジウムでは、ライブセルイメージングからシングルセルオミックス、さらにその先のアプローチを用いて、遺伝子制御における様々な事象のダイナミクスを解析している研究者とともに、最先端のトピックスを議論したい。

## 5. オルガノイドを用いたヒト発生学

オーガナイザー：永樂 元次（京都大学）

近年、マウス等のモデル生物とは異なるヒト特異的な発生様式について細胞レベル・分子レベルで明らかになりつつある。本シンポジウムではオルガノイドを用いて、ヒト特異的な発生機構に迫る研究者に焦点を当て、今後のヒト発生学およびオルガノイド技術の方向性について議論したい。

## 6. クロススケール計測技術で細胞内のメゾスケールの構造動態に迫る

### Cross-scale analyses visualize the mesoscale structural dynamics in cells

オーガナイザー：田中 元雅（理化学研究所）、仁田 亮（神戸大学）

生命科学あるいは基礎医学研究者の究極の目標の一つは、生命現象あるいは疾患を、原子・分子レベルから個体レベルまで切れ目なく理解することである。そして、これを達成するためには、20-500nm 程度のメゾスケールの細胞内現象の構造動態を可視化・定量化する技術の開発・整備が必要である。本シンポジウムでは、様々な細胞内構造・動態解析技術を開発あるいは応用し、メゾスケールの生理・病理現象の解明に取り組む国内外第一線で活躍する研究者にご参集いただき、メゾスケール解析技術の現状と展望を議論する。

## 7. 冬眠と代謝制御

### Metabolic regulation in hibernation

オーガナイザー：山口 良文（北海道大学）、平野 有沙（筑波大学）

冬眠は、飢餓と寒冷に見舞われる厳しい季節を低体温・低代謝の休眠状態で乗り切る生存戦略である。冬眠現象自体は古くから人々の興味を惹いてきたが、その制御機構は未だ多くの点が謎のまま残されている。近年、解析技術の進歩や休眠状態を誘導する神経細胞の発見などにより、哺乳類の冬眠現象に新しい視点で切り込むことが可能となった。

本シンポジウムでは、冬眠・休眠中の動物の体で生じる代謝変化に着目した最新研究を紹介する。

## 8. 合成バイオテクノロジーとその将来展望

### Synthetic biotechnology and beyond

オーガナイザー：鐘巻 将人（国立遺伝学研究所）、末次 正幸（立教大学）

生命科学の追求は時に革新的テクノロジーを生み出し、そのテクノロジーが分野をこえて広がる場所に新たなステージが生まれる。本シンポジウムでは、生命システムを自らデザインして作り上げたり、機能を拡張していくアプローチを合成生物学と位置づけ、合成生物学的アイデアを取り込んだ最新のテクノロジーを取り上げる。分野を超えたテクノロジーの議論の中から、生命科学の「Next Game Changer は何か」を野心的に展望していきたい。

## 9. 社会性行動の動的な制御を支える神経基盤

### Neural basis for dynamic modulation of social behaviors

オーガナイザー：磯江 泰子（ハーバード大学）、宮道 和成（理化学研究所）

ヒトを含めて社会を構成する動物はそのライフステージ、経験、社会的な関係性を踏まえて適切に社会性行動を調整する必要がある。近年、このような社会性行動の動的な制御を支える神経基盤についての解明が進展している。そこで本シンポジウムでは分子遺伝学的ツールの発達した魚類・げっ歯類をモデルに、分子から神経回路、神経ダイナミクスを経て行動出力の調整に至るまで階層縦断的な新進気鋭の研究を中心に、今後の課題を議論する。

## 10. ウイルスによる Natural な外部刺激が細胞内・生体内で引き起こすイベントを知る

### What will happen in your bodies and cells upon virus infection?

オーガナイザー：澤 洋文（北海道大学）、渡辺 登喜子（大阪大学）

ウイルスはタンパク質の殻と核酸、時に宿主細胞由来の脂質二重膜で構成されるシンプルで微小な構造体である。宿主細胞に感染したウイルスは、増殖するために細胞内機能をハイジャックし、時には細胞内の構造を都合良く作り変える。ウイルス感染がトリガーとなり、細胞内・生体で様々な現象が起こり、時に細胞傷害・疾病を起こす。本シンポジウムは、ウイルスによる外部刺激＝感染によって生じる細胞内・生体内イベントについての理解の深化を図る。

### ◆公募シンポジウム（約 110 テーマ予定）

多数のご応募をいただき、1月31日に募集を締め切りました。採否結果は2月下旬に応募者へ通知予定です。

### ◆一般演題（公募シンポジウム口頭発表・サイエンスピッチ（ショートトーク）・ポスター）

公募シンポジウムでは一般演題から演題を採択いただきます。また、昨年同様に、一般演題の投稿者のうち希望者には、ポスター発表と併せてサイエンスピッチ（ショートトーク）を行っていただく予定です。

演題投稿の受付開始は2023年7月3日(月)を予定しております。投稿手順などの詳細は6月発行の次回会報、および年会ホームページにてご案内いたします。多数の演題投稿をお待ちしております。

### ◆フォーラム

2月下旬より、日本分子生物学会の会員の皆様からの企画公募を受け付けています。後述の募集要項を参照の上、奮ってご応募ください。

### ◆高校生発表

高校生による口頭・ポスター発表を予定しています。

### ◆バイオテクノロジーセミナー

企業との共催によるランチョンセミナーを開催いたします。

#### ◆その他の企画

その他の企画は詳細が決まり次第、年会ホームページにてご案内いたします。

### 【フォーラム企画の公募について（応募締切：2023年4月27日(木) 17:00）】

生命科学と関連するが、シンポジウム形式にとらわれない、比較的自由度の高い企画や、技術開発あるいは社会との関連が深い企画を「フォーラム」と位置づけ、1テーマ90分の時間枠（18:30~20:00）で、日本分子生物学会の会員の皆様より企画を公募します。年会ホームページ内にリンクされている応募サイトより奮ってご応募ください。

※フォーラムは現地開催のみとなります。オンライン配信やオンライン発表の対応はいたしませんので、ご注意ください。

新学術領域、学術変革領域、CREST、さきがけ等の「冠」企画の実施も可能とします。ただし、班会議と同様の企画にならないよう、領域外の講演者を必ず含めてください。ホームページなどへの冠表記には、20万円の協賛金の負担をお願いいたします。冠表記を希望する方は、応募サイトの該当欄へ掲載を希望する団体名等の必要事項をご入力ください。

#### ◆応募要領

年会ホームページより専用の応募サイトにアクセスし、4月27日(木)17:00までに下記の必要情報をご登録ください。

- 1) テーマタイトル（和文・英文）
- 2) 企画略称
  - ・日本語8文字以内、英語5単語以内（半角文字も入力可能だが、全角文字と半角文字が混在する場合、半角文字も1文字としてカウント）。
  - ・可能な限り一般的ではない英語の略称は使用せず、企画の内容が分かるようなものとする。
  - ・化学式、数式の使用は極力避ける。
- 3) オーガナイザーの氏名（和文・英文）・所属（和文・英文）・年代・職位
  - ※ 企画提案いただくオーガナイザーは1名でも2名でも構いませんが、少なくとも1名は分子生物学会の会員であることが必須です。
- 4) 概要（言語）：使用言語に応じて日本語あるいは英語のいずれか
- 5) 概要（文字数）：日本語の場合全角400文字程度、英語の場合半角800文字程度
- 6) 予定演者の氏名（和文・英文）・所属（和文・英文）・年代・職位（応募時点での演者による講演承諾は不要です。）
- 7) 予想される聴衆数
- 8) 冠の有無、団体名

※企画の採否ならびに開催枠の割振りはプログラム委員会で最終決定いたしますので、希望に沿えない可能性もございますこと、ご了承ください。

#### ◆お問合せ先

第46回日本分子生物学会年会事務局（株エー・イー企画内）

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-4-4 一ツ橋別館4階

Tel：03-3230-2744 Fax：03-3230-2479 E-mail：mbsj2023@aeplan.co.jp

## 【日程表（予定）】

### ■オンライン開催

11月27日(月)	指定 / 公募シンポジウム 9:00-11:15	公募シンポジウム 13:00-15:15	指定 / 公募シンポジウム 16:00-18:15
11月28日(火)	指定 / 公募シンポジウム 9:00-11:15	公募シンポジウム 13:00-15:15	指定 / 公募シンポジウム 16:00-18:15
11月29日(水)	指定 / 公募シンポジウム 9:00-11:15	公募シンポジウム 13:00-15:15	指定 / 公募シンポジウム 16:00-18:15
11月30日(木)	指定 / 公募シンポジウム 9:00-11:15	公募シンポジウム 13:00-15:15	指定 / 公募シンポジウム 16:00-18:15
12月1日(金)	指定 / 公募シンポジウム 9:00-11:15	公募シンポジウム 13:00-15:15	指定 / 公募シンポジウム 16:00-18:15

### ■現地開催

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
12月6日(水)	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 15%; text-align: center;">シンポジウム 9:30-11:45</div> <div style="width: 15%; text-align: center;">                     ハイテク セミナー 12:25-13:15                       学会企画 12:00-13:15                 </div> <div style="width: 15%; text-align: center;">シンポジウム 16:00-18:15</div> <div style="width: 15%; text-align: center;">フォーラム 18:30-20:00</div> </div>													
	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 15%; text-align: center;">貼付</div> <div style="width: 15%; text-align: center;">見学会 13:15-13:45</div> <div style="width: 15%; text-align: center;">ポスター 発表・討論 13:45-15:45</div> <div style="width: 15%; text-align: center;">撤去</div> </div>													
機器・試薬・書籍展示 9:30-17:00														
12月7日(木)	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 15%; text-align: center;">シンポジウム 9:30-11:45</div> <div style="width: 15%; text-align: center;">                     ハイテク セミナー 12:25-13:15                       学会企画 12:00-13:15                 </div> <div style="width: 15%; text-align: center;">シンポジウム 16:00-18:15</div> <div style="width: 15%; text-align: center;">フォーラム 18:30-20:00</div> </div>													
	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 15%; text-align: center;">貼付</div> <div style="width: 15%; text-align: center;">見学会 13:15-13:45</div> <div style="width: 15%; text-align: center;">ポスター 発表・討論 13:45-15:45</div> <div style="width: 15%; text-align: center;">撤去</div> </div>													
機器・試薬・書籍展示 9:30-17:00														
12月8日(金)	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 15%; text-align: center;">シンポジウム 9:30-11:45</div> <div style="width: 15%; text-align: center;">                     ハイテク セミナー 12:25-13:15                 </div> <div style="width: 15%; text-align: center;">シンポジウム 16:00-18:15</div> </div>													
	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 15%; text-align: center;">貼付</div> <div style="width: 15%; text-align: center;">展示会見学 13:15-13:45</div> <div style="width: 15%; text-align: center;">                     ポスター 発表・討論 13:45-15:45                       高校生 研究発表 13:45-15:45                 </div> <div style="width: 15%; text-align: center;">撤去</div> </div>													
機器・試薬・書籍展示 9:30-17:00														

※あくまで2023年2月時点での予定であり、今後変更される可能性があります。

## 第45回日本分子生物学会年会 (MBSJ2022) 開催報告

2022年11月30日から3日間、29年ぶりに千葉県の幕張メッセを会場として第45回日本分子生物学会年会(MBSJ2022)を開催した。新型コロナウイルス感染のパンデミック第8波が、まさに始まろうというタイミングであったものの、現地開催を基本としたハイブリッド年会として行い、盛会のうちに終了した。特に、若い人を中心としたSNSでは、楽しかったという声を多数聞くことができ、主催者一同喜んでいる。最終的には、6,358人の参加があり、通常のポスターとLate-breaking Abstractをあわせた一般演題2,566題を含め、全4,055題の発表があった。年会に参加していただいた会員の皆様には、心より感謝申し上げたい。実際、これまでにない企画を多く盛り込んだので、どのような経緯で、またどのような意図で本年会を運営したのかを以下に記す。

私、深川は、約4年前に当時の杉本亜砂子理事長からの推挙でMBSJ2022の年会長を仰せつかった。当時は、学会の庶務幹事などを務めており分子生物学会の執行部の立場でもあったが、学会活動の中心である年会をどう盛り上げるかは、一つの懸案事項でもあったので、年会長を引き受けるにあたり、「盛り上がる年会」にしたいという思いが、まずあった。というのも、私が大学院生の頃に参加した分子生物学会の思い出という「菌に衣着せぬ議論」であったからである。シンポジウムなどで元気のいい若手研究者が、演者になってかかり、議論をふっかけるさまをはじめて見た時、他の学会や研究会にない興奮を覚えたのを鮮明に覚えている。また、自身のポスターセッションでも食い入るようにデータを見られ、色々なことを質問され、喉が枯れるまで答えたものであった。最近の年会を見ていると、皆、なんとなくおとなしいように見えていたので、活発な議論のできるMBSJ2022を開催しようという基本コンセプトは、かなりはじめの段階で決めていた(ただし、「激論コロッセオ」という本年会のテーマ名自体は、後の組織委員会で永井健治さんや甲斐歳恵さんらと議論して決定された)。

もう一つの懸案事項が、年会を単独で行うか、他の学会と合同で行うかという点であった。分子生物学会は、生化学会との合同年会を開催したり、ConBioとして生命系の多くの学会を巻き込んで開催したこともあった。また、杉本理事長の時代には、日本生態学会との連携も行った。私は、分子生物学会が学際的であるべきという理念を鑑み、これまで連携したことがない学会と連携できないかと考え、生物物理学会との連携を考えた。昨今のイメージング技術の発展は、生命科学研究の発展には欠かせず、蛍光イメージングからクライオ電子顕微鏡を活用した研究は、分子生物学会年会でも多くの聴衆の興味をひくと思われた。また、生物物理学のリゴラスな考え方は、分子生物学の研究にも必要不可



図1. MBSJ2022の会場の様子。ポスター会場と講演会場が一体化して、参加者同士の密な交流が可能となっている。

欠な要素であるとも思っていた。そこで、当時生物物理学会の会長であった阪大の原田慶恵さんや、2019年生物物理学会宮崎年会の会長を務める予定であった同じく阪大の永井健治さんにお声がけをして、組織委員会に加わってもらい、学会同士でも連携の合意をしていただいた。このお二人と、阪大生命機能の同僚であり、国際経験が豊かな甲斐歳恵さんを組織委員会に迎え、私を含めて4名の組織委員会でMBSJ2022の準備を開始した。

組織委員会メンバーとコンセプトが決まれば、次は会場である。「激論コロッセオ」を体現するために、ポスター会場と講演会場が一体化したような会場が必要と感じていた(図1)。深川は、2009年の年会幹事を務めた際、その年会の年会会長であった小原雄治さんとそのような会場を作れるかを検討していたが、予算的、技術的問題で断念していた経験があった。しかし、海外の学会に参加するとそのような会場を作っている学会もあり、大きな場所さえ確保できれば、最近の音響・映像技術の発展も加わり、そのような会場作りは可能と思えた。また、最近の分子生物学会の年会会場は、横浜、神戸、福岡をローテーションしているが、そこにこだわらず会場を探した。大阪のインテックスや沖縄なども検討したが、最も大きな会場を適切な値段で確保できるのは、千葉県の幕張メッセだった。幕張では、29年前に年会を開催しており、深川も大学院生時代に参加した。当時はメッセの周りには何もなく寂しいところだったと記憶している。しかし、MBSJ2022の開催候補地となり、改めて幕張を視察すると、近年の発展によって周辺施設も充実し、アフターセッションも含めて、参加者には満足いただけると確信した。ともあれ、幕張メッセの大きな会場を確保でき、メッセ側も、MBSJを成功させたいという熱意が感じられ、ポスターと講演会場が一体化したような会場(図1)で年会を開催する方針がたった。この学会の開催にあたり、千葉県行政による種々のサポートを受けられたことは大きく、熊谷千葉県知事をはじめ、千葉県担当者には心よりお礼を申し上げたい。また、組織委員会の中で、年会の基本コンセプトを絵にすることによって我々の体現したいことを主張すべきという意見が出た。そこでウチダヒロコさんにイラストを担当していただき、甲斐歳恵さんが中心となってMBSJ2022のポスターを考案した(図2)。「激論コロッセオ」の雰囲気が一目でつかめる秀逸なデザインとなっている。ウチダさんには、ポスターだけでなく、各種グッズ、ガイドマップ、フォトブースのデザインなどご協力いただき、感謝を申し上げたい。

組織委員会のメンバーは、企画を考える上でいつも前向きであり、斬新なアイデアが毎回の委員会であがった。そこで、そのようなアイデアを具現化するためにも新しいメンバーを追加したいということで、神田元紀さん(理研)、須藤雄気さん(岡山大)、茂木文夫さん(北大)に加わってもらった。さらに組織委員会の公募という斬新なアイデアで、樺山一哉さん(阪大)、野間健太郎さん(名大)も加わり、これらのメンバーで多くの企画を考えていった。プログラム要旨システムは、確立したシステムに乗っかるより、多様な要望に柔軟に対応してくれそうなAGRI SMILE社を採用し、グラフィックアブストラクト(押しガチャ機能も含む)やポイントラリーのシステムの導入など新しい挑戦ができた。また、Meet my Hero/Heroine、千葉物産販売(利酒を含む)、科研費申請書個展、テーマソング、クラシック生演奏、工夫を凝らしたフォトブース、コンパクトなガイドマップなどなど年会を盛り上げる数多くの仕掛けにより、参加者同



図2. MBSJ2022のポスター。ウチダヒロコ氏のデザイン。

士の密な交流が可能になった(図1)。また、ポスター会場と講演会場が一体化した会場に行くためには、企業展示を通る必要があり、そのため、例年にもまして企業ブースを訪れる参加者が多く、企業側からも好評であった。年会の開催経費の多くは、協賛企業からのスポンサー収入に頼っており、コロナ禍の影響で落ち込んだスポンサー収入が回復したことは朗報と言える。

年会において、最も重要なのは、いうまでもなくサイエンスセッションの充実である。ケミカルバイオロジーの Alice Ting 博士、超解像イメージングの Stefan W. Hell 博士、液相分離の Tony Hyman 博士と世界最先端の研究者によるプレナリー講演(3人とも Zoom 講演であったのが少し残念であったが)に始まり、11 セッションの指定シンポジウム、101 セッションの公募ワークショップ、19 セッションのフォーラムが企画され、いずれも盛況であった。今回の年会では、これまでの分子生物学会で慣例的に行われていた一人一演題の制限をのぞいてみた。会員数などが全体的に減少傾向にある中、精力的な研究者には複数回登壇いただいて、年会を盛り上げてもらいたいという意図である。また、一般演題として2,003 題のポスターがあったが、そのうち「サイエンスピッチ」(この命名は、永井健治さんによる)と称する3分間のショートトークの枠を設け、526 題の講演があった。3枚のスライドに制限して研究内容の全体像をつかめるため、多くのセッションで立ち見が出るほどの活況となり、参加者に楽しんでいただけて嬉しく思っている。審査員として参加していただいた皆様方に感謝を申し上げたい。また、ピッチ演題の Top10% には、年会から賞を与え、そのうちのさらにトップ数名は EMBO が賞を出してくれた。さらに、EMBO press の head である Bernd Pulverer 博士によるポスタークリニックも行った。一流のエディターによるアドバイスは、参加者には大変有益だったと思う。

今年会の目標には、国際化を促進させるということも掲げていた。コロナ禍になる前の組織委員会では、欧米だけでなくアジアの若手から中堅クラスの PI を招聘して盛り上げたいという考えがあった。しかし、年会の要旨を提出する 2022 年の夏頃まで、コロナ禍の影響で日本政府は全ての外国人の日本入国にビザを要求しており、煩雑な手続きをしてまでどの程度の外国人が来てくれるか不安であった。10月にビザが不要となる方針に政府が舵をきり、実際オンラインだけでなく多数の外国人演者が現地で発表してくれたことは、国際化を促進させたと思う。さらに MIT の Iain Cheeseman さんと OIST の清光智美さんの協力を得て、アメリカ細胞生物学会(ASCB)と EMBO を含めた MBSJ-ASCB-EMBO 合同セッションを3日連続で開催した。内容などについては、清光さんが実験医学に記事を書いているので、ここでは詳細は述べないが、欧米の主要組織との連携は、今後の分子生物学会の方向性として重要であり、今後も継続的に取り組んでいただけると嬉しい。また、このような国際連携に関してヒューマンフロンティアサイエンス機構(HFSP)に高く評価され、年会へ寄付をいただいたので、ここに感謝の意を記しておきたい。

長い時間をかけて準備し、多様な取り組みを行った MBSJ2022 は、ワクワク感のある楽しい年会となり、一定の成功を収めて終了した。上記の組織委員、魅力的な演題を提案してくれたプログラム委員をはじめ、感染対策アドバイザーの嘉糠洋陸さん、ASCB 企画で活躍してくれた Iain Cheeseman さん、清光智美さん、ポスターデザイン担当のウチダヒロコさんには深く感謝いたします。もちろん、年会運営の全般を担当していただき、我々組織委員会の無理難題を処理していただいたエーイー企画および MBSJ 事務局の皆様にも心から感謝いたします。そして参加者の皆様、ありがとうございました。また、違う形でお会いできることを期待しています。

2023年2月  
第45回日本分子生物学会年会(MBSJ2022)  
年会長 深川竜郎  
(大阪大学大学院生命機能研究科)

※YouTubeのMBSJ2022チャンネルでは、MBSJ2022幕張会場の様子を撮影・編集したプロモーションビデオ「激論コロッセオ総集編」と閉会式の動画を公開しています。

<https://www.youtube.com/@mbsj2022secretariat>

## キャリアパス委員会 年会企画報告

—キャリアパス委員会の活動を振り返る—

2022年の分子生物学会年会では、「アカデミアからの起業」と、「研究室の働き方改革～with コロナ時代のネクストスタンダード～」と題した2つのランチタイムセミナーを開催しました。オンライン参加のニーズに対応するためにハイブリッドスタイルとし、現地とオンラインを合わせて初日は152名、二日目は175名の参加者を迎えました。前年に導入したオーディエンスインタラクティブツール（Slido）が好評を博しましたので、今回もこちらのツールを用いて、参加者と登壇者がリアルタイムに意見交換できるようにしました。年会企画の目標は、参加者が会場を出るときに明るくやる気みなぎる状態にすることでした。

初日の「アカデミアからの起業」は、深川年会長と甲斐プログラム委員長から提案を受けたテーマのひとつとして、キャリアパス委員会が協議のうえ実施を決定したものでした。研究者が会社を興すという、半ばニヤニヤしながら「お金儲けがしたいのでしょうか」、「まあそういう人もいるよね」、と他人事としてと捉えることが多い印象があります。そもそも基礎研究は学際性を追求するものであり、そのうえ日々の研究、学生指導、研究室や大学、研究所などの運営業務をこなすことに精一杯で、起業などととも、という声が聞こえてきそうです。OECDによる国際比較によると、社会全般の起業に関して、日本のベンチャーキャピタル投資額の対GDP比はG7諸国の中で最下位次点となっています。<https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/seicho/seichosenryakukaigi/dai8/siryuu1.pdf>

主な理由には、リスクをとることへの危惧感が大きいことがあげられています。また、OECDを引き合いに出すまでもなく、日本では起業の過程が複雑すぎることも指摘されてきました。

かつて海外でも事情はそう変わりませんでした。例えばクロマチン研究に大きな貢献をされた故 Alan Wolffe 博士が1990年代に Sangamo Biosciences 社に参画した際、そのニュースはアメリカ国内の研究コミュニティで驚きを持って迎えられました。しかし時を経た現在、欧米では、先端的な研究者がバイオテック会社を保有する、あるいはサイエンティフィックアドバイザーのような形で企業に関わることは珍しいことではありません。その業績が履歴書（CV）に記載されるようなステータスにもなっています。「こんなに先端的すぎる技術をいったい誰が購入するのだろうか、需要はあるのだろうか、

商売としてやっていけているのだろうか」と思わせるようなケースもありますが、それも含めてまずは状況を知りたいところです。ルールを知らなければゲームに参加できないのです。

本企画では、キャリアパス委員会の委員が知恵を絞る合い、起業に具体性をもたせるためには何を知るべきなのかを調査しました。その結果、アカデミア起業に実績を持つベンチャーキャピタル、大学による支援活動などを知り、そして実際に起業した研究者からの実体験などを聞くのがよいのではないかという結論にいたりました。当日は講演を引き受けてくださった先生方のおかげで大変迫力あるセミナーとなりました。Slidoを通して寄せられたコメントの中には、起業に興味を持っているからこのセミナーに来たのだ、という若手研究者からのものもあり、日本の未来はたしかに明るいと思確信しました。アカデミアでのポジションが限定的な現在、起業によって雇用が創生されることは大いに歓迎されることであり、研究分野が発展するための活路であるとも感じました。本企画の詳細は、当日見事な采配で司会を担当された鐘巻将人委員により以下にまとめられた通りです。ご覧になってください。

二日目の企画は、「研究室の働き方改革～with コロナ時代のネクストスタンダード～」と題したものでした。長い時間研究室にいることを良しとする理不尽なPIの要求や、研究室の習わしに従わなければいけない、といった旧態然とした研究室運営が未だに存在するのだろうか、あるとしたらいかに変えられるのか、変わらなくてはいけないのは学生か、あるいはPIか、といったやや過激ともいえる発想に基づいたものでした。PI、研究室員、学生それぞれが重圧のもとにすごす中、本企画が単なるガス抜きで終わってしまうことを心配しました。建設的なセミナーとすること、参加者が明るい気持ちで会場を発てることを目指し、委員会で何度も話し合いを重ねました。

夏に実施した事前アンケートでは、計397名の方々から貴重な回答をいただき、その結果を踏まえて当日の議論を行いました。予想以上にPIの参加があり、普段から研究室運営に心を砕き、情報収集に励み、試行錯誤されている様子が垣間見えました。コロナ禍で飲み会はおろか、なにげない立ち話さえもままならなかった期間を経て、研究室に導入された新たなコミュニケーションツールの利用状況などを共有できたこと、学生に不人気になりがちな「コアタイム」について現状とその意義などを議論できたことなどが成果となりました。司会を担

当された倉永英里奈委員の見事な采配と底抜けな明るさから、セミナーはあたたかく落ち着いたものになり、リーダーはかくあるべきを具現化していたようでした。参加者中には多くのPIが含まれており、情報収集に励み試行錯誤している様子がうかがえました。こちらの企画の詳細は倉永委員によりまとめられています。下記をご覧ください。

セミナー以外の活動としては、平谷伊智朗委員と学会事務局の尽力により、海外渡航情報掲示板が作成されたことが挙げられます。2022年は、オンラインで開催されてきた海外学会が次々と現地開催へ移行する年となりました。そこで海外渡航に必要なアプリ申請や旅行保険、ノーマスクでの会議状況、帰国に際して必要な諸々の手続きなどの情報や体験談を学会員から募りました。日本政府が長い間PCR検査陰性を入国の条件としていたため、研究者が学会に参加すると海外で足止めをくう事例が珍しくなかったのです。そのようなハプニングがあってもなお、顔をつきあわせたコミュニケーションは研究を推し進める絶大な効果がありました。こういった変化に対応するために、これらの情報共有は大きな役割を果たしました。

さてここからは、キャリアパス委員としての活動を振り返ってみます。分子生物学会は12,000名の会員をもつ基礎生命科学系で国内最大規模の学会であり、若手育成は最重要課題の一つです。超優秀なトップサイエンティストを輩出することはともかく、数も専門分野も増やして裾野をぐんと広げて堅牢な組織になることが求められるのではないのでしょうか。分子生物学会のキャリアパス委員会は、2013年に塩見美喜子先生を第一期委員長として設立されましたが、もとを辿れば2005年に大隅典子先生のもとに設立された「男女共同参画委員会」が主な基盤です。その間、あるいはそれ以前から脈々と大変な熱量をもって活動されてきました。私は2017年より小林武彦委員長、胡桃坂仁志委員長のもとで委員として、最後の2年間は委員長として合計6年間活動させていただきました。委員長としての2年間では13名の優秀で個性あふれる委員と協働しました。国公立および私立大学と民間の研究機関、男性と女性、とさらに地域性を考慮した多彩なメンバーで臨み、様々な意見を吸い上げることを目指しました。社会問題に取り組む楽しさと難しさを存分に体験しました。

ところで私が大学生の頃は「女性は仕事を持たずに家を守るのが第一」が通説でした。それをきちんと守らなかったいい加減さが、後に奨励されることになるとは、ただただ驚きでした。もちろん偉大な先達、指導者や家族に感謝して止まないですが、実は憤りの気持ちに駆

られたこともありました。若い人には、通説を信じてはいけません、と伝えたいのです。今の常識は未来の非常識かもしれない、平家物語の冒頭の「諸行無常」、あるいはアメリカの作家であるLouis L'Amourが唱えた「The only thing that never changes is that everything changes」という言葉は普遍的真理かもしれません。しかしこの考えはとりもなおさず自分に舞い戻ってきます。現在我々世代が若い世代に提案していることは本当に若手を幸せにしているのだろうか、という疑問を完全に払拭することはできません。例えば若手育成を謳った各種の賞や、女性研究者支援の活動。心穏やかにときにはゆっくり進みたい、という彼らをやや強制的に競争の中に落とし込んではいないだろうか、多様性を深めるつもりが皮肉にもある種の性質をもった一群を選択することになり、むしろ均一な集団にしてしまっていないだろうかと思ひます。

それでも今できる目の前のことに最善を尽くすことが若手をとりまく環境を改善し、分子生物学の研究分野を楽しいものにすると思えます。多様化が日本よりも進んでいると思われる欧米の動きから学べることもあるかもしれません。研究社会では個々人それぞれが特別であり、重要です。今後も慣性に身を委ねずに、時には無理をしてでも新しいことをポジティブに捉え、挑戦しつづけていきたいと思います。

最後に、親身に活動を支えてくださった分子生物学会事務局の並木さん、山口さん、福田さんに心から感謝申し上げます。

キャリアパス委員会  
委員長 齊藤 典子

※ランチタイムセミナーの全文記録及び、セッション中に「オーディエンスインタラクティブツール (Slido)」を使用して行った投票アンケート結果・参加者の皆様からの投稿コメント、事前アンケートの結果まとめなどは、学会HPでご覧いただけます。

#### 【アカデミアからの起業】

- 日 時：2022年11月30日(水) 12:15~13:30
- 会 場：幕張メッセ国際展示場 第16会場・オンライン
- 参加者数：152名

生命科学研究を取り巻く環境は常に変化している。かつて、アカデミアの研究者は基礎研究をしていれば十分とみなされていた。しかしながら、近年のファンディングは基礎研究成果を産業につなげることを狙ったものも多い。「10兆円大学ファンド」の設立は最もわかりやすい例だろう。保守的な研究者は昔を懐かしがり、国の施

策に疑問を感じる人もいる。一方で、海外を見るとかなり状況が違うようだ。基礎研究でバリバリ鳴らしている研究者がスタートアップに関与していたり、逆にスタートアップ会社からアカデミアに戻って研究を続けている研究者もいる。mRNA ワクチン開発者のカリコー・カタリン博士のキャリアなどは、大変興味深いケースではないだろうか。嘆くよりも、この状況を前向きに捉えて、将来学生やポスドクが活躍できる環境をもっと模索していくことが求められているのではないか、そんな思いを感じながらキャリアパス委員会においてテーマを議論した。

そこで、2022年ランチタイムセミナーのテーマを「アカデミアからの起業」と定め、現在の状況と参加者の意識を調査、議論することにした。しかしながら、残念なことにキャリアパス委員自身に、「アカデミアからの起業」に対する知識やノウハウがほとんどない。そこで4名のゲストを招聘し、前半において彼らのキャリアや仕事内容を講演して頂いた上で、後半にオンラインアンケートを行いながら議論する形式を採用した。ゲストの選定にあたっては多面的意見を期待して、起業を資金面から支えるベンチャーキャピタルの方（ファストトラックイニシアティブ・安西智宏先生）、アカデミア研究者の特許出願や企業との橋渡しをサポートする大学技術移転の方（東京大学 TLO・本田圭子先生）、実際に大学から起業した研究者（Rhelixa・仲木竜先生、GAIA BioMedicine・米満吉和先生）に講演を依頼した。

11月30日、幕張メッセ国際展示場第16会場において、152名（現地参加135名、オンライン参加17名）の参加者のもと、ランチタイムセミナーを開催した。

まず、ベンチャーキャピタリストの安西智宏先生から「ベンチャーキャピタリストから見る「起業」という選択肢」というタイトルでご講演いただいた。安西先生が定義するスタートアップとは、「革新的な技術で短期間における急成長を期待する企業」のことである。現在、スタートアップへの投資は年々伸びており、年間8千億円を超える資金が積み込まれているとのことである。しかしながら、安西先生によると、起業はサイエンス以外の要素も必要、かつ多数の人生を巻き込む責任があるために、誰にでもお勧めの選択肢ではないという。起業に向いているのは多少のリスクはとって目標に向けて今すぐ行動でき、社会や世界を変えたいという情熱を持った「アントレプレナー」と呼ばれる方々だということ。そして、ネットワーク形成が大切と強調された。アフリカの諺「If you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together」が示すように、仲間づくりが上手な人が向いている。未来の社会を変えたいという使命感を持った方には、是非スタートアップの世界に飛び込んで来てほ

しいというコメントで締め括られた。

次に、本田圭子先生から「アカデミアからの起業—大学技術移転機関の立場から—」というタイトルで講演が続いた。まず、博士課程後に特許事務所に就職し、その後弁理士資格を取得して、東大 TLO に就職したという経歴を紹介された。東大では年間550件前後の発明届があり、東大 TLO のメンバー16名で特許申請をサポートし、出願した特許の企業への売り込み、研究者の起業支援をおこなっているとのことである。企業に対して、年間100件程度のライセンス許諾に結びついており、その半分以上がスタートアップに対するライセンス許諾だそうである。そして、それらスタートアップの中では、ライフサイエンス分野が圧倒的に多いとのことである。続いて、スタートアップ起業に結びついた二つのケースを紹介された。いずれのケースも、東大 TLO との長期にわたる綿密なコミュニケーションの中から起業に到達したことから、起業に興味のある方は大学の産学連携部門に相談されることを勧められた。

続いて、仲木竜先生から「株式会社 Rhelixa の成り立ちより見るアカデミアからの起業」というタイトルでご講演いただいた。仲木先生は革新的技術や特許をもとにしたスタートアップとは視点が異なり、「若い人たちがいかに研究で収入を得て生活できるようにするか」にフォーカスしていた。仲木先生が、次世代シーケンサーのデータ解析を事業とする Rhelixa を起業したのは、データ取得はどんどん進むが解析できる人材の不足が予想されていたためだということ。そして、研究で生活できる人たちの増やすということを狙い、博士課程3年生の時に起業に至ったという。現在 Rhelixa には博士号取得者が15名おり、オミクス解析のトータルコンサルティングにより、全員研究をしながら収入を得て生活できるとのことである。クライアントに対して、受託解析以外に様々な研究提案もしており、共著論文も毎年4-5報出るといふ。研究者という肩書きが大切なのか、それとも研究でご飯を食べることが大切なのか、若い方々にキャリアをもう一度考えてほしいというメッセージで締め括られた。

最後に、米満吉和先生から「起業：研究者が味わえる、なかなかスリリングなキャリアパス」というタイトルでご講演いただいた。米満先生は GAIA BioMedicine と九州大学大学院薬学院・教授として、二足の草鞋を履いている。まず過去にご自身がスタートアップに関与した際、会社を外部経営者に任せた二つのケースにおける経験談を話された。いずれのケースも最終的に経営難に陥り、他社に吸収もしくは倒産に至ったという。これらの経験から、外部経営者は「成果を世に出す」ことよりも「会社の生存」が目的となり、難しい状況に陥りやすいことを学んだとのこと。そこで、自分で実用化に

邁進したいという心意気で、自身が経営者として GAIA BioMedicine を創業したという。現在は三つの治験を進めながら、複数の銀行やベンチャーキャピタルから順調に資金を受けている。米満先生によれば、PI と起業は両立可能で、そのためには夢を共有できる仲間が 1-2 名必要だとのこと。そして起業に際しては、10 年後にも競争力のある技術と大型研究費を通せるぐらいの能力が必要と強調された。

前半の 4 講演に続いて、後半はオンラインアンケートとパネリスト討論に移った。パネリストとして 4 名の講演者に加えて、キャリアパス委員会から齊藤典子委員長(がん研究所)、鈴木淳史委員(九州大学)、林克彦委員(大阪大学)、平谷伊智朗委員(理研)が参加した。

まず、参加者属性をアンケートで調べたところ、アカデミア PI が 36.6% と一番多く、アカデミア非 PI が 19.5%、大学院生(修士)が 18.3% であった。一方で、大学院生(博士)が 8.5%、アカデミアポスドクが 2.4% と低い数値であった。企画時には、博士課程学生やポスドクにも是非参加してほしいと考えていたが、彼らには起業はあまり興味を持たれていないようである。「アカデミアからの起業に興味があるか?」という設問に関しては、「大いにある」と「どちらかと言えばある」が 73.2% であったことから、予想通り参加者の多くが起業に興味を持っていることが分かった。

参加者からの投稿で「大学 4 年生です。将来自分のシーズで起業することが夢です。これから博士取得までの間に自分のシーズを構築しようと思うのですが、多くの研究開発型スタートアップは、その時点でもうすでに売れそうな応用研究をされているところから出てくると思います。テーマ選定に際してやっぱり、応用研究に進むべきなのではないでしょうか。」というものがあつた。これに対して、齊藤委員長より「私は細胞核とかクロマチンの研究分野にいますが、海外の第一線にいる先生方は(応用研究に特化してなくても)実は多くが起業されている。そういうトレンドがあることを感じていたので、応用研究に特化しないような、起業の流れが今後来るのではないかと期待する。」というコメントがあつた。

次に「ずばり、アカデミアから起業できるなら、PI になるより起業を選びますか?」という設問に関しては、「両立させたい」が 56.9% で一番多く、「PI になりたい」が 29.4%、「起業したい」が 13.7% であった。鈴木委員より「今回、PI の方々も多く参加されているようなので、両立させたいというのは恐らくそういう背景もあるのかと思う。起業する、もしくは PI になる、その両方を目指す方が非常にやりやすいような社会になったらいい。自分の夢を実現させるために、どうサポートするかが求められるのではないかな。」というコメントがあつた。米

満先生から「特にバイオ系の起業は、やれるならやった方がよい。利益相反についてはかなりマチュアになってきているので、うまくスタートアップと大学のラボが、大学の知財部門と協力をしながら相乗的に育っていくような仕組みというものはつくれる。ぜひ両立させていただきたい。」という力強いコメントをいただいた。さらに起業に重要な人間関係構築には「どうしても科学者は同じ分野の人たちと仲良くなりがち。例えば高校のときの同級生とか大学のときのクラブの仲間とか、そういう人たちと定期的にコミュニケーションを取っておくほうがよい。」というコメントをいただいた。

次の設問として、「アカデミアから起業した会社への就職に興味はありますか?」に対して、「大いにある」と「どちらかと言えばある」が 60.9% に達し、「どちらかと言えない」と「全くない」の 39.1% を大いに上回った。本田先生から、「この結果を拝見して安心した。国としても後押ししようということがあるので、そこに人が集まらないと旗振りだけで終わってしまう。この回答結果はポジティブである。志を一つにできるのであれば、スタートアップでの研究開発というのはアカデミアの方にとってはなじみやすいのではないかな。」とコメントをいただいた。平谷委員からは「生命科学に関わった人たちが活躍できる場が広がっていくというのが、非常にいいことではないかな。アカデミアから起業するというのは 1 つのパスだと思うが、やはりアントレプレナーシップとか言われると、スーパースター的な人間でないと成れない。そう思ったときに、そうではないけどもやりがいを持って仕事をしたい人に(スタートアップへの就職という)パスが用意されていて貢献できる。そういうパスがあるのは非常にポジティブではないかな。」というコメントがあつた。講演中に仲木先生、米満先生ともに働く仲間を探しているとの発言があり、実際にアカデミアから起業した会社への就職先は、すでに多数存在するようである。

「アカデミアから起業、もしくはそのような会社に就職することに対して、どのようなことを感じますか?」という設問に対する選択肢「エキサイティングで楽しそう」「研究成果の社会実装に貢献できそう」「アカデミアで培った専門技術を活かせそう」「うまくいけば収入を大きく増やせそう」「アカデミアではできない経験ができそう」「サイエンスに関わり続けられるので充実感がありそう」「資金調達などスタートアップ会社は不安定で怖い」「キャリア形成の選択としてはリスクが大きい」のどれにも満遍なく 35% 以上の方が投票された。その中でも、「アカデミアで培った専門技術を活かせそう」が 65.7% と他の回答よりも 10-20 ポイント高いことから、参加者の前向きな姿勢が伺える。この結果に、安西先生より「ポジティブな反応もすごく多くてよかつた

た。大企業がアメフトだとすると、スタートアップというのはフットサルみたいな感じ。フォワードだと思っていたら、いきなりキーパーをやったりする。そうすると個人としての学びというのはすごく大きくて、学ぶことも多い。研究室の感じとも結構似た部分もあるので、ぜひ飛び込んでほしい。」というコメントがあった。さらに、「海外は研究者と産業界というのはリボルビングドアみたいに、行ったり来たりが結構ある。アカデミックキャリアを積みながら産業界に出て、またそこに戻れるような枠組みがどんどん出てくると、人材の交流とか、スキルを得ながらキャリアパスを開拓していくことにつながっていくのかなと感じる。」という海外の状況を踏まえた今後の希望を述べられた。さらに、仲木先生より、「大きなビジョンを持って会社を立ち上げる必要はない。アカデミアで細かい部分でいくらかでも活用できるものはある。例えば、図版をめちゃくちゃ作るのがうまい、細胞の絵がきれいに描ける、それだけでも引っ張りだこ。アカデミアの起業というのいろいろなレベル感があって、軽い起業も含めて、これからのアカデミアの方々はやったほうがいいのか。」というコメントがあった。

次の「アカデミアと産業界の距離は以前と比べて近くなっていると感じますか？」と言う設問に対しては、「なっている」と「どちらかと言えばなっている」が77%と、高い割合を示した。この回答に対し、林委員より「昔に比べると起業する例数が増えており、情報も増えてきているので、学生さんも親近感を感じられる。実際にいろいろなお話を聞くと、その垣根はどんどん低くなっていて、例えば起業しても研究できるとか、アカデミアに戻れる可能性もある。」というコメントがあった。さらに、本田先生より、「近くなっているという回答でよかった。まさに私たちは、その距離をいかに縮めるかということをやっているのです。皆さんにもそういう感覚として共有できているのはうれしい。産学連携は国の政策としても推進しているので、もっと近づけばよい。」というコメントがあった。

最後の設問として「今までのお話を聞いて起業への道筋をどう思いますか？」に対して、「実際の例などを聞いて自分もできるのではないかと希望を持った」が16.7%、「人脈やノウハウが必要だったり難しいという印象を持った」が24.1%、「日本はシステムが非効率なので難しいと思う」が5.6%、「純粋な基礎研究とは違う世界だと思った」が11.1%、「起業は難しそうだが、TLOやVCなどの関連職に興味があった」が14.8%、「もっと少し詳しく知った上で判断したい」が25.9%になった。この結果に対して、安西先生より「やっぱり準備が必要だというふうにお感じになった方も多いかとおもう。あえて逆説的に飛び込んでから考えるというやり方もあ

る。越境する勇気を持ってみて、入ってから考える。セクターを越えるような勇気を持っているいろいろなチャレンジをしていく。長い人生を考えた上ではそういうチャレンジする精神はすごく大事ではないか。」というコメントがあった。さらに平谷委員から「勇気を持って越境するというのは何も遠い話ではなくて、普段からできる。ラボの周りの人に自分の結果を話して議論をしてみるとか、共同研究の依頼などで勇気を持って誰かに話しかけてみるとか、そういった普段の行動とつながっている。普段からちょっとずつチャレンジしていくという姿勢を持つと、最終的に越境することにつながっていくのではないか。」というコメントがあった。最後に齊藤委員長より、「『自分の技術が社会に生きるっていう謎の確信はある』というコメントがあり、私はこれにすごく感動した。ちょっとわからないけども何か感じる確信というのが一番重要かもしれない。新しいことに挑戦するということは、基礎研究者に重要なことなので共通しているように思う。起業を考えるチャンスがあったということは、本当に意義があったのではないかと思う。」ということばで締め括られた。

この文章をまとめていて、博士課程や研究生生活を通して得た経験を活かし、多くの方々が活躍できるキャリアパスが、起業を取り巻く環境に多数あることを再認識した。自ら起業してリスクを負って前に進むだけでなく、すでに起業した会社への就職、大学の技術移転で研究者と企業の仲介、ベンチャーキャピタルとしてスタートアップの芽を見定めながら投資を行う役割など様々な進路がすでに存在している。すでに独立したPIが、野心的に起業を目指すことは今後も続くだろう。一方で、広い視点を持てば学生や若い研究者が、多くのやりがいのあるキャリアを見つけることができるというのは、彼らの将来を考える上でとても明るい材料ではないかと感じた。

(文責：座長・鐘巻将人)

## 【研究室の働き方改革

～with コロナ時代のネクストスタンダード～

- 日 時：2022年12月1日(木) 11:45～13:00
- 会 場：幕張メッセ国際展示場 第14会場・オンライン
- 参加者数：175名

2022年キャリアパス委員会主催ランチタイムセミナーでは、様々な研究室で行われている研究を効率的に進めるための工夫について情報共有することを目的とした。セミナーに先立ち8月に事前アンケートを行い、特に各研究室ではコロナ禍をどう過ごしているのか、コロナ禍を機に始まった新しい工夫、コロナ禍を過ぎなが

ら研究活動を維持するためにどのようなことが必要と考えているか、を調査し、計397名の方々から回答をいただいた。この結果をベースに、各研究室におけるメンバーとのコミュニケーション、ディスカッション、日々の過ごし方などの情報を共有した。with コロナ時代のネクストスタンダードと称したが、研究室のあり方（運営）や過ごし方は各人各様であることを尊重し、結論や優劣をつけるものではなく、様々な立場の参加者が相互理解を深めることを大上段の目標とした。

#### 【隣は何をする人ぞ】

前年の2021年に、コロナ禍で初のオンライン年会となり、本年の幕張年会では組織委員会の皆様のご尽力により、さらに多くのオンラインセッションが平行に開催された。ポスター会場の一角に設けられた特設会場に空席があまりなかったことで、密を避けるためにセミナー参加を断念された方もいらしたとのことだった（申し訳ございません）。また、直前の会場変更にも対応していただき、組織委員の皆様、事務局の皆様、参加してくださった皆様には心より感謝申し上げます。さて、当日オンラインに来てくれた参加者の属性を見てみると、学部・修士・博士全てを合わせても学生が32.4%だったのに対して、アカデミアのPI職がそれを上回る34.3%と最も多かった。キャリアパス委員会で議論した本企画の目的としては、研究室というアイソレートされた環境の中で、コロナ禍も相まって、他の研究室との情報のシェアが公開された研究以外ではあまり多くない状況もあり、よその研究室のことを知る機会になれば、ということだった。私自身、「秋深し、隣は何をする人ぞ」という松尾芭蕉の句を引用して前置きを述べたのも、孤独さを感じる中で生まれる連帯感を共有できる時間を作れないか（作りたい）という思いからであり、参加率が高かったPIの方々も同じ思いを感じていたのかもしれないと好意的に解釈した。

#### 【コアタイムのメリット：コミュニケーションと生活リズム】

コロナ禍前後で大きく変わったと予測されていた一つが「コアタイム」だった。事前アンケートでは、学生は「ある」「ない」が半々、PIは「ない」が「ある」の1.5倍近くという結果に。「コアタイム（ラボルール）」という表現によるバイアス（認識の違い）の可能性があったため、当日アンケートでは「コアタイム（ラボに滞在することが期待されている時間帯）」にしたところ、時間の多い少ないはあるが、どの属性の参加者も「ある」「ない」が半々となった。事前アンケートでは、「コアタイムについてどう思うか?」「うまく機能しているか?」についても尋ね、コアタイムが「ある」と回答した学生の場合は、機能「している」が54%、「していない」が25%、「わ

からない、どちらとも言えない」が21%であり、学生側もコアタイムを設定する目的を理解している場合とそうでない場合があることが、自由記述からも伺えた。そこで当日アンケートでは、「コアタイムのメリット」について、自由記述に書かれていた内容を参考に選択肢を作成して複数回答可（3つまで）として尋ねたところ、全体回答率としては、1位「研究室メンバーとのコミュニケーション（75.5%）」2位「生活のリズムを整えやすい（56.6%）」3位「研究に関する質問がしやすい／回答しやすい（54.7%）」という結果になった。PI属性のみ、3位は「防犯／防災上安全（48.6%）」が浮上していた。全体回答率の1位と3位は関連しているため、実質、「コミュニケーション」と「生活リズム」と「防犯／防災」がメリットとして大きいことが伺えた。これを受け、パネリストである各委員により、それぞれのコアタイムに関する考え方、設定しているかないか、設定していても守れない学生がいた場合、どうコミュニケーションをとるか、などについて意見が交わされた。参加者や委員のコメントに基づいて、コアタイムがなくても自由に研究するのが理想だが、個別にサポートが必要な学生もいるので、研究室の共通認識として在室が期待されている時間を短時間であっても緩く作っておくことで、ラボ内コミュニケーションや、個々に合った研究スタイルの確立の手助けにもなるかもしれない、という議論がなされた。

事前アンケートの自由記述で、「コアタイムが良い悪いの議論で終わらないことを願う」との指摘があったが、蓋を開けてみるとコアタイムの「あり」「なし」そのものが半々という結果になり、どちらのケースにおいてもメリット・デメリットを共有する機会になったと感じた。

#### 【研究コミュニケーション：コロナ禍での新たなツール】

コロナ禍では、感染拡大防止措置として「ソーシャルディスタンス」が求められ、研究室への滞在時間や入室人数などが制限されるケースがあったと感じる。事前アンケートで聴取した「テレワーク」に関する質問も、対面での議論や指導が困難になった時期から現在までの働き方の変遷を踏まえたもので、やはりコロナ禍でテレワークを導入した研究室は約65%と多かった（PI職の回答／今はやめている場合も含む）。テレワークのメリットとしては「時間の調整がしやすく余裕ができた」、デメリットとしては「コミュニケーションが取りづらく研究の効率が落ちる」、「ウェットの研究で、そもそもテレワークはできない」という内容の記述があった。やはりテレワークも便利ではあるが、コミュニケーションの「密な」とり方については工夫が必要なようである。そこで次に、研究ディスカッションに関する質問をした。コロナ禍でディスカッション体制に変化があった割合は約48%（PI職の回答）と半数近くが影響を受け、そういっ

たケースでは、オンラインでのミーティング頻度が上昇して交流が密になったと感じた学生や、ちょっとした結果が出た場合の対面での雑談が減ったことは大きな損失と感じる、という記述もあった。また、「自発的に結果を持って議論しにくることが重要」との意見がPIから多く、反対に学生は「教員は忙しそうに話しかけにくい」と感じているようだ。そこで当日アンケートで研究ディスカッションの方法と頻度について尋ねたところ、まず、実情については「結果が出たらその都度(64.6%)」と「月数回(週1程度)のミーティング(55.6%)」が5割を超えた。加えて有効だと感じる方法と頻度については、やはり「結果が出たらその都度(52.8%)」が最も多くなった。これを受けて、岩崎委員、石谷委員からは、学生が結果を報告しやすい方法の選択や、都度報告がない学生には教員から話しかけていくなどの工夫、また、定例報告だけでなく、学生がアクセスしやすいように教授室の扉を開けている、などの工夫が紹介された。また、簡便なコミュニケーションツールとして slack の導入例が紹介された。

コロナ禍でオンラインでのコミュニケーションツールが増えたことで、PIが出張などで不在の場合もアクセスしやすく、ちょっとした連絡や報告などは圧倒的に便利になった一方で、四六時中つながっていることのプレッシャーやプライバシーの問題もあるかもしれない。他のラボではどうしているか知るために、今現在、ラボで連絡をとる手段として使われている方法について尋ねたところ、「対面での会話(73.7%)」「メール(69.7%)」が圧倒的であり、水をあけて「slack(25.3%)」となった。また、すべての属性において60%以上が望む連絡方法は「対面での会話」となり共通していたが、その次の手段としては、学生は「slack(36.4%)」であり、学生を指導する立場は「メール(44.4%)」となり、簡便さを感じる多少のギャップが伺えた。これを踏まえて各委員より、それぞれが使っている手段と使い方についてコメントが出された。細かい意思疎通が可能な対面、ログを残すメールの使用頻度は維持されているが、コロナ禍で slack を導入したケースは多いようであった。LINEは少しプライベートに踏み込む印象があるが、slackはメールとLINEの中間くらいの距離感で使い勝手が良い、と感じている委員や参加者のコメントが多く寄せられた。

#### 【研究室イベント、コロナ禍でどうしてる?】

コロナ禍での大きな変化の一つとして、対面の交流イベントが激減したことが挙げられる。研究室旅行や飲み会にとどまらず、お昼ごはんを食べながらの雑談やスポーツイベントも中止となっていたのではないかと。事前アンケートではやはり、そのような活動はコロナ禍で変化し(61%/学生の回答)、その変化を良くなかったと

感じたようであった(50%/学生の回答)。そこで当日アンケートでは、「コロナ禍以降に実施(復活)したイベント」を尋ねたところ、「ラボ飲み会(40.2%)」の一方で「禁止により自粛(21.7%)」という結果となった。飲み会についてはもともと賛否両論あるようで、事前アンケートの自由記述では、「コロナ禍で飲み会が減って健康になった」ことが「良い変化」と感じているケースもあったが、当日アンケートで研究室のアクティビティを上げるための「ラボ飲み会」が重要と感じた参加者は59.1%であった。島田委員、井関委員、菱田委員からは、飲食を伴うイベントは、研究以外の雑談をやすく、特に学生にとっては、日々のちょっとした悩みを相談できる友人や環境を作る上で有効であるのでは、という意見が出された。不要論もある中で、節度を守って無理強いない交流イベントのあり方を考えていくことが必要なのかもしれない。

#### 【ステイホームを振り返って】

コロナ禍の初期は特に、「ステイホーム」というかつて経験したことのない生活を送ることになり、それぞれの時間の使い方や人生観が少しだけでも変わったという方が多いのではないだろうか。そこで当日アンケートで「コロナ禍で始めたこと、より充実したこと」を教してもらった。「特になし(22.2%)」という回答も多かったが、「家族と過ごす時間(35.6%)」「筋トレやヨガ(20%)」など、プライベートや健康面での充実が伺えた。委員からは「家族と過ごす時間」は特徴的なメリットであること、また「運動(自転車)」や「掃除や料理」など経験に基づいたコメントも出された。事前アンケートでも、全体の約半数がコロナ禍をきっかけに実施したことがあるとして、「宅トレ」「散歩」「読書」「健康診断」など、「自分のための時間」に加えて、「家族との時間」が増えたことが記述されていた。

#### 【with コロナ時代、これからどうしていくか】

最後に、「with コロナ時代」に「研究アクティビティを維持するための工夫」について、事前アンケートの自由記述を参考に選択肢を作成し、当日アンケートを実施した。ここまでの議論の流れが導入になった可能性も捨てきれないが、「①オンラインやリモートも活用しつつ、コミュニケーションが取りやすい体制を構築する(62.5%)」「②心身の健康を維持・向上させるために、適度なプライベート時間も尊重する(53.4%)」が多くなった。各委員からは、コロナ禍で半ば強制的に身につけた新しいテクノロジーとしてオンライン環境があり、そのメリットを使いつつも、信頼関係を築く上では対面での「密」なコミュニケーションも重要であり、オンラインと対面と良いとこ取りができれば、という意見が

あった。選択肢にあった「コロナ禍前の研究スタイルを復活させる」は思ったよりも低い回答率となり(12.5%)、コロナ禍で研究のアクティビティが下がったラボは多かったようであるが、新しいツールの充実やコミュニケーションの工夫など、得たものもあったのだと感じさせる結果となった。後日談として、会場では回答者の属性がわからなかったが、手元の集計をみて気づいたことがある。上記①は全属性で高い回答率になったが、②についてはPIの回答率が約20%と他の属性に比べて著しく低かった。ついでに「自身の体調管理を徹底し、健康的に研究を継続させる」も25%にとどまった。原因か結果かはさておき、今回セミナーの企画に携わった者としては、PIもそうでない方々も、どうか皆様が心身の健康に十分留意されることを願います。

おわりに

今回のランチタイムセミナーでは、「研究室の働き方改革～with コロナ時代のネクストスタンダード～」と称したが、「これがスタンダード!」という結論をつけることは目的でなく、コロナ禍を経て、少しずつコロナ前の生活が戻りゆく中で、研究活動を維持するために、効率良い研究スタイルを確立するために、他のラボで実施していることや工夫を共有して、次の一助になれば、という方向性での議論になったと思う(ご参加いただいた皆様、事務局の皆様、年会組織委員の皆様、本当にありがとうございました(応援コメントも嬉しかったです!))。また、かなり細かい(しつこい)事前アンケートにも根気よく高い熱量で自由記述にもたくさん書き込んでくださった回答者の皆様にも深くお礼申し上げます。あくまで個人的にだが、「どうやって研究活動を維持したのか」「ラボメンバーの能力を発揮できる効率良い持続可能なラボ運営のコツ」など、多くの参考になる各研究室の工夫を共有させても

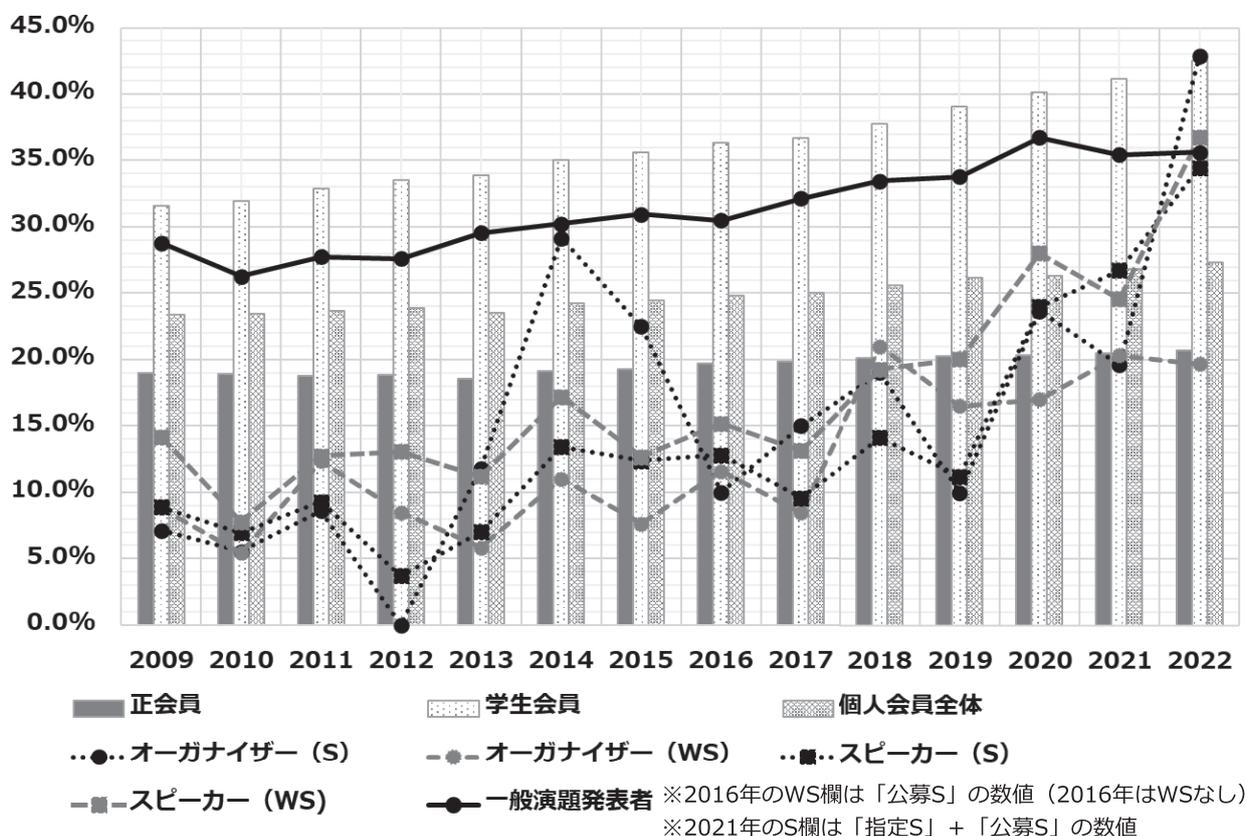
らったと感じている。コミュニケーションツールとしてオンラインが加わることで、より充実してきた一方で、パネリストの方々やアンケートの意見でも多かったように、やはり「対面の雑談」に勝るツールはないようだ。学生は臆することなく教員(指導してくれる立場の人)に話しかけ、教員は話しかけやすい雰囲気や環境を用意することが、コロナ禍前後でも変わらず最も重要であると再認識させられた。会の最後には、長年キャリアパス委員としてご尽力されてきた木村委員から、「長年やってきた中で今日の会が一番まったりしていて良かった」との感想を頂いて、パネリストも参加者も全員「うんうん」と頷き笑顔が溢れていた。和やかな雰囲気の中で締めくくられてホッとしたからか、ふと思ったことがある。これまで多くの諸先輩方のご指導のもとに“研究道”を突っ走ってきた自分自身にとって、脇目も振らず研究に邁進することは良いことであり「そうあるべき」と盲信していた一方で、身体を壊したり人間関係で悩んだり、結局コスパが悪いし自分はダメだなあと悩む岐路にぶち当たることがしばしばあった。今回のコロナ禍では良くも悪くも、自分自身と向き合う時間、周りを見回す時間を、作る/作れる方法を見出すことになり、尋ねてみると意外と同じように悩んでいる人たちも多いことを知った。コロナ禍のアイソレートされた環境を経験したことで、それぞれの立場の孤独さを通じて繋がり合うことで生まれる連帯感、というものの存在価値が高まったのではなからうか。そしてそういう多種多様な人間社会の中だからこそ、良いコミュニケーションによって創発的な面白い研究が生み出されるのだと、信じてやまない。今回のセミナーを通じて、研究室メンバーとのコミュニケーション方法・頻度・工夫について確認/活用していただければ、本企画の目的が達成されたと大変幸いに思う。

(文責：座長・倉永英里奈)

# バランスの取れた研究環境を築くために

## — 年会における演題発表者等の属性調査 —

日本分子生物学会 年会における属性調査（女性比率の推移）



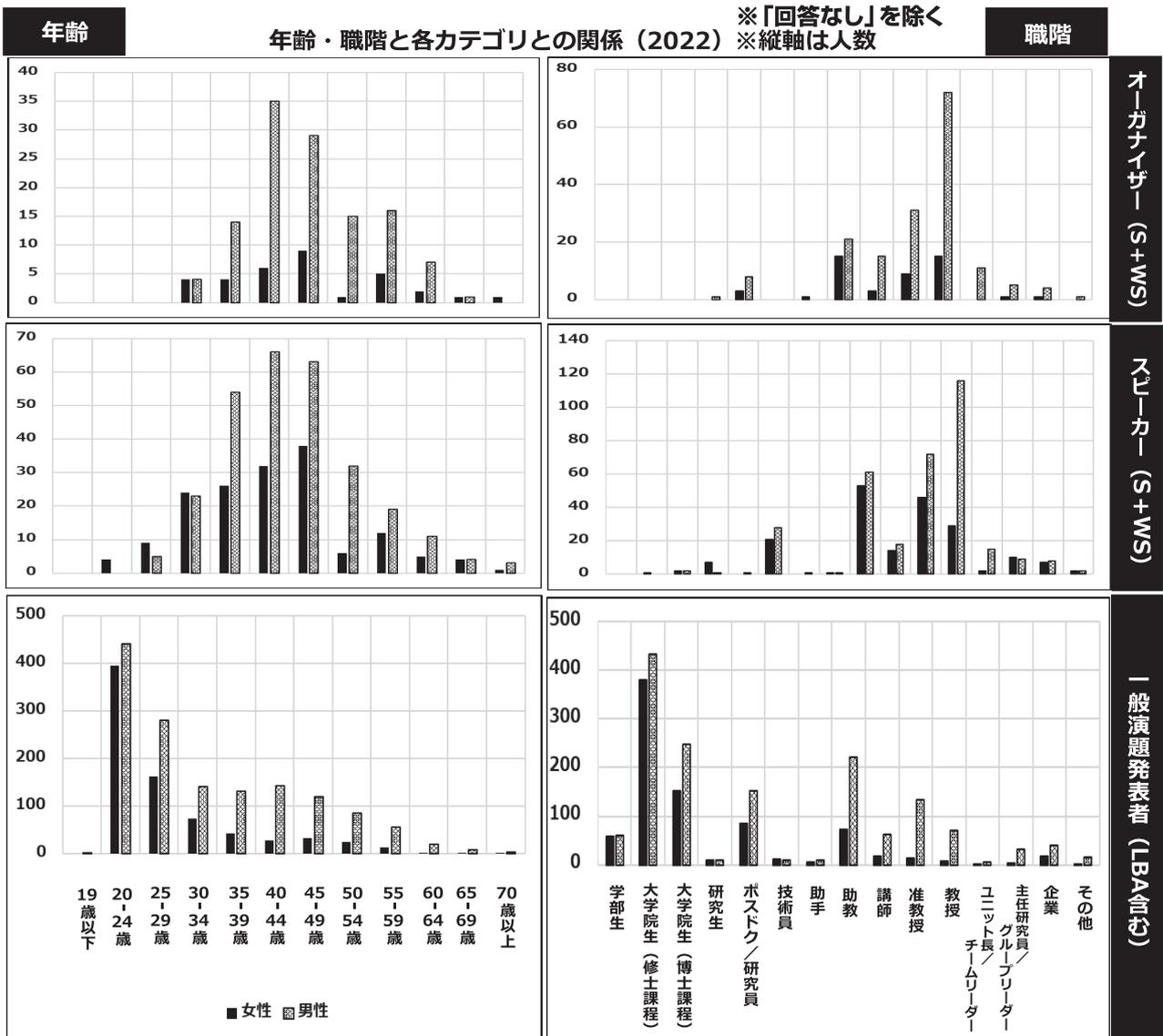
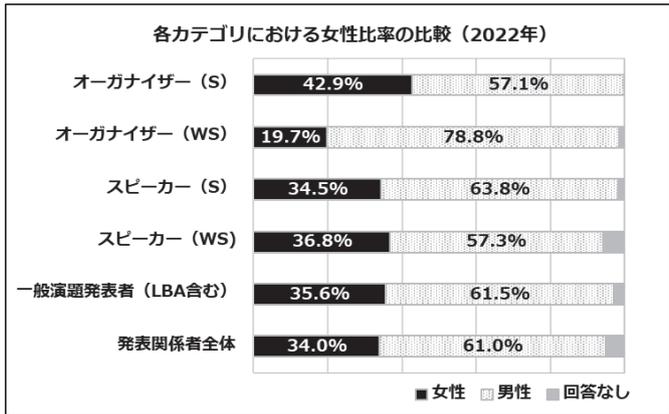
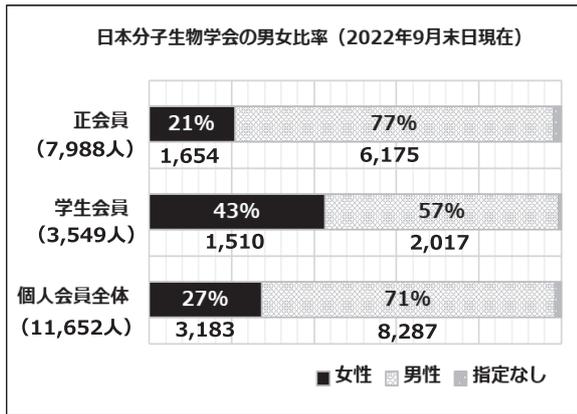
### 属性調査とは？

研究発表の場においては、性差にかかわらず研究者としてのビジビリティ（可視性）を高めることでその後の研究機会・キャリア獲得などに結び付けることが期待される。シンポジウム・ワークショップのオーガナイザーやスピーカーの多くは正会員であることから、その男女比率が学会会員における男女比率との近似値になることが望ましい。「シンポジウム・ワークショップなどのオーガナイザー・口頭発表者における女性比率は、学会員全体における女性比率と比べて低いのではないだろうか」という疑問をもとに、年会発表者が属する性（属性）について、2009年度から継続調査を行っている。

### 発表者が決まるプロセスの違い

- シンポジウム (S)
  - オーガナイザー：
    - 指定シンポジウム：年会側が検討・依頼（他薦）
    - 公募シンポジウム：応募者（自薦）の中から選抜される
  - スピーカー：オーガナイザーが検討・依頼（他薦）
- ワークショップ (WS)
  - オーガナイザー：応募者（自薦）の中から選抜される
  - スピーカー：オーガナイザーが検討・依頼（他薦）
- 一般演題発表者
  - 自発的な申し込み（自薦）

第45回年会（MBSJ2022）属性調査においては3,427名が調査対象となった（のべ人数）。年会の事前参加登録・演題登録システム使用に際して最初に行う新規アカウント作成のための画面（日本語版・英語版）に、性別、年齢、所属、職階（身分）についてのアンケート設問を設置（回答は任意）。ここでは演題登録を行っている、あるいはオーガナイザーリストに含まれている登録者の回答データのみを抽出し集計した。一部のオーガナイザー・発表者に関する調査では公開情報や本学会会員データ（学会個人情報保護方針に依拠）なども併用した。なお本年会を共催した日本生物物理学会の会員も講演セッションのオーガナイザー・スピーカー、一般演題の発表者として含まれている。またシンポジウム・ワークショップのスピーカーには非会員の演者を含むと共に、本年会では非会員の一般演題投稿も認めており、その発表者も含まれている。



属性調査開始以来、先述の疑問については「その通りであった」という結果が続いていたが、昨年に続き2022年の調査でもすべてのカテゴリにおいてほぼ女性正会員の比率と同等かそれ以上の女性比率となった。

2022年会ではワークショップの企画公募で募集要項に「指定演者のうち少なくとも30%程度は女性講演者とするを応募条件とする」ことが記載された。ワークショップスピーカーの女性比率は過去最高となった。今回の募集を契機に、これまでスピーカー経験の少なかった女性研究者の仕事に着目してセッション企画者が後押しするといった効果が期待できる一方、特定の女性研究者に講演依頼が重なってしまうという課題も見られた。

ご協力ありがとうございました！

## 研究倫理委員会 年会企画報告

研究倫理委員会企画・研究倫理ランチョンセミナー

【「論文」を情報源とした発信、全部信じて大丈夫？】

●日時：2022年12月2日(金)11:45～12:45

●会場：幕張メッセ ポスター・展示会場内特設講演会場（第14会場）

●参加者数：121名

●講演：井出和希

（大阪大学 感染症総合教育研究拠点 /ELSI センター）

近年、研究者が論文を発表する形式が多様化しつつあります。特に、オープンアクセス型の出版が急増し、査読を経ないプレプリントの公開や利用も進んでいます。一方、このオープンアクセス化の流れに便乗して、掲載料収入のみを目的とした粗悪雑誌、いわゆるハゲタカジャーナルが台頭し、また、査読を経ないプレプリントサーバで公開された論文の情報への対応の仕方など、様々な問題や課題が指摘されています。今回の研究倫理ランチョンセミナーでは、最近の学術出版の動向について詳しい、大阪大学の井出和希先生に講演をお願いしました。

まず、本ランチョンセミナーの開催に先立ち、本学会の会員がオープンアクセスやプレプリントについてどのような認識を持っているかを調査するため、昨年9月14日～10月5日にかけてアンケートを実施させていただきました。会員のメーリングリストを使ってアンケートを依頼したところ、633名もの会員がアンケートに回答してくれました。アンケートでは、本学会会員のオープンアクセスやプレプリントの利用経験、また将来的な利用の希望や見込みを問うような設問に加えて、最後に自由記述欄でコメントをいただきました。

実際の講演では、まず井出先生の自己紹介から始まり、その後で学術出版の歴史を紹介していただきました。16世紀から刊行され最古の学術誌と考えられている、ロンドン王立協会の哲学紀要の紹介から、1960年以降に起こったエルゼビアなどの商業出版社の躍進、1990年代に登場し、現在も増え続けるオープンアクセス型の出版など、時代と共にどのように出版形態が変わってきたか丁寧に説明していただきました。分子生物学の分野では、現在約4割の論文がオープンアクセスとして出版されている一方、オープンアクセスとして出版する際にかかる高額な経費（APC）の問題、また転換契約という方式に

よって、研究者や機関の経費を軽減する試みがなされているという、最近の動向についても説明していただきました。その後、査読を経ない論文を公開するプレプリントについて、1990年頃に物理や数学の分野で始まり、2000年代に様々な分野に波及して、現在は50を超えるプレプリント・サーバーが存在していること、各出版社がプレプリントの囲い込みを行っている状況、昨年、日本独自のプレプリント・サーバー Jxive の運用が始まり、今後の動向が注目されていることなどを説明していただきました。さらに、COVID-19の治療に関する論文がプレプリントで公開され、その情報がメディアで取り上げられた後、元々の論文が取り下げられてしまったという事例など、プレプリントの利用による社会的な影響についても紹介してもらいました。最後に、事前に実施したアンケートの結果を説明していただき、本学会会員の間でもオープンアクセス化やプレプリントの利用が浸透しつつあるが、プレプリントで発表する必要性や、論文でプレプリントを引用することについては、回答者の間でも意見が分かれること、また自由記述のコメントから、回答者がオープンアクセス出版の高額な経費や、プレプリントの利用やその情報の信ぴょう性について疑問を持っていることなどが紹介されました。

講演の後の質疑の時間では、参加者から、プレプリントについての海外の評価や認識について、プレプリントでの公開を求める科学雑誌の動向、プレプリントサービスの維持に係る費用の問題、大学のデポジトリーとの関係、プレプリントの紐付けの問題などについての質問があり、井出先生がそれぞれ丁寧に応答して下さいました。セミナー後に実施したアンケートでは、43名の参加者から回答が寄せられ、約3/4の参加者が「とても面白かった」と回答し、残りの参加者が「まあまあ面白かった」と回答してくれました。自由回答では、「プレプリントの動向が分かりやすくまとめられて勉強になった」というコメントが多数ありました。

事前アンケートの実施、当日参加者の様子、また、事後アンケートの結果を踏まえて、とても有意義なセミナーを開催できたのではないかと思います。改めまして、セミナーに参加していただいた参加者、アンケートに回答していただいた会員の皆様、セミナーの準備に尽力していただいた事務局の山口恵子さん、そして丁寧に講演していただいた井出和希先生に感謝申し上げます。

（文責：座長・中山潤一）

## 第12回(2024年)日本分子生物学会 国際会議支援 募集のお知らせ

2023年2月

日本分子生物学会では、昨年(2023年)に続き、2024年(2024年1月~12月)に開催計画のある国際会議に対して支援事業(開催補助金の助成)を行いますので、ここにお知らせいたします。

分子生物学の黎明期には先鋭的な少人数の若手研究者による会議から革新的な発見と数多くの新分野が誕生しました。科学研究におけるグローバル化とインターネットにおける情報共有が急速に進む現代においても、国際会議において研究者が率直に意見交換を行い相互の理解と信頼関係を深めることはますます重要になっています。質の高い国際会議を日本において開催することは日本発のオリジナルな研究を国際的にアピールし、国際的なリーダーシップを担うために重要です。また、若い時から最新の研究と真摯な議論に接することは研究者育成の要の1つと考えられます。本支援は、日本とアジア発の国際会議を育て、我が国の研究を世界に向けて発信する場を設けることを目的として立ち上げられました。

本国際会議支援(開催補助金の助成)を希望される方は、下記の要項に従って、奮ってご応募ください。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

理事長 後藤由季子

国際会議支援・選考委員会委員長 小林 武彦

\*\*\*\*\*

### ■募集要件

1. テーマ：分子生物学に関連した分野において活力の高い議論が期待できるもの。新分野を探索する独自性の高い、萌芽的なテーマも考慮する。
2. 開催規模：参加人数は50名以上400名程度までとし、そのうち外国からの参加者が少なくとも20%程度いること、さらに口頭発表者の中で外国人が3割以上を占めることが望ましい。
3. 開催の形式：
  - 1) 主催者あるいは共同主催者が分子生物学会会員を3年以上つとめていること。教育・研究機関の主催、研究費主催のものは除きます。(組織委員(国内)については、できるだけ本学会への入会を推奨します)
  - 2) 共催：他の団体との共催は可とするが、その場合、参加費に関して分子生物学会会員価格(特に学生会員を考慮されたい)が設定されていることが望ましい。
  - 3) オンライン開催形式も助成対象とします。
4. 留意事項：
  - 1) できる限り、国内の若手研究者の口頭発表の機会を作ることが望ましい。
  - 2) 支援が決定した後は、主催者は各種の報告書・広報ポスター・国際会議HP等に本学会からの支援を受けて開催されることを、表示する義務を負うものとします。
  - 3) 採択された場合には、会議終了後、開催責任者にミーティングレポートを執筆いただきます。学会誌「Genes to Cells」に掲載しますことをご確認ください。
  - 4) 会議開催に際して、分子生物学会が契約している支援システム(JTB 西日本 MICE 事業部による国際会議トータル支援システム)を利用することも可能です。本システムは、①基本システム代金：23万円(事前参加登録受付・演題投稿受付・カード決済等の基本システム設定)、②オプション/メインHP代金：25万円(全体デザイン・ページレイアウト・サーバ管理12ヶ月・更新メンテナンス12ヶ月)、③オプション/オンライン査読システム：8万円、④オプションその他、などからなります。(※業務委託の内容により費用が変わってきますのでご注意ください)
  - 5) 残金が出た場合、補助金の返還を求めることがあります。

### ■開催補助金と件数

援助する金額は、一件あたり100万円~200万円。年間2~4件程度。開催形式(オンサイト or オンライン)、開催期間・参加予定人数によって金額の変動あり。学術振興会の国際会議等の大型支援を助成された場合は多少の減額あり。

(補助金の使用用途は限定せず自由度を持つものとします。他経費で補えないものが望ましい。ただし国際会議終了後、

本学会への会計報告（収支決算書概要）提出の義務を有します。また、分子生物学会から支援を受けたことを、HP、要旨集などに明記いただきます。）

#### ■応募方法

申請書は、分子生物学会ホームページからダウンロードして使用してください。

所定の申請書に、国際会議の目的、形態、予定講演者、およその予算規模と使用用途等を記載し、電子データで学会へ提出してください。

#### ■申請書送付先

〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5 人材開発ビル 4階  
日本分子生物学会 国際会議支援・選考委員会 御中  
TEL：03-3556-9600  
E-mail：info@mbsj.jp

#### ■締切期日 2023年3月31日(金) (必着)

#### ■スケジュール（開催補助金の交付）

- 2023年3月31日：応募締切
- 2023年4月～5月：選考
- 2023年6月：補助金の交付（予定）

#### ■選考

国際会議支援・選考委員会が選考に当たり、理事長承認のもとに決定します。

#### 第23期 国際会議支援・選考委員会

小林武彦（委員長）、高橋淑子、中西 真、中山敬一、仁科博史

## 『自己変革～石浜明先生を偲んで～』

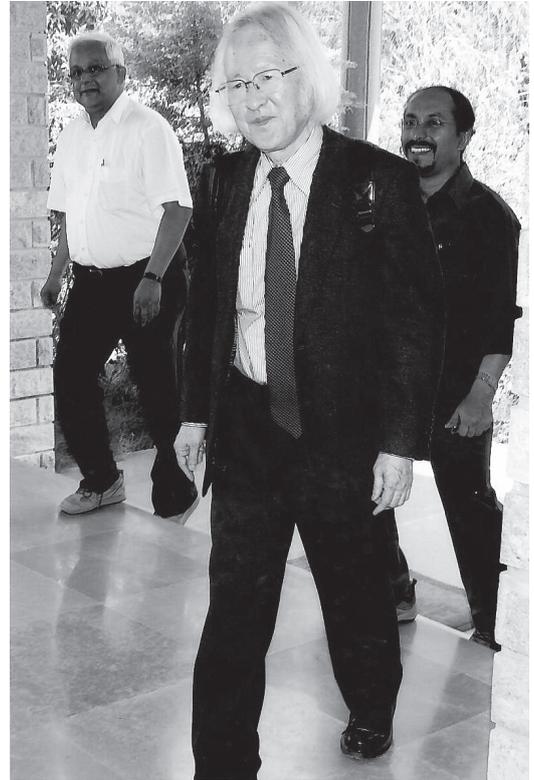
石黒亮<sup>a</sup>、村上勝彦<sup>b</sup>、五十嵐和彦<sup>c</sup>

### 石浜明先生の歩み

石浜明先生は1973年から京都大学ウイルス研究所、1984年から国立遺伝学研究所、2004年から法政大学生命科学部で研究室を主宰され、RNAポリメラーゼを中心とした細胞・生命の全体像を理解すべく研究を進められました。研究を通して学生や院生を情熱的に指導されてきた先生ご自身は日本最初の分子生物学の大学院生として、名古屋大学分子生物学研究施設で修士号、博士号の研究を江上不二夫先生、大沢省三先生、山田常雄先生のもとで学ばれました。1963年から亀山忠典研究室（金沢大学）でHeLa cellからのRNAポリメラーゼI、II、IIIの精製と同定（文献1）、1967年からJerard Hurwitz研究室（米国Albert Einstein College）で大腸菌のRNAポリメラーゼの機能解析などの革新的な研究をされました。結核の特効薬であるリファンピシンの標的がRNAポリメラーゼである事を発見された京都大学の由良隆先生から、その生化学的な解析を依頼され、1970年に京都大学ウイルス研究所・遺伝部に助手としてまず着任されました。そこでの研究が高く評価され、1973年に京都大学ウイルス研究所・化学部の助教授に推薦され、独立研究室を持たれたのが石浜研の始まりでした。今年で石浜研創立、50年になります。

石浜先生は、日本分子生物学会の立ち上げにも7名のワーキンググループ（三浦謹一郎、関口睦夫、松原謙一、吉川寛、志村令郎、溝渕潔、石浜明）の一人として参加され、1994年には第17回分子生物学会大会長を務められました。また、国際交流にも尽力され、日本学術振興会日印合同科学評議会委員としてインドとの共同研究や各地でのセミナーやワークショップの開催を後援され、インドの科学と人材育成にも多大な貢献をされました（写真1）。法政大学退職後は同マイクロナノテクノロジー研究センター客員教授としてご自身の研究の集大成を目指されてきましたが、2021年6月から膀胱癌との闘いが始まり、ついに2022年12月23日にご逝去されました。

石浜先生は大腸菌RNAポリメラーゼ、インフルエンザ等各種ウイルスRNAポリメラーゼや逆転写酵素、分裂酵母RNAポリメラーゼを主な対象として遺伝子発現制御機構に関わる研究を進められてきました。京都大学では、各酵素のサブユニットを精製し、酵素を再構成して活性やプロモーター認識選択能などを調べ、その責任部位を特定していく生化学手法を世界に先駆けて確立されました。遺伝研では各RNAポリメラーゼの再構成実験、分子解剖を中心に研究を進め、大腸菌RNAポリメラーゼでは $\alpha$ サブユニットのC末端領域（ $\alpha$ CTD）が転写因子による活性化シグナルを受容することを発見し（文献2）、その後多くの国際共同研究を通して転写因子やプロモーターの分類、RNAポリメラーゼ側の転写因子結合部位の多様性、そして、 $\alpha$ CTDのNMRによる立体構造の解明（文献3）などに発展しています。遺伝子発現調節の基本概念の確立など、分子メカニズムの解明への指向性と合わせて、石浜先生は常に「全体像を理解する」ということを目標に掲げられ、大腸菌など、細胞が様々な環境に応答してどう遺伝子発現が変化するのか、その変化をもたらす転写因子は何か、その変化の生物学的意義はなにか、追究されてきました（文献4）。立ち上げに参画された法政大学生命科学部では約300種におよぶ大腸菌全転写因子の精製とゲノム結合部位のマッピングを進められました。この膨大な量の研究は、研究室に配属された学部課程1年の学生に、それぞれひとつずつの転写因子を卒業までの4年間で解析してもらうという大変ユニークな方法で行い、それはまた学部生に最先端の研究を大学入学の早い段階から経験させたいとの石浜先生の思いから出来上がったシステムでした。ここでは各種の情報科学の技術も導入し、転



（写真1）特別講演のためにJawaharlal Nehru Center for Advanced Scientific Researchを訪問された石浜先生（中央）とインドの共同研究者・Dipankar Chatterjee博士（左）、Tapas Kundu博士（右）（2012年3月インド・バンガロール）

写因子-遺伝子ネットワークの全貌の理解に挑戦されてきました。細胞の個性とその変化を遺伝子のネットワークに基づいて理解する、その研究情熱は最後まで変わることはありませんでした。

## 石浜研での研究生活

著者らは、遺伝研で石浜先生から研究教育を受け、その後、それぞれ研究者として歩む際の礎となりました。

\*\*\*\*\*

〔五十嵐〕私は、医学部の講義実習を通して遺伝子発現に興味をもつようになり、基礎研究に従事したいと考え博士課程に進学したものの、研究テーマが期待したものとはズレがあって悶々としていた頃のことです。「蛋白質核酸酵素」や「生化学」の総説で石浜先生の RNA ポリメラーゼのご研究を読み、こういう基本的反応に基づいた研究を学びたいと考えたのが、私の研究の始まりでした。受託大学院生として参加できないかとお手紙や電話で相談を申し上げ、見学の許可を頂いたのが 1988 年初夏の頃でした。緊張して遺伝研の古い RI 実験施設の二階の研究室にうかがうと、石浜先生から直接研究のご紹介を頂き、私の考えや方向性などに関する質問に答えさせて頂き、助手を務められていた藤田信之先生、永田恭介先生から研究の紹介をうかがいました。石浜研で進んでいた研究は医学から一見遠いものではありましたが、こういう反応を理解しないことには医学は進まないだろうという予感も強く感じました。その日の夕方、川端のお寿司屋さん（嶋本伸雄先生もご一緒に頂きました）で幸いなことに石浜先生からお許しを頂き、9 月頃だったでしょうか、仙台から三島に引っ越し、研究室に参加させて頂きました。石浜研ではたくさんのことを学ばせて頂きましたが、特に、「遺伝子発現研究の広さにつながり」と「研究と討論の平等性」を学ぶことができたことは、私の人生の根となりました。医学により近いインフルエンザウイルス RNA ポリメラーゼの研究に参加できればと希望していましたが、まずは大腸菌 RNA ポリメラーゼの精製から生化学の基本をしっかりと学ぶようにとの石浜先生の指導方針で、 $\omega$  サブユニットの再構成を目指して 1 キロぐらいの大腸菌から精製を始めました。石浜先生との日々の討論、石浜研と遺伝研で見ることを学ぶこと、そして触れる皆さん、全てが新鮮で刺激的で、夢のような博士号研究を進めることができました。論文原稿には鉛筆で修正や提案を頂き、改訂サイクルを幾度も繰り返すことで、科学論文の基本をたたき込んで頂きました。promoter selectivity を評価しながら、その先には常に「全体像」を意識して研究が進む様子から、遺伝子発現をベースにして細胞の分化や応答を理解することの重要性を信じるようになり、そしてその理解は必ず病態の理解につながると確信できたのが、私のその後の研究にとって大きな一歩となりました。

〔村上〕私が石浜先生と始めてお会いしたのは、総合研究大学院大学の入学説明会の時でした。山口大学の修士課程を卒業した後、分子生物学の分野に進みたいと思い、石浜先生を突然訪ね研究のお話を聞かせて頂きました。先生から『自分の研究をどれほど知っているのか』と聞かれた際、素直に『まったく知りません』と答えてしまった無礼な学生にも、ご自身の研究を分かりやすく説明してくれました。『研究室を選ぶ際、研究分野を決めたら、その分野で世界トップの研究室に進みなさい。石浜研究室は、RNA ポリメラーゼの研究では世界のトップです』と先生が自信を持って言われたのを今でも鮮明に覚えています。研究室で過ごした 3 年間は、石浜先生が分子生物学会やウイルス学会の年会開催などの準備で多忙を極めていたため、先生への研究結果の報告は 1~2 ヶ月ごとでしたが、その時に良い結果が出ている

と、『美しい結果が出ているね』と褒めて頂いたことがとても嬉しく、その後の研究でも実験結果をいかに美しく見せるかを念頭に置いて実験計画を立てるようになりました。研究室在籍 2 年目に、米国バーモント州で開催されるバクテリアの転写会議に参加した際、参加者の発表の半数以上は、五十嵐さんが発見した、大腸菌 RNA ポリメラーゼの  $\alpha$ CTD と転写因子や DNA との相互作用による転写制御（文献 2）を進展させたものでしたので、それらの話を聞くたびに、石浜先生の名前が出てくるのを同じ研究室で働く学生として誇らしく思っていました。この会議の休憩時間に、研究者がピクニックテーブルを囲みながら、今後の研究テーマについて議論していた際、石浜先生がその中心にいるのを見て、「やはり石浜研究室は、世界のトップなのだ」と実感したものでした（写真 2）。総合研究大学院大学の入学説明会で、石浜先生は『自分は RNA ポリメラーゼが大好きで、愛していま



（写真 2）バクテリア RNA ポリメラーゼ転写会議での、石浜先生（テーブル右上）を中心とした議論の様子（1995 年、米国バーモント州）

す』と言われた際、RNA 転写酵素になんでそこまで愛情を注げるのかと不思議に思っておましたが、石浜研で過ごした3年間ですっかりその魅力に取り憑かれてしまい、現在でも RNA ポリメラーゼの研究を続けています。

〔石黒〕 修士の頃、進学を考えていた私は、不安を胸に深夜バスと新幹線を乗り継いで三島の遺伝学研究所までインタビューに伺いました。真新しい実験室の匂い・おやつに頂いた桃の香り・ご馳走になった鰻重…不思議と嗅覚の記憶は強く残るものなのでしょうか。初めてお会いした先生の「ウチはちょっと頑張ればすぐに論文になるテーマがゴロゴロしていますから、全然心配しなくて良いですよ」とのお言葉と笑顔が印象的でした。先生のおっしゃった「ちょっと」は、私の解釈と若干異なることに後日気付くことになるのですが、当時は無邪気に感心し喜んでいたものです。入所当日、教授室で「ウチに入るのは簡単だったかもしれないけど、出るのは簡単じゃないから」のお言葉に笑顔は無く、即日研究生活がスタートしました。その後、卒業・就職などなど、時を重ね研究内容も少しずつ変わってきましたが、先生との関係性はその日以来少しも変わらなかったことに安心感と感謝の念を抱いております。昨年夏、猛暑に倦んだ先生が「軽井沢の涼しい木陰で論文を読みながら静養したいねえ」とおっしゃるので、「静養するならお仕事は持って行かないほうが？」と言うと、笑われました。そういう訳にはいかないとのこと。弟子の研究時間を削るのを極端に嫌う先生にしては非常に珍しいお誘いで、ご一緒するのを楽しみにしていたのですが、ご体調の都合で叶わなかったのを今でも残念に思っております。

\*\*\*\*\*

故人を知る全ての人の想像に違わず、石浜明先生は研究を他の何より優先させておられました。ご自身の生活や体調も研究への情熱以上のもでは無かったのかも知れませんが、私事はあまりお話しにならなかったため、プライベートと仕事をきっちり分けているものと思い込んでおりましたが、最近意外な事実がわかりました。我々門下生を含め、多くの関係者は石浜先生の家庭でもよく話題に登り、研究についても常日頃お話しされていたそうです。先生は高校時代、生物クラブを主催され、名古屋城のお堀の微生物を観察されていたとのこと。石浜研の原点はそこに端を発しているのかも知れませんが、聞けば奥様もクラブの後輩であり、先生の情熱を理解し、長年支えていらしたものだと思われまします。常に研究姿勢は昨今家庭で求められる理想像とは異なるかも知れませんが、我々にとってまたと無い師匠であり良き理解者でした。

研究には常に峻厳な姿勢でありましたが、中でも先生とのディスカッションは一入でした。入門して皆一番初めに驚くのがそれで、誰にでも見境無く真剣に向かって来るのです。研究室のスタッフでも学生でも研究生でも所属が異なっても全く関係ありませんでした。ある意味平等だったのだと思います。あまりの剣幕に皆、予め関連論文を網羅し実験データを精査・解釈するなど“武装”を余儀なくされた様に思います。おかげで OBOG は誰とディスカッションしてもどんな厳しいことを指摘されても動じない身体にして頂きました。厳しい反面、有用なデータは余す事無く拾われて好意的に解釈され、次の実験、そして論文に繋がると記憶しております。自分が気付かなかった点を指摘されるのは本当に悔しいもので、次回に向けて励む原動力となりました。最近ご本人から、そのディスカッションについて「自分一人の能力には限界があります。チーム全体、研究室全体のレベルを向上させる事が大切なのです」と伺いました。膵臓癌の診断を受けた後もやはりご研究第一で、病院の待ち時間もどこかのジャーナルに頼まれたレビューに充てておられました。抗がん剤の点滴を受けている間の時間もったいないので、その間に討論するデータを持って来る様にと頼まれるのもしばしばで、お体にはかなりの負担だった筈ですが、研究戦略に想いを巡らせている間は気にならない様子でした。

#### 石浜先生のメッセージ

石浜先生は「自己変革」をモットーとされてきました。若かりし時に情熱をそそがれた学生運動の宿題をうちに抱えられていたのでしょうか、社会との関係、社会への貢献を重視されました。教育に精力を注ぐことで各自の変革を促し全体のレベルをあげようとされたのも、科学者としての社会的責任を負う決意だったと思われまします。また、細菌、ウイルスや真菌 RNA ポリメラーゼなどの研究にも取り組まれたのは、医療への波及も念じてのことだったようです。一見 RNA ポリメラーゼ筋に見えますが、先生ご自身の自己変革によって研究テーマはタンパク質精製、分子解剖から遺伝子ネットワークまで、問題意識を積極的に変える努力をされていました。その際、芸術も含めた異分野との交流や新技術の導入を学びの端緒にされたそうです。石浜先生から我々に向けて、「指導者は教育と研究を通して若者に夢と希望をあたえなさい」「異分野の人と積極的に接触をして、他分野との交流と協業で新しい研究法を生み出しなさい」「主体的で息の長い研究を目指しなさい」「10年先の研究を考えなさい」という宿題を頂いています。日本の科学の環境は

厳しさをましつつあり、また努力がもたらす成果や効果も逡減しつつあるようにも思われます。こういう時にこそ、自己変革が求められるように感じます。新しい仲間を得て、環境を変え、方法を変え、自己変革を進めること、難しいことですが、私たちが周りに伝えていきたいと考えています。

### プログレスレポートと最後の講義

昨年（2022年）5月、国内外の同門有志（27人）で石浜先生を囲み、2日間の日程で石浜研究室プログレスレポート会を開催しました（写真3）。師匠に日頃の無沙汰を詫びつつ研究内容を披露するという和気藹々とした雰囲気です。スタートしましたが、やはり同じ根を持つ研究一筋の皆様。次第に熱を帯び、真剣な研究討論が展開されました。師から受け継いだ情熱はまだ冷めるところでは無い様です。先生はその様子を楽しそうに眺めておられました。この会の最後に、石浜先生からこれまでのご研究を総括した貴重なお話を1時間に渡りして頂きました。この石浜先生最後の講義は公開されております（<https://www.youtube.com/watch?v=Qkr-eKIVe9g&t=2909s>）。

石浜先生の棺には先生のお好きだったお花の他、幾つか論文を添えてお見送りしました。喜んで頂けたと思います。先生のご葬儀には、日本国内だけでなく、これまでの先生の国際的な活躍を示すように、海外からも多くの追悼の意が届けられました。研究を愛し理想を追い求めた先生の姿勢は多くの門下生に受け継がれ、さらにその教え子の皆様へと続いております。石浜先生、長い間お疲れさまでした。天国で大好きなRNAポリメラーゼのお話を分子生物学の創設期にご活躍された研究者の方々と楽しんでしてください。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1. Ishihama, A. RNA polymerase of HeLa cells. *Biochimica Et Biophysica Acta Bba - Nucleic Acids Protein Synthesis* 145, 272–283 (1967).
2. Igarashi, K. & Ishihama, A. Bipartite functional map of the E. coli RNA polymerase  $\alpha$  subunit: Involvement of the C-terminal region in transcription activation by cAMP-CRP. *Cell* 65, 1015–1022 (1991).
3. Jeon Y-H., Negishi, T., Shirakawa, M., Yamazaki, T., Fujita, N., Ishihama, A. & Kyogoku, Y. Solution Structure of the Activator Contact Domain of the RNA Polymerase  $\alpha$  Subunit. *Science* 270, 1495–1497 (1995).
4. Ishihama, A. Building a complete image of genome regulation in the model organism *Escherichia coli*. *J. Gen. Appl. Microbiol.*, 63, 311–324 (2017).

### 〔石浜明先生 最後の講義〕

「転写制御の全体像の解明を目指して」

(2022年5月15日 法政大学マイクロ・ナノテクノロジー研究センターにて)

<https://www.youtube.com/watch?v=Qkr-eKIVe9g&t=2909s>



(写真3) 石浜研究室門下生が集ったプログレスレポート会（2022年5月；東京）（石浜先生：前列左から3番目）

- a. 法政大学 マイクロ・ナノテクノロジー研究センター
- b. ペンシルバニア州立大学 生化学—分子生物学部
- c. 東北大学大学院医学系研究科 生物化学分野

## 特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第23期新理事会準備会議記録

日 時：2022年11月5日(土)13:30～15:30

場 所：東京国際フォーラム G棟4階「402」

出席者：白髭克彦(22期理事長兼)、阿形清和、岡田由紀(22期庶務幹事兼)、鐘巻将人、加納純子、木村 宏(22期庶務幹事兼)、胡桃坂仁志、見學美根子、後藤由季子、小林武彦、小安重夫、塩見春彦、杉本亜砂子、中川真一、中島欽一、中西 真、中山敬一、二階堂愛、仁科博史、深川竜郎、三浦正幸、水島 昇、吉田 稔、吉村昭彦 以上24名

欠席者(委任状)：大谷直子、斉藤典子、高橋淑子、濡木理、三浦恭子、柳田素子 以上6名

事務局：福田 博、並木孝憲、金子香奈里、山口恵子(記録)

### 本会議成立について：

白髭克彦22期理事長より挨拶があり、次いで岡田由紀22期庶務幹事より本会議開催の位置付け・成立につき説明が行われた。本会議は第23期理事会任期に入る前の準備会議ではあるが、その取り扱いが理事会に準ずることが確認された。議事進行については慣例に従い、白髭理事長と岡田庶務幹事ならびに木村宏22期庶務幹事が担当することとなった。

23期理事24名が出席し、委任状6名を受任しており、本会議は細則第4章第8条により成立する。

### 議事録署名人の選任について：

白髭理事長より、議事録署名人として加納純子23期理事と木村23期理事が指名され、承認された。

### 議 事：

#### 1. 第23期理事長(任期：2023年1月より2年間)の選出

岡田庶務幹事より、フランクな意見交換をするために本学会に関係する一言、例えば学会事業のどのような業務に関わってきたか、分子生物学会への思いなどを副えて自己紹介をしてはどうかとの提案がなされ、出席者全員より自己紹介がなされた。

白髭理事長からは、COVID-19による感染拡大の猛威、ロシアによるウクライナ侵攻など、第22期理事会任期中に起こった様々な出来事やその対応を

ふまえ、分子生物学会にはこの規模の学会としての社会的な責任があること、生命科学と社会とのつながりを今後ますます強く認識していかなければいけない時代になっていることが改めて示唆された。

次に、自由討論に入り、学会のあり方、年会のあり方等々活発な意見交換がなされた。続いて、他薦により候補としてあがった方々からの意見表明がなされた。

事務局より理事長選出に関する細則(第2章第3条)の説明が行われ、23期理事により投票が行われた。投票の結果、後藤由季子氏が投票総数24票の過半数を得たため、第23期理事長として選出された。

#### 2. 第23期副理事長の件

事務局より細則第4条(副理事長の設置)の説明がなされた。本件については、後藤次期理事長の要望に従い、次回の定例理事会(11/29開催予定、22期23期合同理事会)の議題とすることとなった。

#### 3. その他

(1) 後藤次期理事長より挨拶があり、これまで分子生物学会に様々な形で貢献してこられ、また研究において各分野を牽引してこられた理事各位のご協力をいただき、分子生物学会を盛り上げていきたいとの見解が述べられた。

(2) 深川竜郎23期理事(第45回年会〔MBSJ2022〕年会長兼)より、年会準備状況について報告がなされた。

上記、第23期新理事会準備会議の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名する。

2022年11月5日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会  
第23期新理事会準備会議

議 長 白 髭 克 彦

議事録署名人 加 納 純 子

議事録署名人 木 村 宏

## 特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第22期・第23期 合同理事会記録

日 時：2022年11月29日(火)13:30~17:00

場 所：幕張メッセ 国際会議場 1階「中会議室 101」

出席者：第22期

白髭克彦<sup>○</sup> (22期理事長)、杉本亜砂子<sup>○</sup> (22期副理事長)、水島 昇<sup>○</sup> (22期副理事長/2026年会長)、上村 匡 (編集幹事兼)、糸 昭苑、倉永英里奈、小林武彦<sup>○</sup> (2025年会長)、小安重夫<sup>○</sup>、佐々木裕之、塩見春彦<sup>○</sup>、泊 幸秀、中川真一<sup>○</sup>、中山潤一、仁科博史<sup>○</sup>、原 英二 (広報幹事兼)、東山哲也 (会計幹事兼)、深川竜郎<sup>○</sup> (2022年会長)、荒木弘之 (監事)、石野史敏 (監事)、林 茂生 (2023年会長/国際化担当幹事) (○印は23期継続理事)

第23期

後藤由季子 (23期理事長)、阿形清和、大谷直子、岡田由紀 (22期庶務幹事兼)、鐘巻将人、加納純子、木村 宏 (2024年会長、22期庶務幹事兼)、胡桃坂仁志、高橋淑子、中島欽一、中山敬一、二階堂愛、三浦恭子、三浦正幸、以上34名

欠席者：第22期

一條秀憲、見學美根子<sup>○</sup>、近藤 滋、齊藤典子<sup>○</sup>、斎藤通紀、佐谷秀行、塩見美喜子、田中啓二、丹羽隆介、本橋ほづみ、吉田 稔<sup>○</sup>、吉村昭彦<sup>○</sup>、吉森 保 (○印は23期継続理事)

第23期

中西 真、濡木 理、柳田素子、以上16名

事務局：福田 博 (記録)、金子香奈里、並木孝憲、山口恵子

本理事会成立について：

岡田由紀庶務幹事より、理事31名、監事2名、年会長(幹事兼)1名が出席し、委任状15名(理事)を受任しており、本理事会は細則第4章第8条により成立する旨報告された。

議事録署名人の選任について：

白髭克彦理事長より、議事録署名人として、糸昭苑理事と二階堂愛理事が指名され、承認された。

議 事：

### 1. 報告事項

#### 1) 22期執行部報告

・理事長報告

白髭理事長より、明日からの第45回幕張年会開催に際し、深川竜郎年会長ならびに準備に当たった年会組織委員会に対しての謝辞が述べられた。

ホームページで公開しているとおり、11月5日開催の第23期新理事会準備会議において、後藤由季子氏が第23期理事長に選出されたことが報告された。

続いて22期の活動全般につき報告が行われた。いまだCOVID-19感染が続いていること、ロシアによるウクライナ侵攻など、22期任期中に起こった様々な出来事やその対応をふまえ、分子生物学会にはこの規模の学会としての社会的な責任があること、生命科学と社会とのつながりを強く認識していかなければいけない時代になっていることなどが改めて示唆された。

・会員現況

岡田庶務幹事より、2022年11月1日現在の会員数につき以下のとおり報告がなされた。

名誉会員 0名

正会員 7,972名(海外在住137含む)

シニア会員 100名

次世代教育会員 15名

学生会員 3,683名(海外在住24含む)

賛助会員 22社

合 計 11,792名(前年11月対比、-333)  
(\*上記以外に所定の手続きによる休会者61名あり)

会員減の理由の1つとして、今年の年会で初めて「非会員発表カテゴリー」が新設されたことが挙げられる。また本年は本学会非会員でも生物物理学会員であれば発表が可能である。応募演題数は順調であったので、会期中の新入会手続きに期待したい。

・生物科学学会連合について

岡田庶務幹事より11月28日に開催された生科連定例会議において、東原和成氏(東大・農)が次期(2023年1月より2年)の代表に選出されたことが報告された。

続いて、小林武彦理事(生科連・代表)より生科連の2022年の活動状況について説明がなされた。

① DORA署名を契機に生科連HPへ加盟団体の英文学会誌を紹介するコンテンツを設置。

② 「科学技術政策に関するアンケート」

参院選の機会に、各党の科学政策に対する考えを問うアンケートを実施した。

③ 「若手研究者支援に対する調査」の実施

学振特別研究員制度など、若手研究者支援を目指して行われている主だった支援事業について、課題解決に向けたさらなる改善点などを加盟団体に調査。

④高等学校の生物教育における教育用語集の作成に向けた用語要望調査実施

日本学術会議が2019年に指針として示した生物重要用語集のアップデートを図る。その第一段階として、「生物基礎」で指針として示されている生物重要用語集の内容について、追加・削除・変更等が望ましい項目に関するアンケートを加盟団体に実施。

⑤「第4回高校生 生きもののつぶやきフォトコンテスト」

12月11日に第3回生科連公開シンポジウム「生態系と生物を活かしたカーボンニュートラル」(オンライン)を開催するので興味のある方はぜひ視聴いただきたい。

・ホームページについて

原英二広報幹事より学会ホームページの運用状況について説明が行われた。2022年度に452件の記事を掲載した(昨年対比+59)。Facebookフォロワーは1,977(2022.11.19現在)、フォロワーは44歳以下が約6割を占めていることなどが報告された。

2) 第45回(2022年) 幕張年会準備状況

深川竜郎第45回年会長より、配付資料に基づき準備状況の詳細報告がなされた。今回の年会の特色を端的に示すのがメインテーマ『分子生物アングラ〜激論コロッセオ』であり、文字通り「議論できる学会」、そして「国際化/諸外国の学会との連携」(MBSJ-ASCB-EMBO 合同企画)、「生物物理との融合/異分野融合」の3つを企画のポイントとし、老若男女、上下の区別なく議論を通じて学問を深める年会を目指した。

一般演題投稿数はLate-breakingを含め2,581題、そのうち204演題は公募ワークショップに採択、540演題はサイエンスピッチ(ショートトーク)に採択された。一般演題数は昨年より127題増えている。

年会収支に重要な協賛収入であるが、展示252小間、広告/HPバナー3社、バイテクセミナー(ランチョンセミナー)19枠とバイテクショートセミナー5社、その他の協賛メニューを含め、収入額は約1億2,841万円となり、コロナ前の2019年福岡年会に近いところまで回復したことが報告された。

プログラムとしては、シンポジウム11テーマ、

ワークショップ101テーマ、フォーラムが19テーマ、高校生研究発表も45題(口頭+ポスター26題、ポスターのみ19題)となり、その他の企画として以下のプログラムを準備することが出来た。

・MBSJ2022 テーマソング: Negative Selection による「逆襲の助教」

・MBSJ-ASCB-EMBO Joint Workshop

・MBSJ special program (国際共同研究グラントやフェローシップを推進している国内外の財団/法人の方々や、国際研究雑誌の編集者を招きそれぞれの取り組みや研究支援について話していただく)

・Meet my Hero/Heroine (大学院生や博士研究員などが「憧れの先生」と直接話すことができる交流の場を設置)

・Poster Clinic by EMBO Press (EMBO Scientific PublicationsのHeadであり20年以上にわたり数々の一流ジャーナルでEditorを務めてきたBernd Pulverer博士によるポスタークリニックを実施)

・MBSJ2022 Science Pitch Award (このうち、top 1%には、EMBO awardも贈呈)

・国際化に伴い、HFSPの協賛を受ける。

・ガイドマップの作成

昨年に続き、本年会においても感染対策アドバイザーとして嘉穂洋陸会員(慈恵医大)に組織委員会に参画いただき、協力を得たことが報告された。続いて、本年会における感染症対策の説明がなされた。

明日からの年会運営に際し、理事各位のご協力をお願いしたい。

3) 第46回(2023年) 年会準備状況

林茂生第46回年会長より2023年の年会準備状況につき報告がなされた。

○会 期:

【オンライン開催】

2023年11月27日(月)~12月1日(金)の5日間

開催形式: Zoomライブ配信+オンデマンド配信

・指定シンポジウム10企画

・公募シンポジウム30企画程度(予定)

・高校生発表

【現地開催】

2023年12月6日(水)~12月8日(金)の3日間

開催形式: 登壇者、聴講者ともに現地参加のみ

(オンライン配信やオンライン発表の対応はなし)

・公募シンポジウム80企画程度(予定)

・フォーラム

・ポスター発表

・高校生発表

○会場：神戸ポートアイランド

○演題登録期間：

2023年7月3日(月)～7月31日(月)※予定

○事前参加登録期間：

2023年7月3日(月)～10月10日(火)※予定

○開催方式：オンサイト+オンライン併用

○組織委員：

年会長 林 茂生 (理化学研究所)  
組織委員長 榎本秀樹 (神戸大学)  
プログラム委員長 平谷伊智朗 (理化学研究所)  
組織委員 岡田由紀 (東京大学)、川口  
喬吾 (理化学研究所)、久保  
郁 (国立遺伝学研究所)、宮  
道和成 (理化学研究所)

続いて、指定シンポジウム (全10テーマ)のテーマ、オーガナイザーの説明がなされた。

本日、第46回年会ホームページが公開され (11/30学会ホームページからもリンク済み)、公募シンポジウム企画応募受付が開始されたので、詳細はホームページを参照されたい (締切：2023年1月31日)。募張年会に続いて、来年も一人一演題の制限を廃止したいとの説明がなされた。

ポスター発表については公募シンポジウムでの採択を予定、ディスカッサー制度も導入予定である。その他、一般市民にも参加いただけるアウトリーチ企画の市民公開講座など、鋭意検討中である。

#### 4) 第47回 (2024年) 年会準備状況

木村宏第47回年会長より2024年の年会準備状況につき報告がなされた。

○会期：2024年11月27日(水)～29日(金)の三日間

○会場：福岡国際会議場、マリンメッセ福岡A館・B館

○組織委員：

年会長 木村 宏 (東京工業大学)  
副年会長 糸 昭苑 (東京工業大学)  
組織委員長 岩崎博史 (東京工業大学)  
プログラム委員長 松浦友亮 (東京工業大学)  
組織委員 岩崎由香 (慶應義塾大学 /  
理化学研究所)、三浦恭子  
(熊本大学)

開催方針について以下、詳細説明が行われた。

- ・全セッションをオンラインでも視聴可能とし、口頭発表者は現地参加想定、特別な場合にはオンライン発表も可とする。
- ・ポスター発表について、会期前日の午後や

初日の朝にオンライン発表枠を設けたい。

・ポスター発表には、現地もオンラインもディスカッサーをつける予定。

・トークは、一人一演題の制限を設けることとしたい。

・非会員でも演題投稿可能な参加登録カテゴリについては継続して採用する。

#### 5) 第48回 (2025年) 年会について

小林武彦第48回年会長より2025年の年会について報告がなされた。

○会期：2025年12月3日(水)～5日(金)

○会場：パシフィコ横浜

2025年、2026年と2年連続の会場使用をすることで施設側と費用の値引き交渉を行った。結果、2021年 (第44回横浜年会) と同額の料金体系で使用することが可能となり、横浜開催を決定した。まずは近いうちに組織委員会を構成、具体的な準備に着手したい。

#### 6) 第49回 (2026年) 年会について

水島昇第49回年会長より2026年の年会について報告がなされた。

○会期：2026年12月1日(火)～4日(金)の四日間

○会場：パシフィコ横浜

日本生化学会大会との合同大会 (BMB) を予定している。生化学会側の大会長 (会頭) は本学会理事でもある胡桃坂仁志氏である。合同大会全体としてのプログラム委員長は、後藤由季子氏に引き受けていただいた。先ずは来年1月、BMB2026運営会社選定のためのプレゼン・ヒアリングの会を行う予定である。

#### 7) 理事選挙結果報告

岡田庶務幹事 (23期理事選挙管理委員長兼) より配付資料に基づき、投票期間、投票者数、投票総数等、選挙実施報告が行われた。今回、理事定員30名の20% (6名) の女性理事枠規定が運用されることなく、10名の女性理事が選出された。

#### 8) 上村匡編集幹事より配布資料に基づき学会誌『Genes to Cells』の編集報告が行われた。

先ずポピュラリティー全般について説明がなされた。プレプリントサーバーへのアップロードや公開リポジトリでの共有など、オープンリサーチへの取り組みが加速している現状がある。また、電子ジャーナル購読料をAPC (論文処理費用) に段階的に移行する、いわゆる転換契約を導入する大学も増えつつあり、刻々と変化する学術論文を取り巻く状況、契約形態の変化にも注視していきたい。

続いて、国内の編集委員一覧、2003年から2022年までのOnline投稿数とaccept率、2022国別投稿数、さらに7割強と推察されるpaper millと思われる国別投稿数について説明が行われた。また、この1年でIFが0.4ポイント上がっていることが報告された。

本幕張年会展示会場にて、3年分のカバーアートタペストリーを展示しているのでぜひご覧いただきたい。引き続き、理事各位のご協力をお願いしたい。

9) 各種学術賞、研究助成候補への学会推薦状況について

泊幸秀賞推薦委員長より、2022年に本学会より推薦した各種学術賞について報告がなされた。

引き続き、一條秀憲研究助成選考委員長代理で佐々木裕之同委員より、2022年の研究助成推薦状況と結果等について報告が行われた。

10) キャリアパス委員会報告

斉藤典子キャリアパス委員長に代わり、木村宏副委員長より配付資料に基づき委員会の活動内容が報告された。

①本年会においては以下2企画のランチタイムセミナーを開催するので、理事各位においては積極的に参加いただきたい。

1. 『アカデミアからの起業』(会期初日/11月30日)

2. 『研究室の働き方改革

～withコロナ時代のネクストスタンダード～』

(年会2日目/12月1日)

(\*2の事前アンケート(2022.8.87-29)には397名の回答を得た)

②「コロナ禍における海外学術集会参加に関するネットワーク掲示板」設置

欧米では3月頃に早くも対面学会再開の機運があったことなどから、生命科学系研究者が海外学術集会に参加する際の一助となるよう6月に学会HP上に情報交換サイトを設置した。3月下旬～8月下旬に海外の学術集会等へ参加された方から、現地事情や出入国の手続き、現地でコロナに感染した場合の措置といった体験談などを寄稿いただき、掲示板形式のデータベースとして蓄積したことが報告された。

③第45回年会における属性調査結果より、「バランスの取れた研究環境を築くために～年会における演題発表者等の属性調査～(女性比率の推移表)」のポスターが作成され、年会会期中、展示会場で掲示される。

④「女子中高生夏の学校2022(夏学2022オンライン/8月7-8日)」への学会協力

会員に公募で協力を募り、応募者の中から1チームに参加を依頼したことが報告された。

〈ポスター・キャリア相談「研究者・技術者と話そう」「生命現象を分子レベルで理解する～あるウイルス研究者夫婦の試み」

小林美栄会員(慶應大)・小林郷介会員(都医学研)

11) 研究倫理委員会報告

中山潤一研究倫理委員長より今年の研究倫理ランチョンセミナーの内容について報告が行われた。

○研究倫理委員会企画・研究倫理ランチョンセミナー『論文』を情報源とした発信、全部信じて大丈夫?』

◆日時:

2022年12月2日(金)11:45~12:35(50分)

(年会最終日、講演形式で実施)

近年、オープンアクセス化への流れが加速している。特に公的な研究助成によって得られた成果は、オープンアクセスによって自由にアクセスできるように公開すべきというののもっともな意見であり、研究者、公的助成機関だけでなく、学術論文を出版する出版社が共同で取り組むことが望まれる課題である。一方、このオープンアクセス化の流れに便乗して、掲載料収入のみを目的とした粗悪雑誌が台頭するなどの問題も浮き彫りになってきた。また、プレプリントサーバを通して査読を経ない論文が公開された場合、その内容に基づき発信された情報に対して私たちはどのように接したら良いのか、様々な課題が指摘されている。

今回の研究倫理ランチョンセミナーでは、学術出版の多様化について講演者に話題提供をしてもらい、今後どのように論文を公開し、また公開された論文の情報に向き合うべきなのか、研究者の立場から議論する機会にしたい。

昨年に続き、会期3日目のランチタイムに開催するので、理事会関係者においてもぜひ参加いただきたい。

◆講演

「学術出版の多様化と社会における情報の取り扱い—新型コロナウイルス感染症に

まつわる実例から考える—」

井出和希氏(大阪大学感染症総合教育研究拠点/ELSIセンター)

(\*会員のオープンアクセスやプレプリントについての認識を把握する目的で、事前アンケート(2022.9.1~10.5)を実施、633名の回答を得た。集計結果は後日学会HPで公開予定)

12) 国際会議支援・選考委員会報告

小林武彦国際会議支援・選考委員長より、第11回目(2023年)となる国際会議支援についての選考結果について報告された。本年の応募は3件で、選考委員会における慎重な審査を経て、理事長承認のもと、以下の会議が採択された。

《会議名称》

(和文) 第19回毛細血管拡張性運動失調症ワークショップ2023(ATW2023)

(英文) The 19th Ataxia-Teleangiectasia Workshop 2023(ATW2023)

開催責任者: 高田穰(京都大学大学院生命科学研究科 附属放射線生物研究センター・教授)

会期: 2023年3月2日(木)~5日(日)

会場: 京都府立京都学・歴彩館

助成金額: 80万円

《会議名称》

(和文) 第33回国際シロイヌナズナ研究会議

(英文) 33rd International Conference on Arabidopsis Research(ICAR2023)

開催責任者: 関原明(理化学研究所環境資源科学研究センター・チームリーダー)

会期: 2023年6月5日(月)~9日(金)

会場: 幕張メッセ・国際会議場(千葉市)

助成金額: 70万円

《会議名称》

(和文) 第36回国際哺乳類ゲノム会議

(英文) The 36th International Mammalian Genome Conference(IMGC2023)

開催責任者: 城石俊彦(理化学研究所バイオリソース研究センター・センター長)

会期: 2023年3月28日(火)~31日(金)

会場: つくば国際会議場(つくば市)

助成金額: 50万円

続いて小林委員長より、COVID-19の影響を受けここ数年予算を縮小していたが、次年度予算(国際会議支援事業)では助成金の総額を400万円に戻す予定であることが報告された。

### 13) 生命科学教育(高校などへの講師派遣の状況)について

塩見春彦担当理事より配付資料に基づき、2022年の高校などへの講師派遣の状況、および2022年幕張年会における高校生研究発表会の状況(過去10回の実績と今年会の発表予定)について報告がなされた。今年は過去最大の発表演題数(口頭26演題、ポスター45演題)で、214名の参加予定者数(参加校30校)となっている。岩崎渉生命科学教育担当委員とキャリアパス委員にディス

カッサーとして協力いただく予定である。

## 2. 審議事項

### 1) 令和4年度(2022年度)決算承認の件

東山哲也会計幹事より令和4年度活動計算書の収支について説明がなされた。

決算概要であるが、前期繰越正味財産額1億9,933万円に対し、次期繰越正味財産額は1億8,701万円といった約1,232万円の赤字決算(繰越金減)となった。赤字となった主たる理由は、昨年(第44回横浜年会)への収支補填(年会決算への補填金は約1,348万円)である。昨年の年会は、企業協賛収入がコロナ前の6割程度(2019年福岡年会に比べ約5,200万円の減)であったことを考慮すると、年会組織委員会の努力により最終学会赤字がこの程度で終えられたことに感謝したい。

昨年総会時の予算に比べ、赤字を縮小できた理由の1つとして、①『Genes to Cells』の出版社からの総利益折半の精算が順調であったこと(精算時の為替レートも円安であった)、②収支改善のため昨年より開始された学会本体ホームページの広告収入120万円が計上されたこと、③赤字決算となったため、租税公課(消費税支払い)が大幅に減額となったこと、などが挙げられる。続いて、事業費の内訳表に基づき、各事業科目別の収支についても詳細説明がなされた。

本決算は本年10月28日に宮城秀敏公認会計士の監査を受け、さらに同年11月9日に荒木弘之監事、石野史敏監事による会計監査を受け、配付資料のとおり監査報告書が提示されている。

続いて、石野監事より11月9日に学会事務局において、荒木監事と共に会計監査を実施し、監査報告書に記載したとおり、帳簿ならびに会計証憑類は正確に整えられており、各金融機関の通帳と残高証明書をすべて確認し、同決算を認めたことが報告された。

また決算監査報告とは別に、事務局職員のベースアップを含む職員給与規程の改定・検討を執行部の方々にはお願いしたいとの意見が提出された(\*同規定の最後の改定は2014.3.23)。

審議の結果、本決算は理事会で承認され、第45回通常総会に諮られることとなった。

決算に関係して、出席理事の一人より流動資産(定期預金は現在5行に分けており、その合計額は1億1,600万円である)をもっと資金運用すべきであるとの意見が提出された。これについて賛否両論の意見が提出され、ハイリスク・ハイリターン(金融商品)には手を出すべきではないとの意見が多数出された。現状、信託銀行との取引もある

ので、事務局は投資信託の情報を集めておくこと  
としたい。

## 2) 令和5年度(2023年度)活動予算書承認の件

東山会計幹事より、令和5年度活動予算書と同  
活動予算・事業費の内訳について説明が行われた。

令和5年度予算は、新型コロナウイルス  
(COVID-19)の影響は多少残るものの、2022幕  
張年会収支が大きく改善方向にあり、3年ぶりの  
黒字予算編成となっている。

会員数は微減であるものの会費納入率は順調で  
あろうと見込んでいる。国際会議支援事業(対象  
は2023年開催の国際会議)については、支援金  
の総額を400万円に戻した。年会収支以外のその  
他の各種事業科目、管理費科目は、前年決算の実  
績額をふまえ、数字を反映させている。Genes to  
Cellsの出版収入は為替レートの予想が難しいが、  
利益折半1,700万円+定額編集補助100万円の計  
1,800万円を見込んだことが説明された。

今回あらたに、事業費の内訳科目:年会その他  
のところで、「WiSJ・EMBO企画開催助成」とし  
て50万円の申請があり、次年度予算に繰り入れ  
たので、合わせて検討いただきたい。

続いて、岡田庶務幹事より配付資料(助成金  
申請書の発信者は次の4氏:岡田由紀(東大)、  
齊藤典子(がん研)、平谷伊智朗(理研)、木村  
宏(東工大))に基づき説明がなされた。Women  
in Science Japan(WiSJ)の活動概況説明に続き、  
2022年度は第45回幕張年会のサテライトシンポ  
ジウムとして下記の活動を行うことが報告され  
た。

(1) EMBO Laboratory Leadership Course(12月  
3日、東京国際フォーラム)

(2) 第三回ISFRCB2022国際シンポジウム(12  
月5日、Zoomオンライン)

同企画助成について、理事会の賛同を得た(活  
動の状況のみ、今後複数年、本学会が助成して  
いく予定である)。

以上、令和5年度は法人全体として178万円の  
黒字予算を編成したことが、東山会計幹事より説  
明された。

審議の結果、同予算書は理事会で承認され、第  
45回通常総会に諮られることとなった。

## 3) DORA署名について

DORA(研究評価に関するサンフランシスコ宣  
言)署名については、昨年の定例理事会で生科連  
がDORA署名することについて、分子生物学会  
として賛同しており、その際に学会としても前向  
きに検討する方向で現在に至っている。

白髭理事長より資料が配付され、日本での署名  
の状況(10機関・141名 2022.11.14現在)、宣  
言の内容について説明がなされた。続いて、後藤  
由季子第23期理事長より追加説明が行われた。

DORAは研究者評価のあり方についての宣言  
であり、その宣言には、研究論文の質をはかる代  
替的な方法として、インパクトファクターのよう  
な学術雑誌ベースの数量的指標を用いないよう  
にするという精神性が掲げられている。これ自体が  
具体的な効果、メリットを生むものではないかも  
しれないが、おそらく、生物系最大規模の本学会  
が署名することで

『インパクトファクターだけで研究者の人事評  
価をするべきではない』というメッセージになる  
ことが期待される。

審議の結果、学会としてDORA署名すること  
となった。

## 4) 次期事務局長について

先ず本議題において、一旦事務局職員は会場を  
退出することとした。

白髭理事長より、福田氏の2023年3月の事務  
局長退任に伴う、次期事務局長人事について審議  
したい旨の発言がなされた。候補となる人選であ  
るが、事務局業務の継続性を考慮すると相応しい  
候補者がいれば内部昇格が望ましいと考え、本年  
9月、岡田庶務幹事と共に、並木孝憲職員との面  
談を行った。その後、福田氏にも詳細を確認し、  
さらに22期執行部に確認を取った。理事長とし  
て並木職員を次期事務局長に推薦したいとの案が  
提出された。自由討論が行われ、その後、候補者  
本人に入室してもらい、質疑応答が行われた。

討議の結果、並木孝憲氏を次期(2023年4月~)  
事務局長に決定した。

関連して、討議の結果、23期の執行部におい  
て、2023年4月からのベースアップを含む職員  
給与規程の改定検討、さらに職員補充のタイミン  
グの検討など、適切に対応していくこととなった。  
理事会はそれをサポートしていくことが確認され  
た。

なお、福田氏は2023年4月以降は時短勤務(\*  
嘱託職員規則に基づく)となるが、2年間、事務  
局業務をサポート、引き続き、業務に従事して  
もらうこととなっている。

## 5) 第23期理事会の体制、執行部、幹事、各種委員 会委員長/委員について

後藤由季子第23期理事長より挨拶がなされた。  
学際的で自由な雰囲気こそが分子生物学会のアイ  
デンティティーであると認識しているが、その文

化を継承しながら、さらなる新たな取り組みにも挑戦していきたい。年会中に執行部候補の方々と話し合いの場を持つので、23期の活動方針等をつめていきたいと考えている。

続いて、役員・幹事・各委員長の名簿（案）が配付され、原案どおりに承認された。各種委員会の委員構成については、年会終了後に各理事に就任依頼を行う予定である。年内にはすべての各種委員会を決定していきたい。

#### 6) 第23期監事候補の選任

白髭第22期理事長から、第23期の監事候補として佐々木裕之会員、塩見美喜子会員が推薦され、承認された。監事については第45回通常総会で承認を得た後、正式選任となる。

#### 7) 第23期副理事長の選任

事務局より副理事長選出に関する細則の説明がなされ、その後、岡田庶務幹事の進行のもと議事が進められた。その後、23期出席理事により投票が行われ、副理事長として、見學美根子氏と塩見春彦氏が選任された。

#### 8) その他

- (1) 22期から23期への申し送りを兼ねて、22期で退任される各理事より各種のコメントが提出された。
- (2) 学会のあり方、年会のあり方について、活発

な意見交換がなされた。

(3) 22期（昨年 of 定例理事会）で議論された「年会長と理事長の兼務の問題（案件）」について、木村宏22期庶務幹事（23期理事）よりコメントが提出された。本件については、配慮するといった程度の表現で理事会内の申し送りにしたらどうかと考えており、その旨を23期理事会に申し送りたい。

9) 白髭理事長より退任の挨拶がなされた。会議の冒頭でも少しふれたが、科学のおかれている厳しい状況のなか、声をあげていくことの大切さ、社会との関わり、若い科学者をどのように育てていくか、等々、抱える課題は多い。23期理事として留任するので、引き続き尽力していきたい。

上記、第22期・第23期合同理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名する。

2022年11月29日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会  
第22期・第23期合同理事会  
議長 白髭克彦  
議事録署名人 糸 昭 苑  
議事録署名人 二階堂 愛

## 特定非営利活動法人 日本分子生物学会 令和5年度（第45回）通常総会記録

日時：令和4年12月1日(木) 19:00~20:00

場所：幕張メッセ国際展示場（第19会場）

社員数(正会員+名誉会員+シニア会員+次世代教育会員)：  
8,087名

出席者数：4,196名(本人出席45名、表決委任者4,151名)

議事内容：

1. 冒頭に白髭克彦理事長より開会の辞が述べられた；29年ぶりに幕張で開催中の本年会は深川竜郎年会長のすばらしいオーガナイズによってまさに「激論コロッセオ」となっており、若手のみならずシニアの参加者にも良い刺激となっている。  
続けて白髭理事長より、定款第25条に基づき、本総会議長として木村宏会員が指名された。さらに定款第29条に基づき、議事録署名は、深川竜郎会員（第45回年会長兼）と白髭理事長が担当することが確認された。
2. 木村議長より、定款第26条（総会の定足数）に基づき、上記表決委任者（委任状）を含めて出席4,196

名となり、本総会は成立する旨報告された。

### 3. 経過報告（事業報告）

#### 1) 理事長報告

白髭理事長より、事業活動全般と、下記2点について報告が行われた。

- ① 11月29日開催の第22期・第23期合同理事会において、DORA（研究評価に関するサンフランシスコ宣言）に学会として署名することが決定した。
- ② 11月29日開催の第22期・第23期合同理事会において、本学会の運営を長年支えた福田博事務局長が2023年3月末に定年となり退任予定であることを受け、2023年4月より並木孝憲事務局職員を後任の事務局長とすることが決定した。

理事長報告の最後に白髭理事長より退任の挨拶があり、第22期の理事会メンバーならびに事務局へ謝意が述べられた。研究活動は税収によって

支えられており、学会が社会制度を変えていくための施策提言活動を行う時期に来ているかもしれないとの示唆とともに、後藤由季子次期理事長への激励がなされた。

※理事長報告に関する詳細は11月29日開催の第22期・第23期合同理事会記録を参照のこと。

## 2) 庶務報告

岡田由紀庶務幹事より以下の報告が行われた。

①会員現況：〔2022年11月1日現在〕正会員7,972名、シニア会員100名、次世代教育会員15名、学生会員3,683名、賛助会員22社、総計11,792名（前年11月対比、-333）

②第23期理事選挙：選挙管理委員会のもとで2022年6～7月の間で会員による投票が行われ、第23期理事が選出された。新理事30名のうち10名が女性であり、女性理事の比率が初めて30%を超えた。11月には新理事会準備会議が開かれ、後藤由季子氏が第23期理事長に選出された。

③生物科学学会連合：次期（2023年1月より2年間）の代表について、11月28日に開催された生科連定例会議において東原和成氏（東大・農）が選出された。

## 3) 編集報告

上村匡編集幹事より『Genes to Cells』について報告が行われた。

西田栄介編集長が学会HPでも発信している通り、本誌はすべての生命科学研究者に寄り添う編集方針としており、日本語での投稿相談も可能なので、遠慮なく編集室へご連絡いただきたい。なお本年会ではポスター会場内の特設講演会場の壁面に『Genes to Cells』カバーアート掛け軸3年分を展示している。ぜひご覧いただきたい。

## 4. 議事

### 1) 令和4年度（2022年度）決算承認の件

東山哲也会計幹事より総会資料に基づき、令和4年度活動計算書の収支について詳細報告が行われた。2022年10月28日、公認会計士宮城秀敏氏の会計監査を受け（総会資料の独立監査人の監査報告書を参照）、さらに同年11月9日に学会事務所において荒木弘之監事、石野史敏監事による監査会を実施したことが報告された。

続いて石野監事より、帳簿ならびに会計証憑類は正確に整えられており、荒木監事と共に各金融機関の通帳と残高証明書を確認し、同決算を認めたことが報告された。

審議の結果、本決算は異議なく承認された。

### 2) 令和5年度（2023年度）活動予算書承認の件

東山会計幹事より総会資料に基づき、令和5年度活動予算書について説明が行われた。審議の結果、同活動予算書は異議なく承認された。

### 3) 第23期監事選任の件

定款第14条に基づき、白髭理事長より第23期監事として佐々木裕之会員、塩見美喜子会員が推薦され、承認（選任確認）された。

### 5. 第45回（2022年）年会長挨拶

深川竜郎第45回年会長より年会開催状況について途中報告が行われた。

- ・参加者数は6,000人を超える見通しとなった。企業協賛についても復調の兆しが見えつつあり、2021年の横浜年会からさらに増え、高額のスポンサーにも付いていただくことができた。
- ・本年会はオンサイトを基本とし、講演セッションのみオンラインでも視聴可能としている。またプレナリーレクチャーはオンデマンド配信も行う。
- ・若い人が求めているものを試行錯誤しながら色々取り入れた。オンラインプラットフォームはAGRI SMILE社の「ONLINE CONF」を採用し、Graphical abstractを活用した検索の仕掛けなど、様々なリクエストに対応してもらった。「Meet my Hero/Heroine」企画では、学生などの若い参加者が著名な研究者と直接話せる機会を設定した。各会場で盛況となっているサイエンスピッチ（ポスター発表者による3分間のショートトーク）では審査を行っており、優秀発表賞を授与することになっている。フォトスポットや公式テーマソング「逆襲の助教」（Negative Selection）はSNSでも話題となり、皆さんに年會を様々な形で楽しんでもらえているようである。
- ・国際化という観点からはASCBやEMBOと連携して昼の特別企画などを行っている。HFSPの協力も受け、非常に充実した議論ができています。またEMBOにはサイエンスピッチやポスタークリニックのEMBO Prize各賞も設定いただいている。
- ・感染対策アドバイザーの嘉糠洋隆会員（東京慈恵医大）には2021年會に続き助けていただいた。基本的に国や自治体の指針に沿った対応とし、収容率は100%として参加者には黙食をお願いした。
- ・学生の頃、大石道夫年会長による29年前の幕張年會に参加した。その翌年が石浜明先生の神戸年會という、まさに分子生物学会が大きくなろうとしている時期だった。また2009年會の運営に参画した時、小原雄治年会長が「ポスター会場・講演会場・展示会場が一体となった形でやりたい」

と語っておられた。当時はまだ技術的に難しかったが、今回この幕張で実現できた。久々の対面メインの年会で「激論できる学会」の場を提供することができ、好評をいただいている。

#### 6. 第46回(2023年)年会長挨拶

林茂生第46回年会長より2023年の年会開催企画案と準備状況について報告が行われた。

・会期:

オンライン先行開催:2023年11月27日(月)~  
12月1日(金)

オンサイト開催:2023年12月6日(水)~8日(金)

・会場:神戸ポートアイランド(神戸国際会議場、  
神戸国際展示場、神戸ポートピアホテル)

コロナ禍で完全オンライン開催となった2020年会が当初は神戸で開催予定だったことなどもあり、神戸での開催を決定した。MBSJ2022出展企業に話を聞いたところ、展示会場内に講演会場があることに対して強い歓迎の意を示された。神戸年会でも出展企業の希望にできるだけ副える方法を検討しつつ、よいサイエンスが穏やかに議論できる場を提供したい。

#### 7. 第47回(2024年)年会長挨拶

木村宏第47回年会長より2024年の年会開催企画案と準備状況について報告が行われた。

・会期:2024年11月27日(水)~29日(金)

・会場:福岡国際会議場・マリンメッセ福岡

これまで福岡での年会はキャパシティの都合上会期4日で行われていたが、新しい展示場(マリンメッセB館)が増えて3日での開催が可能となった。2023年の早い時期に会場視察を行う予定である。ハイブリッド形式で開催し、現地・オンラインそれぞれの長所を活かして、できるだけ参加を希望する人全員がどこからでも参加できる形を目指した

い。例えばポスター発表は会期前日などにオンライン発表枠を別途設け、現地参加ができない人も発表の機会を得られるようにしたいと考えている。

#### 8. 次期理事長挨拶

後藤由季子次期理事長より挨拶があった。MBSJ2022に参加して、同行した学生たちも自分自身も大いに刺激を受けたことで希望がわき、対面ディスカッションの盛り上がりの大切さを強く感じた。これから理事長として、草の根の声を聞いて必要なものを把握し責任を持って行政につなげること、年会を盛り上げること、その両方を果たしたいと考えている。

#### 9. その他

総会出席者より「研究公正に関するヒヤリ・ハット集」(AMED刊行)の紹介があった。研究者自身の判断や周囲からの指摘等により研究不正やガイドライン違反等を踏みとどまった好事例を広く発信することを目的としており、追補版作成にあたって事例の提供を呼びかけているとのことである。

#### 10. 木村議長より閉会の挨拶があり、第45回総会が終了した。

上記、令和5年度通常総会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名する。

令和4年12月1日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会  
令和5年度通常総会  
議長 木村宏  
議事録署名人 白髭克彦  
議事録署名人 深川竜郎

# 令和4年度(2022年度) 決算報告

## 令和4年度(2022年度) 活動計算書

令和3年10月1日から令和4年9月30日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金	額	
I 経常収益			
1 受取入会金			
正会員受取入会金	318,000		
学生会員受取入会金	1,126,000		
		1,444,000	
2 受取会費			
正会員受取会費	50,695,000		
学生会員受取会費	8,586,000		
賛助会員受取会費	960,000		
シニア会員受取会費	267,000		
次世代教育会員会費	71,500	60,579,500	
3 受取寄付金	6,062,000	6,062,000	
4 受取助成金	2,200,000	2,200,000	
5 事業収入			
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	133,705,590		
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	20,881,277		
(3)その他目的を達成するために必要な事業	1,468,500	156,055,367	
6 その他収益			
受取利息	2,057		
雑収入	88,200	90,257	
経常収益計			226,431,124
II 経常費用			
1 事業費			
(1)人件費			
給与手当	11,400,577		
法定福利費	1,805,861		
福利厚生費	27,228		
人件費計	13,233,666		
(2)その他経費			
業務委託費	77,425,779		
編集業務費	4,381,031		
印刷費	8,660,670		
通信運搬費	3,341,007		
旅費交通費	1,867,586		
会議費	713,042		
支払手数料	2,111,621		
消耗品費	1,915,446		
会場費	56,336,871		
機材費	24,820,202		
諸会費	60,000		
広報費	0		
補助金	2,000,000		
雑費	907,732		
租税公課	856,126		
寄付金支出	0		
その他経費計	185,397,113		
事業費計		198,630,779	
2 管理費			
(1)人件費			
給与手当	18,009,062		
法定福利費	2,848,429		
福利厚生費	42,951		
人件費計	20,900,442		
(2)その他経費			
事務所家賃	3,781,162		
業務委託費	2,116,400		
会員管理システム運用管理費	2,735,282		
印刷費	1,651,890		
通信運搬費	2,628,831		
旅費交通費	1,068,280		
会議費	13,242		
支払手数料	1,900,708		
消耗品費	347,799		
雑費	791,906		
租税公課	223,800		
退職給付引当金繰入	1,960,200		
その他経費計	19,219,500		
管理費計		40,119,942	
経常費用計			238,750,721
当期正味財産増加額			△ 12,319,597
前期繰越正味財産額			199,330,778
次期繰越正味財産額			187,011,181

(単位：円)

## 令和4年度(2022年度) 貸借対照表

令和4年9月30日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額		
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金	189,188,067		
前払費用	10,937,769		
立替金	8,416,767		
流動資産合計		208,542,603	
2 固定資産			
工具器具備品	1		
敷金	1,802,000		
固定資産合計		1,802,001	
資産合計			210,344,604
II 負債の部			
1 流動負債			
未払金	111,833		
未払法人税等	70,000		
未払消費税	153,200		
前受会費	332,500		
前受金	1,000,000		
預り金	584,690		
流動負債合計		2,252,223	
2 固定負債			
退職給付引当金	21,081,200		
固定負債合計		21,081,200	
負債合計			23,333,423
III 正味財産の部			
前期繰越正味財産		199,330,778	
当期正味財産増加額		△ 12,319,597	
正味財産合計			187,011,181
負債及び正味財産合計			210,344,604

(単位：円)

## 令和4年度(2022年度) 財産目録

令和4年9月30日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目		金 額	
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金			
現金	35,147		
郵便振替 00110-1-901302	13,112,013		
普通預金 三菱 UFJ 銀行 春日町支店	1,664,295		
普通預金 三菱 UFJ 銀行 所沢支店	3,373,356		
普通預金 三菱 UFJ 信託銀行 上野支店	225,464		
普通預金 三井住友銀行 飯田橋支店	54,322,668		
普通預金 三井住友信託銀行 芝営業部	353,113		
普通預金 みずほ銀行 本郷支店	102,011		
定期預金 三菱 UFJ 銀行 春日町支店	30,000,000		
定期預金 三井住友銀行 飯田橋支店	30,000,000		
定期預金 三菱 UFJ 信託銀行 上野支店	10,000,000		
定期預金 三井住友信託銀行 芝営業部	36,000,000		
定期預金 みずほ銀行 本郷支店	10,000,000		
前払費用 事務所家賃 10 月分	324,769		
前払費用 2022 年分 Genes to Cells オンライン費用	5,509,110		
前払費用 第 45 回年会開催補助金	5,000,000		
前払費用 学会事務所 火災保険 AIG 損保	31,890		
前払費用 新理事会準備会議会場費	72,000		
立替金 編集経費 (2022 年 1 月分以降)	8,416,767		
流動資産合計		208,542,603	
2 固定資産			
工具器具備品 電話取付一式	1		
敷金 学会事務所・編集室	1,802,000		
固定資産合計		1,802,001	
資産合計			210,344,604
II 負債の部			
1 流動負債			
未払金 通信運搬費(ひかり電話, メールサーバ)	38,919		
未払金 通信運搬費(ヤマト運輸)	1,628		
未払金 通信運搬費(NTT コミュニケーション)	5,250		
未払金 印刷費(コピーカウンター料)	54,156		
未払金 雑費(外部倉庫)	11,880		
未払法人税等	70,000		
未払消費税	153,200		
前受会費 令和5年度以降会費	332,500		
前受金 GTC 編集費・出版社補助金	1,000,000		
預り金 源泉所得税	177,690		
預り金 誤入金(ワケンビーテック株より 10/7 返金)	407,000		
流動負債合計		2,252,223	
2 固定負債			
退職給付引当金	21,081,200		
固定負債合計		21,081,200	
負債合計			23,333,423
III 正味財産の部			
前期繰越正味財産		199,330,778	
当期正味財産増加額		△ 12,319,597	
正味財産合計			187,011,181
負債及び正味財産合計			210,344,604

(単位:円)

## 令和4年度(2022年度) 計算書類の注記

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

### 1. 重要な会計方針

計算書類の作成は、NPO 法人会計基準（2010 年 7 月 20 日 2011 年 11 月 20 日一部改正 NPO 法人会計基準協議会）によっております。

#### (1) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産の減価償却は定率法を採用しております。

#### (2) 引当金の計上基準

退職給付引当金は従業員の退職給付に備えるため、当期末における退職給付債務に基づき当期末に発生していると認められる金額を計上しております。

なお、退職給付債務は期末自己都合要支給額に基づいて計算しております。

#### (3) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税込方式を採用しております。

### 2. 事業費の内訳

別紙（44 頁参照）

### 3. 固定資産の増減内訳

(単位：円)

科目	期首取得価額	取得	減少	期末取得価額	減価償却累計額	期末帳簿価額
工具器具備品	955,847	0	0	955,847	△ 955,846	1
敷金	1,802,000	0	0	1,802,000	0	1,802,000
合計	2,757,847	0	0	2,757,847	△ 955,846	1,802,001

### 【監査報告】

令和4年度(2022年度)決算に関して、令和4年10月28日、独立監査人 宮城秀敏公認会計士の監査を受けました。その計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、令和4年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。との監査報告書の提出を受けました。その後、同年11月9日に荒木弘之監事、石野史敏監事による監査を終了しました。(両監事による会計監査は、帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きにより行われた) ここにご報告いたします。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

第22期理事長 白 髭 克 彦

理事(会計幹事) 東 山 哲 也

# 2022 年度事業費の内訳

特定非常勤活動法人 日本分子生物学会  
(単位：円)

科目	①学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業				②分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業				③その他の目的を達成するために必要な事業				合計	
	第44回年会	年会その他(海外アワード・冊子)	年会その他(年会アンケータ等)	国際会議文費	会報発行	Genes to Cells 編集	Genes to Cells オンライン	ホームページ関係	社会貢献・教育活動	各種委員会(男女共同参画・その他)	事業費その他(研究倫理・その他)	事業費計	管理部門	合計
I 経常収益														
1. 受取会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,444,000	1,444,000
2. 受取会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	60,579,500	60,579,500
3. 受取寄付金	6,062,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6,062,000	0	6,062,000	6,062,000
4. 受取助成金	2,200,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,200,000	0	2,200,000	2,200,000
5. 事業収入														
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	133,705,590	0	0	0	0	0	0	0	0	0	133,705,590	0	133,705,590	133,705,590
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	0	0	0	0	0	20,881,277	0	0	0	0	20,881,277	0	20,881,277	20,881,277
(3)その他の目的を達成するために必要な事業	0	275,000	0	0	0	0	0	1,193,500	0	0	1,193,500	0	1,193,500	1,193,500
事業収入計	133,705,590	275,000	0	0	0	20,881,277	0	1,193,500	0	0	156,055,367	0	156,055,367	156,055,367
6. その他収益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	90,257	90,257
経常収益計	141,967,590	275,000	397,722	2,000,000	0	20,881,277	0	1,193,500	0	0	164,317,367	62,113,757	226,431,124	226,431,124
II 経常費用														
(1) 人件費														
給与手当	3,072,933	0	0	0	678,240	810,210	0	1,356,481	1,488,450	3,655,143	339,120	11,400,577	18,009,062	29,409,639
法定福利費	484,046	0	0	0	107,048	130,320	0	214,097	237,368	577,131	55,851	1,805,851	2,848,429	4,654,290
福利厚生費	7,298	0	0	0	1,614	1,965	0	3,228	3,579	8,702	842	27,228	42,951	70,179
人件費計	3,564,277	0	0	0	786,902	942,495	0	1,573,806	1,729,397	4,240,976	395,813	13,233,666	20,900,442	34,134,108
(2) その他経費														
事務所家賃	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3,781,162	3,781,162
業務委託費	69,164,819	0	396,000	0	0	0	0	1,936,000	0	240,380	1,540	77,425,779	2,116,400	79,542,179
編集業務費	0	0	0	0	0	4,381,031	0	0	0	0	4,381,031	0	4,381,031	4,381,031
会員管理システム運用管理費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,735,282	2,735,282
印刷費	5,912,520	781,760	0	0	1,965,500	0	0	0	0	0	3,190	8,660,670	1,651,890	10,312,560
通信運搬費	2,341,886	0	0	0	999,121	0	0	0	0	0	0	3,341,007	2,628,831	5,969,838
旅費交通費	1,812,586	9,000	0	0	0	0	0	0	0	11,000	35,000	1,867,586	1,068,280	2,935,866
会費	231,264	1,262	1,062	0	0	0	0	0	0	341,454	138,000	713,042	13,242	726,284
支払手数料	2,077,550	0	660	0	65,046	0	0	0	0	0	33,411	2,111,621	1,900,708	4,012,329
消耗品費	1,852,400	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,915,446	347,739	2,263,245	2,263,245
会費	56,336,871	0	0	0	0	0	0	0	0	0	56,336,871	0	56,336,871	56,336,871
機材費	24,820,202	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24,820,202	0	24,820,202	24,820,202
諸会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	60,000	0	60,000	60,000
広報費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
補助金	0	0	0	2,000,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,000,000
雑費	907,732	0	0	0	0	0	0	0	0	0	907,732	791,906	1,699,638	1,699,638
租税公課	0	0	0	0	0	856,126	0	0	0	0	856,126	223,800	1,079,926	1,079,926
寄付金支出	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
特定資金支出(退職給付引当金)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他経費計	165,457,530	792,022	397,722	2,000,000	3,025,667	5,237,157	5,687,040	1,936,000	0	602,834	261,141	185,397,113	19,219,500	204,616,613
経常費用計	169,021,807	792,022	397,722	2,000,000	3,812,569	6,179,652	5,687,040	3,599,806	1,729,397	4,843,810	656,954	198,630,779	40,119,942	238,750,721
増減額	△27,054,217	△517,022	△397,722	△2,000,000	△3,812,569	14,701,625	△5,687,040	△2,406,306	△1,729,397	△4,843,810	△656,954	△34,313,412	△19,903,815	△23,319,597

※ 事務局の人件費(給与手当等)は担当業務別に合算し、事業費の各科目に按分しています。  
※ 別紙「第44回年会決算の取次」は、NPO法人会計基準に基づき本事業内訳書にて科目振分けがなされています。

# 【補足資料】第44回分子生物学会横浜年会収支決算書

## 【収入の部】

(単位：円)

項 目	内 訳	金 額	備 考
I 参加費収入		44,337,500	
1 正会員 事前	11,000×2,256名	24,816,000	
2 学生会員 事前	3,000×1,666名	4,998,000	
3 学部学生 事前	500×114名	57,000	
4 非会員 事前	15,000×167名	2,505,000	
5 正会員 後期 - 当日	(4,203名)	5,200,000	
6 学生会員 後期 - 当日	4,000×180名	720,000	
7 学部学生 後期 - 当日	500×438名	219,500	
8 非会員 後期 - 当日	17,000×372名	6,324,000	
9 展示会参加者	2,000×49名	98,000	
II 主催団体補助金		10,000,000	
1 日本分子生物学会本部補助金 I		5,000,000	定額補助
2 日本分子生物学会本部補助金 II		5,000,000	年会国際化支援
III プログラム販売		40,000	
1 オンライン要旨ID/PW (非会員)	10,000×4件	40,000	
IV 助成金		2,200,000	
1 ワークショップ・フォーラム開催助成 (冠費用)	100,000×19件	1,900,000	
2 「ERATO 胡桃坂クロマチンアトラスプロジェクト」後援費	300,000×1件	300,000	※市民公開講座 後援
V 広告関係費		7,244,000	
1 ホームページバナー広告	2,233,000×1式	2,233,000	
2 シンポジウム協賛プレゼンテーション (講演前)	176,000×5枠	880,000	
3 シンポジウム協賛プレゼンテーション (講演後)	88,000×1枠	88,000	
4 スクリーニング広告	110,000×5枠	550,000	
5 スクリーン広告	88,000×1枠	88,000	
6 キャンペーンチラシ広告	930,000×1式	930,000	
7 チェスビンスポッサー	55,000×3枠	165,000	
8 Email ショット	2,255,000×1式	2,255,000	
9 カタログスタンプ広告	55,000×1枠	55,000	
VI 商業展示出展料		66,622,370	
1 シルバースポッサー	1式	1,870,000	
2 プロンズポッサー	1式	1,265,000	
3 Aタイプ (1次, 3次)	390,500×126小間	49,203,000	
4 Aタイプ (2次)	407,000×13小間	5,291,000	
5 Bタイプ (1次, 3次)	132,000×11小間	1,452,000	
6 ACタイプ	220,000×13小間	2,860,000	
7 Aタイプ (特別価格)	340,000×14小間	4,760,000	
8 NBRP 特別展示 (W1,980)	160,270×11小間	1,762,970	
9 NBRP 特別展示 (W900)	79,200×27小間	2,138,400	
10 オンライン展示	110,000×4枠	440,000	
III バイオテクノロジーセミナー		13,860,000	
1 バイオテクノロジーセミナー 共催費 (出展なし)	1,320,000×3枠	3,960,000	
2 バイオテクノロジーセミナー 共催費 (出展あり)	1,100,000×9枠	9,900,000	
VIII 寄付金・助成金		6,062,000	
1 安全・安心な横浜 MICE 開催支援助成金	3,000,000×1件	3,000,000	
2 日本製薬団体連合会	2,812,000×1件	2,812,000	
3 西端弘志先生	200,000×1件	200,000	
4 中川真一先生	30,000×1件	30,000	
5 株式会社藤本理化	20,000×1件	20,000	
IX 雑収入		1,001,720	
1 出展社電気利用料	1式	878,500	
2 託児室利用料	1式	43,000	
3 販売協力金 (日本旅行)	1式	79,670	
4 口座利息	1式	150	
X 収支差額補填金		13,489,940	
I 差額補填金		13,489,940	学会本体より
合 計		165,457,530	

●上記 II (本部補助金 1,000 万円) と X (本部補填金 13,489,940 円) を除く収入の合計 141,967,590 円  
 ⇒本体会計の事業費内訳「年会」経常収益計へ

## 【支出の部】

(単位：円)

項 目	金 額	備 考
I 事前準備関係費	27,237,851	
1 旅費・交通費	100,300	
2 印刷費	27,137,551	
(1) 印刷費・制作費	15,764,040	
(2) 通信・運搬費	2,010,786	
(3) 会合費・旅費	10,136	
(4) 事務費	9,352,589	
II 当日運営関係費	121,084,600	
1 人件費	10,144,905	
2 旅費・交通費	1,245,650	
3 会場関係費	56,336,871	
4 機材・備品費	28,146,788	
5 看板装飾・ポスター・パネル費	8,264,850	
6 展示関係費	16,505,500	
7 招請関係費	440,036	
III 事後処理費	1,386,560	
1 会計監本費	330,000	
2 税理・会計事務経費	198,000	
3 オンライン要旨アーカイブ化費用	748,000	
4 会議費	110,560	
IV 業務委託費	15,748,519	
合 計	165,457,530	

●上記支出の合計 165,457,530 円⇒本体会計の事業費内訳「年会」経常費用計へ

監査報告書

特定非営利活動法人 日本分子生物学会  
理事長 白髭 克彦 殿

令和4年 11月 9日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事

荒木 弘之

令和4年 11月 9日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事

石野 史敏

私たちは、日本分子生物学会の令和4年度における財産並びに収支の状況について監査を行った。帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続を用いて計算書類の正確性を検討した結果、計算書類は、財産並びに収支の状況を正しく示していると認める。

以上

独立監査人の監査報告書

令和4年10月28日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会  
理事長 白髭 克彦 殿

宮城公認会計士事務所

公認会計士

宮城秀敏

私は、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の 令和3年10月1日から令和4年9月30日までの令和4年度の計算書類、すなわち、活動計算書、貸借対照表及び財産目録について監査を行った。この計算書類の作成責任は理事者にあり、私の責任は独立の立場から計算書類に対する意見を表明することにある。

私は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、私に計算書類に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、理事者が採用した会計方針及びその適用方法並びに理事者によって行われた見積りや評価も含め全体としての計算書類の表示を検討することを含んでいる。私は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

私は、上記の計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の令和4年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 と私との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

# 令和5年度（2023年度）活動予算書

## 令和5年度（2023年度）活動予算書

2022年10月1日から2023年9月30日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額	
I 経常収益		
1 受取入金		
正会員受取入金	350,000	
学生会員受取入金	1,300,000	1,650,000
2 受取会費		
正会員受取会費	52,000,000	
学生会員受取会費	9,200,000	
シニア会員受取会費	300,000	
次世代教育会員受取会費	100,000	
賛助会員受取会費	960,000	62,560,000
3 受取寄付金	5,900,000	5,900,000
4 受取助成金	15,200,000	15,200,000
5 事業収入		
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	187,500,000	
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	18,000,000	
(3)その他目的を達成するために必要な事業	1,200,000	206,700,000
6 その他収益		
受取利息	10,000	
雑収入	90,000	100,000
経常収益計		292,110,000
II 経常費用		
1 事業費		
(1)人件費		
給与手当	11,600,000	
法定福利費	1,860,000	
福利厚生費	10,000	
人件費計	13,470,000	
(2)その他経費		
業務委託費	92,870,000	
編集業務費	4,400,000	
印刷費	9,960,000	
通信運搬費	3,310,000	
旅費交通費	15,180,000	
会議費	700,000	
支払手数料	2,000,000	
消耗品費	3,500,000	
会場費	46,040,000	
機材費	43,120,000	
諸会費	60,000	
広報費	10,000	
補助金	4,500,000	
雑費	6,840,000	
租税公課	850,000	
その他経費計	233,340,000	
事業費計		246,810,000
2 管理費		
(1)人件費		
給与手当	17,500,000	
法定福利費	2,800,000	
福利厚生費	70,000	
人件費計	20,370,000	
(2)その他経費		
事務所家賃	4,000,000	
業務委託費	2,200,000	
会員管理システム運用管理費	2,700,000	
印刷費	1,700,000	
通信運搬費	2,800,000	
旅費交通費	2,000,000	
会議費	500,000	
支払手数料	1,900,000	
消耗品費	450,000	
雑費	800,000	
租税公課	2,000,000	
退職給付引当金繰入	2,100,000	
その他経費計	23,150,000	
管理費計		43,520,000
経常費用計		290,330,000
当期正味財産増加額		1,780,000
前期繰越正味財産額		187,010,000
次期繰越正味財産額		188,790,000

(単位：円)

# 令和5年度(2023年度)活動予算事業費の内訳

特定非営利活動法人 日本分子生物学会  
(単位:円)

科 目	(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業				(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業				(3)その他の目的を達成するために必要な事業			合計		
	第45回 総年会	年会その他 (MBS) - ASCB 企画補 助)	年会その他(年会 アンケート/ANSI・ EMBO 企画補助 費/年会招寄せ)	国際会議支援	会報発行	Genes to Cells 編集	Genes to Cells オンライン	ホームペー ジ 関係	社会貢献・ 教育活動	各種委員会 (キヤリアバ ス・男女共同 参画・その他)	事業費その他 (研究調理・ その他)	事業費計	管理部門	合計
I 経常収益														
1. 受取入会金	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,650,000	1,650,000
2. 受取会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	62,580,000	62,580,000
3. 受取寄付金	5,900,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5,900,000	0	5,900,000	5,900,000
4. 受取助成金	15,200,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15,200,000	0	15,200,000	15,200,000
5. 事業収入	187,500,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	187,500,000	0	187,500,000	187,500,000
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	0	0	0	0	0	18,000,000	0	0	0	0	18,000,000	0	18,000,000	18,000,000
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	0	0	0	0	0	0	1,200,000	0	0	0	1,200,000	0	1,200,000	1,200,000
(3)その他の目的を達成するために必要な事業	187,500,000	0	0	0	0	18,000,000	0	1,200,000	0	0	206,700,000	0	206,700,000	206,700,000
6. その他収益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100,000	100,000
経常収益計	208,600,000	0	0	0	0	18,000,000	0	1,200,000	0	0	227,800,000	0	227,800,000	227,800,000
II 経常費用														
(1) 人件費														
給与手当	3,000,000	0	0	0	700,000	850,000	0	1,400,000	1,500,000	3,800,000	11,600,000	0	17,500,000	29,100,000
法定福利費	500,000	0	0	0	100,000	130,000	0	220,000	250,000	600,000	1,860,000	0	2,800,000	4,660,000
福利厚生費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10,000	10,000	0	70,000	80,000
人件費計	3,500,000	0	0	0	800,000	980,000	0	1,620,000	1,750,000	4,410,000	13,470,000	0	20,370,000	33,840,000
(2) その他経費														
事務所家賃	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4,000,000	4,000,000
業務委託費	85,200,000	0	400,000	0	0	0	5,000,000	1,950,000	0	300,000	92,870,000	0	2,300,000	95,070,000
編集業務費	0	0	0	0	0	4,400,000	0	0	0	0	4,400,000	0	0	4,400,000
会員管理システム運用管理費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,700,000	2,700,000
印刷費	7,860,000	0	0	0	2,000,000	0	0	50,000	50,000	50,000	9,960,000	0	11,680,000	11,680,000
通信運搬費	2,260,000	0	0	0	1,000,000	0	0	50,000	0	0	3,310,000	0	2,800,000	6,110,000
旅費交通費	11,350,000	3,000,000	0	0	0	0	0	100,000	650,000	80,000	15,180,000	0	2,000,000	17,180,000
会議費	150,000	0	0	0	0	0	0	0	400,000	150,000	700,000	0	500,000	1,200,000
支払手数料	2,000,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,000,000	0	1,900,000	3,900,000
消耗品費	3,430,000	0	0	0	60,000	0	0	10,000	0	0	3,500,000	0	450,000	3,950,000
会費	46,040,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	46,040,000	0	46,040,000	46,040,000
機材費	43,120,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	43,120,000	0	0	43,120,000
諸会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	50,000	50,000	0	0	60,000
広報費	0	0	0	0	0	0	0	10,000	10,000	0	10,000	0	0	10,000
補助金	0	0	500,000	4,000,000	0	0	0	0	0	0	4,500,000	0	0	4,500,000
雑費	5,990,000	0	820,000	0	0	0	0	30,000	0	0	6,840,000	0	800,000	7,640,000
租税公課	0	0	0	0	0	850,000	0	0	0	0	850,000	0	2,000,000	2,850,000
特定預金支出(退職給付引当金)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,100,000	2,100,000
その他経費計	207,400,000	3,000,000	1,720,000	4,000,000	3,060,000	5,250,000	5,000,000	1,950,000	250,000	1,410,000	233,340,000	0	23,150,000	256,490,000
経常費用計	210,900,000	3,000,000	1,720,000	4,000,000	3,860,000	6,230,000	5,000,000	3,570,000	2,000,000	5,820,000	246,810,000	0	43,520,000	290,330,000
増減額	-2,300,000	-3,000,000	-1,720,000	-4,000,000	-3,860,000	11,770,000	-5,000,000	-2,370,000	-2,000,000	-5,820,000	-19,010,000	0	20,790,000	1,780,000

※ 45 回年会への本館補助金は 500 万円  
年会会費の取支計算は納税準備金を含め約 620 万円の剰余金を予定 (2022.11.4 現在試算)

※ 事務局の人件費(給与手当等)は担当業務量に合わせ、事業費の各科目に按分計上しています。

## 学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、賞推薦委員会または研究助成選考委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問い合わせ、申請書類を各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

### 1. 提出物

- 1) 本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）
- 2) 本学会の選考委員会審査用に、上記申請書類のコピー1部
- 3) 論文（別刷は各種財団等応募先の必要部数をご用意下さい。委員会用の論文は不要です）
- 4) 上記1) 2) 3) の送付とは別に、学会用控として申請書の電子データ（論文は不要）を学会事務局（info@mbsj.jp）まで送信して下さい。  
電子データは Word、PDF ファイルのいずれでも結構です。  
\*必ず学会の締切日までに郵送資料と電子データの両方が到着するようにご手配下さい。

### 2. 提出先

#### ※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会・賞推薦委員長 齊藤 典子  
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5  
人材開発ビル 4階  
日本分子生物学会事務局気付

#### ※研究助成についての送付先

日本分子生物学会・研究助成選考委員長 杉本 亜砂子  
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5  
人材開発ビル 4階  
日本分子生物学会事務局気付

### 3. 提出期限

財団等の締切りの1カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。推薦手続きのことでご不明な点がありましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

#### ※研究助成（学会推薦）に関する留意事項

学会推薦した会員が財団等の研究助成対象者となった場合には、その研究成果を将来、学会誌「Genes to Cells」に論文あるいは総説として発表して頂くように要請いたします。

応募に際しては、その旨をご了解くださるようお願いいたします。

#### ※各種学術賞（学会推薦）に関する留意事項

- 委員会の内規により、外部財団等の各種学術賞への推薦は、原則として一人につき年度あたり1件となっておりますので、ご了解ください。  
（本学会の事業年度は10月1日から翌年9月30日までです）
- 重複申請があった場合、すでにある賞等の推薦が決定されている候補者は、それ以降審査する他の賞等の推薦候補者として原則的に考慮いたしません。応募に際し、ご留意くださるようお願いいたします。

## 学術賞、研究助成一覧

名称	連絡先	件数	締切	助成内容等	概要
第54回三菱財団 自然科学研究助成	(公財)三菱財団 〒100-0005 千代田区丸の内2-3-1 TEL:(03)3214-5754	総額 3億3,000万円	2023年 2月3日	1件当たり 2,000万円まで	自然科学のすべての分野にかかわる独創的かつ先駆的研究を支援。
山田科学振興財団 2023年度研究援助	(公財)山田科学振興財団 〒544-8666 大阪市生野区巽西1-8-1 TEL:(06)6758-3745	18件程度、女性研究者3名以上を採択予定 (本学会の推薦枠は6件)	2022年 2月28日	1件当たり 150~300万円、 総額4,000万円	自然科学の基礎的研究に対する研究費援助。 研究援助趣旨: 1)萌芽的・独創的研究 2)新規研究グループで実施される研究 3)学際的、国際性の観点からみて優れた研究 〔2022年より、山田財団電子申請システムが導入されている。山田財団HP参照。〕
山田科学振興財団 国際学術集会開催助成 (2025年開催)	(公財)山田科学振興財団 〒544-8666 大阪市生野区巽西1-8-1 TEL:(06)6758-3745	1件	2022年 4月1日~ 2023年 2月28日 (募集期間)	最大 800万円	以下の要件を満たす学術集会を山田コンファレンスもしくは山田シンポジウムと称し、これらの開催を援助する。 ①基礎科学の適切なテーマについて、国際的視野で最高レベルの研究を総括する。 ②研究者の世代間の対話によって、若い世代の研究の発展の基礎を構築する。 詳細 山田財団HP参照。
第39回国際生物学賞	国際生物学賞委員会 〒102-0083 千代田区麹町5-3-1 日本学術振興会内 TEL:(03)3263-1872/1869	1件 (1件)	2023年 4月14日	賞状、賞牌、 1,000万円	生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術進歩に大きな貢献をした研究者。授賞分野は、国際生物学賞委員会が毎年決定する。授賞分野は、国際生物学賞委員会が毎年決定する。第39回の授賞分野は「ゲノム生物学 (Biology of Genomes)」。
2023年度 持田記念学術賞	(公財)持田記念医学薬学振興財団 〒160-0003 新宿区四谷本塩町3-1 四谷ワイズビル TEL:(03)3357-1282	2件以内 (1件)	2023年* 5月16日	1件1,000万円	学術賞は次の6項目の研究分野で、研究の進歩発展のため顕著な功績のあった研究者に贈呈。 (1)バイオ技術を基盤とする先端医療に関する研究 (2)バイオ技術を基盤とするゲノム機能/病態解析に関する研究 (3)免疫/アレルギー/炎症の治療ならびに制御に関する研究 (4)循環器/血液疾患の病態解析/治療制御に関する研究 (5)創薬・創剤の基盤に関する研究 (6)創薬の臨床応用に関する研究
2023年度 研究助成	(公財)持田記念医学薬学振興財団 〒160-0003 新宿区四谷本塩町3-1 四谷ワイズビル TEL:(03)3357-1282	総額 3億7,500万円 125件	2023年* 5月2日	1件300万円	
2023年度留学補助金	(公財)持田記念医学薬学振興財団 〒160-0003 新宿区四谷本塩町3-1 四谷ワイズビル TEL:(03)3357-1282	総額 1,000万円 20件	2023年* 5月11日	1件50万円	
2024年度笹川科学研究助成	(公財)日本科学協会 〒107-0052 港区赤坂1-2-2 日本財団ビル TEL:(03)6229-5365	生物系で160件 (2022年度実績)	募集期間 2023年* 9月15日~ 10月16日	1件当たり100万円まで	人文・社会科学および自然科学(医学を除く)の独創性・萌芽性をもつ研究に関するもの。4月1日現在、35歳以下の若手研究者へ助成。
上原賞	(公財)上原記念生命科学財団 〒171-0033 豊島区高田3-26-3 TEL:(03)3985-3500	2件以内 (1件)	2023年* 9月1日	金牌、 3,000万円	生命科学の東洋医学、体力医学、社会医学、栄養学、薬学一般および基礎医学、臨床医学、生命科学と他分野との融合領域で顕著な業績を挙げ、引き続き活躍中の研究者。 〔推薦書は上原財団webシステムにあり、事前に分生事務局〔info@mbsj.jp〕に連絡要。〕
第40回井上学術賞	(公財)井上科学振興財団 〒150-0036 渋谷区南平台町15-15-601 TEL:(03)3477-2738	5件以内 (2件)	2023年* 9月15日	賞状、金メダル、 200万円	自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績を挙げた者(ただし締切日現在、50歳未満の者)。
第40回井上研究奨励賞	(公財)井上科学振興財団 〒150-0036 渋谷区南平台町15-15-601 TEL:(03)3477-2738	40件	2023年* 9月15日	賞状及び銅メダル、 50万円	過去3年間に、理学・工学・医学・薬学・農学等の自然科学の基礎的研究において、新しい領域を開拓する可能性のある優れた博士論文を提出し博士の学位を取得した研究者で、37歳未満の者。
第16回井上リサーチアワード	(公財)井上科学振興財団 〒150-0036 渋谷区南平台町15-15-601 TEL:(03)3477-2738	4名以内 (うち1名以上女性研究者)	2023年* 7月31日	1人当たり 500万円	開拓的発展を目指す若手研究者の独創性と自立を支援する目的で、研究を助成。研究期間は2年。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第32回木原記念財団 学術賞	(公財)木原記念横浜生命科学 振興財団 〒230-0045 横浜市鶴見区末広町1-6 TEL:(045)502-4810	1件 (1件)	2023年* 9月29日	賞状、 200万円	生命科学の分野で優れた独創的 研究を行っている国内の研究者 であり、今後のさらなる発展が 大きく期待できる者。原則とし て締切日現在50歳以下を対象と する。
第7回バイオ インダストリー大賞	(一財)バイオインダストリー協会 〒104-0032 中央区八丁堀2-26-9 グランデビル8F TEL:(03)5541-2731	1件	2023年* 5月6日	賞状、賞牌、 副賞300万円	バイオサイエンス、バイオテク ノロジーおよびバイオインダス トリーの分野の発展に大きく貢 献した、または今後の発展に大 きく貢献すると期待される業績 を上げた個人、少人数のグルー プまたは組織に授与される。
第7回バイオ インダストリー奨励賞		10件以内	2023年* 5月6日	賞状および 副賞30万円	バイオサイエンス、バイオテク ノロジーに関連する応用を指向 した研究で、 ④医薬・ヘルスケア ⑤食品・第一次産業 ⑥化学・材料・環境・エネルギー などの分野で産業を生み出す研 究であり、これらの分野に携わ る有望な若手研究者を対象とす る。年齢45歳未満。
住友財団2022年度 基礎科学研究助成	(公財)住友財団 〒105-0012 港区芝大門1-12-6 住友芝大門ビル2号館 TEL:(03)5473-0161	総額 1億5,000万円 90件程度	2023年* 6月30日	1件当たり500万 円まで	理学(数学、物理学、化学、生物学) の各分野及びこれらの複数にま たがる分野の基礎研究で萌芽的 なもの。若手研究者(個人また はグループ)を対象とする。
第64回藤原賞	(公財)藤原科学財団 〒104-0061 中央区銀座3-7-12 TEL:(03)3561-7736	2件 (推薦件数に制 限なし)	2022年 11月15日	副賞1,000万円	推薦の対象は自然科学分野に属 するもの。わが国に国籍を有し、 科学技術の発展に卓越した貢献 をした者。
科学技術分野の 文部科学大臣表彰 科学技術賞および 若手科学者賞	文部科学省 研究振興局振興企画課奨励室 〒100-8959 千代田区霞が関3-2-2 TEL:(03)6734-4071	科学技術賞95 件(年)のうち、 研究部門は48 件(令和4年 度) 若手科学者賞 は100名程度 (学会推薦枠は定 まっていないが推 薦は若干名まで)	2023年* 7月21日	表彰状及び副賞	我が国の科学技術の発展等に寄 与する可能性の高い独創的な研 究又は発明を行った個人又はグ ループを表彰。 萌芽的な研究、独創的視点に立 った研究等、高度な研究開発能 力を示す顕著な研究業績を挙げ た40歳未満の若手研究個人。
2023年度島津賞	(公財)島津科学技術振興財団 〒604-8445 京都市中京区 西ノ京徳大寺町1 TEL:(075)823-3240	1件 (推薦件数に制 限なし)	2023年* 7月31日	賞状、賞牌、 副賞500万円	科学技術、主として科学計測に 係る領域で、基礎的研究および 応用・実用化研究において、著 しい成果をあげた功労者を対象 とする。
2023年度島津奨励賞		3件 (推薦件数に制 限なし)	2023年* 7月31日	賞状、トロフィー、 副賞100万円	わが国の科学技術振興を目的と して、科学技術、主として科学 計測に係る領域で、基礎的研究 および応用・実用化研究におい て独創的成果をあげ、かつその 研究の発展が期待される研究者 を表彰する。対象者は45歳以下。
島津科学技術振興 財団研究開発助成		総額 2,300万円	2023年* 7月31日	1件100万円	科学技術、主として科学計測に 係る領域で、基礎的研究を対象 とする。国内の研究機関に所属す る45歳以下の新進気鋭の研究者。 国籍不問。
東レ科学技術賞	(公財)東レ科学振興会 〒103-0021 中央区日本橋本石町3-3-16 (日本橋室町ビル) TEL:(03)6262-1655	2件以内 (2件)	2023年* 10月6日	1件につき 賞状、金メダル、 500万円	理学・工学・農学・薬学・医学(除 臨床医学)の分野で、学術上の 業績顕著な者、学術上重要な発 見をした者、効果が大きい重要 な発明をした者、技術上の重要 問題を解決し貢献が大きい者。
東レ科学技術研究助成		総額 1億3,000万円 10件程度 (2件)	2023年* 10月6日	特に定めず最大 3,000万円程度 まで	今後の研究の成果が科学技術の 進歩・発展に貢献するところが 大きいと考えられる、独創的、 萌芽的な研究を活発に行ってい る若手研究者(原則として45歳 以下)。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
ノバルティス研究 奨励金	(公財)ノバルティス科学振興財団 〒106-6333 港区虎ノ門1-23-1 虎ノ門ヒルズ森タワー 31F TEL:(03) 6899-2100	約37件 指定機関から の推薦必要	2023年* 9月15日	1件100万円	生物・生命科学、関連する化学 および情報科学の領域における 創造的な研究に対して助成。
第55回内藤記念科学 振興賞	(公財)内藤記念科学振興財団 〒113-0033 文京区本郷3-42-6 NKDビル8F TEL:(03) 3813-3861	1件 (1件)	2023年* 9月20日	金メダル、 1000万円	人類の健康の増進に寄与する自然 科学の基礎的研究において、 独創的テーマに取り組み、その 進歩発展に顕著な功績を挙げた 研究者。 ※応募(書類作成用)のための 本学会専用URLが設定されま す。詳細は学会事務局(info@ mbsj.jp)まで。
第55回海外学者 招へい助成金		前期・後期 各10件以内 (前期・後期 各々1件)	2023年* 5月31日・ 9月20日	1件20~80万円 まで (エリアによる)	同上のテーマに取り組み、国際 的に高い評価を得ている外国の 研究者を招へいする受入れ責任 者(当該学術集会の組織委員長) に助成。
ブレインサイエンス 財団研究助成		15件以内	2023年* 10月6日	1件80~100万円	脳科学の広い分野における研究 に対して助成を行うが、特に脳 のメカニズムを解明する独創的 な研究計画の助成に重点をおく。 研究分野は実験研究のみならず、 理論、モデリング研究も含む。
塚原伸晃記念賞	(公財)ブレインサイエンス振興 財団 〒104-0028 中央区八重洲2-6-20 ホンダ八重洲ビル TEL:(03) 3273-2565	1件		賞牌ならびに 副賞100万円	生命科学の分野において優れた 独創的研究を行っている50歳以 下の研究者。
海外派遣研究助成		若干件	2024年* 1月12日	1件30万円まで	我が国における脳科学の研究の促 進を図るため、国際学会、シンポ ジウム等への参加、あるいは短期 間の研究者の海外派遣を助成。
海外研究者招聘助成		若干件		1件30万円まで	脳科学研究分野において独創的 テーマに意欲的に取り組んでいる 外国人研究者の短期間の招聘 を助成。
2023年 コスモス国際賞	(公財)国際花と緑の博覧会記念 協会 〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園2-136 TEL:(06) 6915-4513	1件 (1件)	2023年* 4月15日	賞状、メダル、 副賞4,000万円	花と緑に象徴されるすべての生 命現象に関し、地球的視点にお ける生命体相互の関係性、統合 成の本質を解明しようとする研 究や業績を対象とする。
2024年度研究助成	(公財)長瀬科学技術振興財団 〒550-8668 大阪市西区新町1-1-17 TEL:(06) 6535-2117	25件程度	2023年* 11月1日	1件250万円	有機化学(材料化学を含む)及 び生化学並びに関連分野にお ける研究が助成対象。
第20回日本学術 振興会賞	(独)日本学術振興会 研究者養成課 「日本学術振興会賞」担当 〒102-0083 千代田区麹町5-3-1 TEL:(03) 3263-0912	25件程度 (機関長推薦 扱いとして 学会推薦枠 も若干件あ り)	2023年* 3月30日~ 4月4日 (受付日)	賞状、賞碑、 研究奨励金 110万円	人文、社会科学及び自然科学に わたる全分野が対象。博士の学 位を取得しており、国内外の学 術誌等に公表された論文、著書、 その他の研究業績により学術上 特に優れた成果を上げたと認め られた研究者(45歳未満)。
第14回日本学術 振興会育志賞		16件程度 (1件)	2023年* 5月26日~ 5月31日 (受付日)	賞状、賞碑、 学業奨励金 110万円	我が国の学術研究の発展に寄与 することが期待される優秀な大 学院博士課程の学生を顕彰(34 歳未満)。
(一財)材料科学技術 振興財団 山崎貞一賞	(一財)材料科学技術振興財団 〒157-0067 世田谷区喜多見1-18-6 TEL:(03) 3415-2200	各分野 1件	2023年 4月15日	賞状、 賞金300万円	授賞対象は、「材料」、「半導体及 びシステム・情報・エレクトロ ニクス」、「計測評価」、「バイオ ・医学」の4分野からなり、う ち2分野が毎年の授賞対象とさ れる。論文の発表、特許の取得、 方法・技術の開発等を通じて、 実用化につながる優れた業績を あげている者。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
令和5年度研究助成		30~35件 総額 5,000万円	2023年* 7月15日	助成金総額 約5,000万円	光科学に関係する研究に対して 助成。対象課題有り。
令和5年度 晝馬輝夫 光科学賞	(公財)光科学技術研究振興財団 〒430-0926 浜松市中区砂山町325-6 TEL:(053)454-0598	1件	2023年* 6月30日	副賞 500万円	日本の光科学の基礎研究や光科学技術の発展に貢献する研究において、独自に独創的な研究業績を挙げた研究者個人。(応募締切時点で45歳未満) 外国籍の場合は、日本の大学等公的機関に5年以上在籍し、その間に対象となる研究成果の中核を形成された方。
2023年度朝日賞	朝日新聞社 CSR推進部 「朝日賞」事務局 〒104-8011 中央区築地5-3-2 TEL:(03)5540-7453	ここ最近 は4~5件 (1件)	2023年* 8月25日	正賞(ブロンズ像) と副賞500万円	学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大の貢献をされた個人または団体に贈られる。
第35回加藤記念 研究助成	(公財)加藤記念バイオサイエンス 研究振興財団 〒194-8533 町田市旭町3-6-6 TEL:(042)725-2576	総額 5,000万円	2023年* 9月30日	1件200万円	バイオサイエンスの基礎分野において、独創的かつ先駆的研究をめざす国内の若手研究者(40歳以下)を支援する。
第13回(2024年度) 三島海雲学術賞	(公財)三島海雲記念財団 〒150-0012 渋谷区広尾1-6-10 ジラフファビル TEL:(03)5422-9898	自然科学部門 で2件以内 (2件)	2023年* 9月29日	賞状、 副賞300万円	自然科学部門は、食の科学に関する研究が対象。国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により独創的で発展性のある顕著な業績を挙げている45歳未満の若手研究者。
2023年度 三島海雲学術研究 奨励金(研究助成)		全部門計 80件程度	2023年 1月10日 ~2月28日	個人研究奨励金は 1件100万円	食の科学に関する学術研究。若手研究者および女性研究者の積極的応募を期待する。
第11回ヤマト科学賞	ヤマト科学(株)内 ヤマト科学賞選考委員会事務局 〒135-0047 江東区富岡2-11-6 HASEMANビル TEL:(03)5639-7070	1件	2023年* 11月30日	賞状、賞牌、 副賞100万円	独創性、創造性に富む、気鋭の研究者を顕彰。対象分野はライフサイエンス、マテリアルサイエンス、インフォメーションサイエンス等の自然科学、技術分野およびその融合領域分野。
2023年度 小野医学研究助成		15件以内	2023年* 6月1日 ~7月31日 (受付日)	1件200万円	助成テーマは脂質代謝異常に伴う疾患の病態生理に関する研究(2021年度)①基礎医学②臨床医学③疫学④薬学⑤その他の領域 研究奨励助成は満40歳以下に限る。
2023年度 小野医学研究奨励 助成	(公財)小野医学研究財団 〒541-8526 大阪市中央区道修町2-1-5 TEL:(06)6232-1960	15件以内		1件100万円	
第7回早石修記念賞		1件 (1件)	2023年* 8月31日	正賞(楯)、 副賞500万円	脂質研究において、独創的な研究による新しい分野の確立等、その進展に著名な功績をあげた研究者。
第28回慶應医学賞	慶應義塾医学振興基金事務室 〒160-8582 新宿区信濃町35 TEL:(03)5363-3609	2件[国内1名、 国外1名] (若干名)	2023年 3月5日	メダル、 副賞1,000万円	基礎医学・臨床医学ならびに医学に密接に関連した生命科学の諸領域で活躍されている研究者が対象。
大隅基礎科学創成 財団第7期研究助成	(公財)大隅基礎科学創成財団 事務局 〒226-8503 横浜市緑区長津田町4259 S2-16 TEL:(045)459-6975	基礎科学 (一般)で 6~10件	2023年* 6月30日	1件1,200万円まで	細胞・組織・個体の新しい生理現象の発見とその分子機構の解明、をテーマとする基礎研究を支援。
		基礎科学 (酵母)で 3件程度		1件500万円まで	新しい生理現象の発見やその分子機構の解明等、人類と深い関わりのある酵母を対象としたこの生物種ならではの基礎研究をテーマとして支援。
第5回小林賞	(公財)小林財団東京事務所 〒106-0032 港区六本木1-7-27 全特六本木ビル East TEL:(03)5575-7525	1件 (1件)	2023年* 9月16日	賞状、賞牌、 副賞3,000万円	医学、薬学、農学、工学、理学などの生命科学に関する分野において、独創的な研究を行い、顕著な成果を挙げ、さらにその後も当該研究分野の発展が期待される国内の研究者を対象とする。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
2023 年度 地神芳文記念 研究助成金	理化学研究所 環境資源科学研究センター内 (特非) 酵母細胞研究会 〒 351-0198 和光市広沢 2-1 TEL : (048) 462-1335	2~3 件	2023 年 4 月 14 日	1 件 50 万円以内	酵母あるいは糖鎖に関する研究を助成。基礎あるいは応用の別を問わない。39 歳以下を対象者とする。
2024 年度 一般研究助成	(公財) 発酵研究所 〒 532-8686 大阪市淀川区十三本町 2-17-85 TEL : (06) 6300-6555	全研究課題で 65 件 (2022 年 度助成実績)	2023 年* 7 月 31 日	1 件 300 万円	研究課題あり。 (1)微生物の分類に関する研究(分離、分類、保存) (2)微生物の基礎研究(生化学、構造、遺伝、生理、生態、進化など) (3)微生物の応用研究(発酵、生理活性物質、プロバイオティクス、環境保全、バイオエネルギーなど)
2024 年度 大型研究助成		3~5 件	2023 年* 7 月 31 日	1 件 1,000 万円	
2024 年度 若手研究者助成		10~12 件	2023 年* 7 月 31 日	1 件 300 万円	35 歳以下を対象とし、以下の研究課題あり。 (1)微生物の分類に関する研究(分離、分類、保存) (2)微生物の基礎研究(生化学、構造、遺伝、生理、生態、進化など)
2023 年度 (第 21 回) 高峰記念第一三共賞	(公財) 第一三共生命科学研究 振興財団 〒 103-8234 中央区日本橋 3-14-10 TEL : (03) 3243-9061	1 件 (若干件)	2023 年 2 月 20 日	賞状、賞牌、 副賞 2,000 万円	日本国内において、生命科学分野での基礎・臨床研究並びに技術開発、特に疾病の予防と治療の進歩・発展に顕著な功績をあげた研究者(同一分野での複数名の同時推薦も可)や団体。
令和 5 年度 (2023 年 度) 安田記念医学財団 安田医学賞	(公財) 安田記念医学財団 〒 558-0002 大阪市住吉区長居西 2-10-10 TEL : (06) 4700-4556	1 件 (1 件)	2023 年* 6 月 30 日	1 件 500 万円 (研究助成金)	大学の医学部、医科大学、医学研究所、癌中核病院等において、永年癌の予防と治療に関する研究に携わり、顕著な業績を挙げ、卓抜した能力を有し、癌制圧に熱意のある研究者(国内在住者)。

●件数の ( ) 内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。

\*は、本年度の案内を受取っておらず、昨年の締切日を参考に示してあります。

締切日を過ぎているものは、本年度応募は終了していますが、参考資料として掲載しました。

---

## 日本分子生物学会 賛助会員一覧

(2023年2月現在)

アサヒグループホールディングス株式会社  
株式会社エー・イー企画  
科研製薬株式会社 新薬創生センター  
コスモ・バイオ株式会社  
株式会社 seeDNA 法医学研究所  
ジェンスクリプトジャパン株式会社  
第一三共株式会社 モダリティ研究所  
タカラバイオ株式会社 事業開発部  
株式会社ダスキン 開発研究所  
中外製薬株式会社  
株式会社東海電子顕微鏡解析  
東洋紡株式会社 バイオプロダクト営業部  
株式会社トミー精工  
ナカライテスク株式会社  
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ  
浜松ホトニクス株式会社 システム営業部  
富士レビオ株式会社 研究推進部 バイオ研究グループ  
フナコシ株式会社  
三菱ケミカル株式会社  
ヤマサ醤油株式会社 R&D 管理室  
湧永製薬株式会社 研究管理部 研究管理課  
ワケンビーテック株式会社 学術部

(22社、50音順)

■第 46 回日本分子生物学会年会 (MBSJ2023)

公式ウェブサイト

URL: <https://www2.aeplan.co.jp/mbsj2023/>

Twitter アカウント

URL: [https://twitter.com/mbsj\\_2023/](https://twitter.com/mbsj_2023/)

■日本分子生物学会

公式ウェブサイト

URL: <https://www.mbsj.jp/>

Facebook アカウント

URL: <https://www.facebook.com/mbsj1978/>

特定非営利活動法人

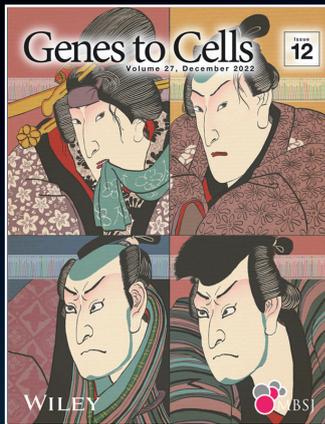
日本分子生物学会 事務局

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 2-11-5

人材開発ビル 4 階

TEL: 03-3556-9600 FAX: 03-3556-9611

E-mail: [info@mbsj.jp](mailto:info@mbsj.jp)



# Genes to Cells

Published on behalf of the Molecular Biology Society of Japan

Edited by: Eisuke Nishida

Frequency: Monthly | Impact Factor 2.300

日本分子生物学会の学会誌Genes to Cellsは、分子生物学の優れた研究成果を掲載し、著者にとって有益な学術情報や先見性の高い最新の研究情報を提供しています。全世界13,000以上の機関で読まれており、年間380,000件以上のダウンロード数を誇ります。是非Genes to Cellsにご投稿ください。

## Genes to Cells 投稿の利点

- わかりやすく便利なオンライン投稿システム
- カラー掲載料無料
- 出版までの過程をお知らせするAuthor Servicesをご利用いただけます
- 早期出版EarlyViewサービスにより、最新号への掲載を待たずにオンラインで出版されます
- 出版後6カ月経過した全論文が無償公開となり、世界中からアクセス可能になります
- オープンアクセス希望者はオプションで『Open Access』（有料）を選択できます
- 総説は日本分子生物学会のサポートをうけ、出版と同時に無料公開されます

オンライン投稿はこちら <https://mc.manuscriptcentral.com/gtc>

2020年・2021年出版 引用数TOP論文 \*2022年12月現在

### Tree of motility - A proposed history of motility systems in the tree of life (Volume 25, Issue 1)

Miyata, M; Robinson, R. C.; Uyeda, T. Q. P.; Fukumori, Y; Fukushima, S; Haruta, S; Homma, M; Inaba, K; Ito, M; Kaito, C; Kato, K; Kenri, T; Kinosita, Y; Kojima, S; Minamino, T; Mori, H; Nakamura, S; Nakane, D; Nakayama, K; Nishiyama, M; Shibata, S; Shimabukuro, K; Tamakoshi, M; Taoka, A; Tashiro, Y; Tulum, I; Wada, H; Wakabayashi, K

### miR-29c-3p inhibits microglial NLRP3 inflammasome activation by targeting NFAT5 in Parkinson's disease

(Volume 25, Issue 6)

Wang, R; Li, Q; He, Y; Yang, Y; Ma, Q; Li, C

### m<sup>6</sup>A demethylase ALKBH5 promotes proliferation of esophageal squamous cell carcinoma associated with poor prognosis (Volume 25, Issue 8)

Nagaki, Y; Motoyama, S; Yamaguchi, T; Hoshizaki, M; Sato, Y; Sato, T; Koizumi, Y; Wakita, A; Kawakita, Y; Imai, K; Nanjo, H; Watanabe, H; Imai, Y; Minamiya, Y; Kuba, K



iPhone, iPad 用ジャーナルアプリ  
を使って閲覧できます。

← 無料ダウンロード

## ジャーナル閲覧ページ

[www.wileyonlinelibrary.com/journal/gtc](http://www.wileyonlinelibrary.com/journal/gtc)

日本分子生物学会員は無料でアクセスできます。

初回ユーザー登録は学会事務局まで ([info@mbsj.jp](mailto:info@mbsj.jp))

登録後の問合せはWileyまで ([cs-japan@wiley.com](mailto:cs-japan@wiley.com))



WILEY

# The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

(年3回刊行)

**第135号** (2023年2月)

発行——特定非営利活動法人 日本分子生物学会

代表者——後藤 由季子